

目 次

序 論.....	3
第 1 章 問題意識と目的.....	5
第 2 章 理論と先行研究.....	11
2.1 文化受容ストレス理論 (Berry)	12
2.2 リソース・ストレス理論 (Hobfoll)	20
2.3 パーソナリティの気質・性格 7 因子理論 (Cloninger)	22
2.4 パーソナリティ及びリソースの働き	27
2.4.1 パーソナリティから異文化適応への影響	27
2.4.2 ソーシャル・サポートと適応の関連	29
2.4.3 パーソナリティとソーシャル・サポートの関連	30
2.4.4 パーソナリティとソーシャル・サポートと異文化適応の関連	30
2.4.5 内的リソースと外的リソースの相互影響	31
2.4.6 異文化適応変数間の関連	32
2.4.7 パーソナリティとリソース, 異文化適応の関連についての仮説	33
2.5 異文化接触前後のパーソナリティ	35
2.5.1 異文化滞在者のパーソナリティの特徴	35
2.5.2 異文化接触によるパーソナリティの変化	36
第 3 章 本論文の構成	39
3.1 本論文の構成	40
3.2 本論文のデータソース	43
3.3 調査対象者の特徴	46
本 論.....	49
第 I 部 留学生のパーソナリティ特性	51
第 4 章 留学志向によるパーソナリティの特徴	53
4.1 留学志向者と非留学志向者のパーソナリティ比較 (研究 1)	54
第 5 章 留学効果によるパーソナリティの変化	61
5.1 留学 1 年間におけるパーソナリティの変化 (研究 2)	63
5.2 留学生と非留学生のパーソナリティ比較 (研究 3)	69
第 II 部 パーソナリティと異文化適応の関連	77
第 6 章 在日中国人留学生の異文化適応の実態	79
6.1 留学 1 年目の異文化適応実態 (研究 4)	80
6.2 留学 1 年間における異文化適応状態の変化 (研究 5)	87
第 7 章 パーソナリティの異文化適応への影響	97
7.1 パーソナリティと異文化適応の相関関係 (研究 6)	98

7.2 パーソナリティと異文化適応の因果関係（研究 7）	104
第 8 章 リソースの媒介作用	117
8.1 パーソナリティと異文化適応の間：リソースの媒介作用（研究 8）	118
結 論	129
第 9 章 本論の総括と今後の展望	131
9.1 第 I 部の総括	132
9.2 第 II 部の総括	134
9.3 本論の総合考察	137
9.4 本論文の貢献	139
9.5 パーソナリティ視点からの提言	142
9.6 本研究の限界と今後の課題	144
補 論	149
自文化への再適応：帰国後の適応状態および適応困難の原因	151
引用文献	163

序 論

第 1 章 問題意識と目的

1983年に日本政府が「10万人留学生計画」を発表して以来、来日留学生数は増え続けている。2008年には日本政府がまた「留学生30万人計画」（日本への留学生を2020年までに30万人に増やすという計画）を掲げ、その政策によって、今後も留学生数は増えていくだろう。独立行政法人日本学生支援機構（JASSO、2013）の「外国人留学生在籍状況調査結果」では、平成24年5月1日現在の外国人留学生数は137,756人に達したと報告されている。Figure1.1は近年の留学生数の推移を示している。

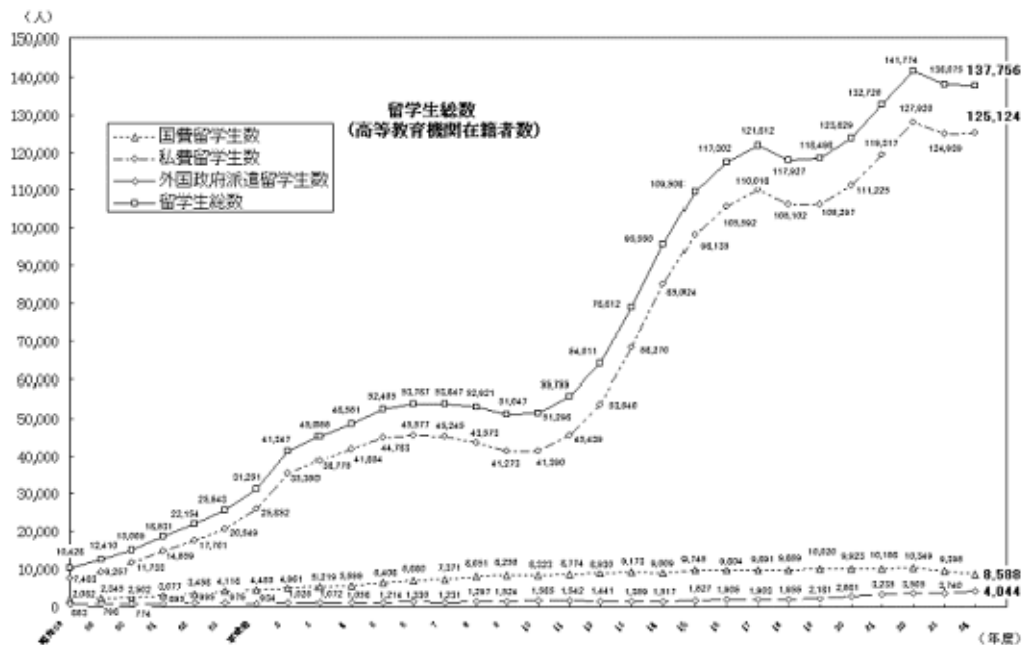


Figure1.1 留学生数の推移（各年5月1日現在）

（出典：独立行政法人日本学生支援機構，平成24年度外国人留学生在籍状況調査結果）

注．平成24年5月1日現在，日本語教育機関に在籍する外国人留学生数は24,092人（上記留学生総数には含まれない）

Table1.1 出身国（地域）別留学生数上位 5 位（平成 24 年度）

国(地域)名	留学生数	構成比
中国	86,324人	62.70%
韓国	16,651人	12.10%
台湾	4,617人	3.40%
ベトナム	4,373人	3.20%
ネパール	2,451人	1.80%

（独立行政法人日本学生支援機構，平成 24 年度外国人留学生在籍状況調査結果より）

留学生の増加とともに彼らの日本社会への適応問題が課題となり，適応の実態から適応に関連する要因について，さらに不適応への対応まで幅広く検討がなされてきている（井上，1997；葛，1999；徐・蔭山，1994）。

その中，中国出身の留学生数は 86,324 人に達し，在日留学生の約 63%を占めていることが分かる（Table1.1）。中国では 1978 年の改革開放国策とともに，留学政策も回復期・模索期，成熟期，発展期を経て，大勢の若者が海外に乗り出した。特に近年来，中国の経済発展につれて，中国国民の経済水準が継続的に改善され，多くの家庭が子どもを海外で学習させる経済能力を備えるようになっていくことで，私費留学生が 90%以上を占め，主流となっている（唐，2012）。中国教育省の統計によると，改革開放から 2008 年までの間の海外留学者数は累計 122.8 万人に達した。2011 年には中国から海外への新規留学生数が約 34 万人に達し，外国滞在中の留学生数は累計 142 万人を超え，海外への留学生数が世界最多だということが明らかになった。2010 年度の統計によると，日本は留学先上位第 3 位である（唐，2012）。2011 年の東日本大震災にもかかわらず，上述した JASSO の統計（2011 年 5 月 11 日現在）によると，日本語学校に在籍している中国人学生も含めると，在日中国人留学生は 10 万 4887 人で，2003 年以来再び 10 万人の大台を突破した。今後も日本へ留学する中国人が増えていくことが考えられる。

日本に滞在している留学生全体の 6 割強を占める中国人留学生が日本でどのような留学生生活を送るかは、彼ら自身の青年期から成人期にかけての発達に大きく影響するだけでなく、滞在中の日本の社会の安全や安定、さらに母国である中国の今後の発展にも影響を及ぼし得る重要な問題であると考えられる。

人は新しい環境へ移行した後、環境と快適な関係を保つために、適応問題に直面する。特に異文化環境にある場合、自分の馴染んだ文化、習慣と異なる環境は適応に対する心理的負担はさらに大きいものとなる（劉・服部，2012）。仕事や家族移住のため海外で生活する人と比べると、経済力も生活力も弱い留学生は最も不適応の多い集団であると指摘されており（稲村，1980）、留学生の不適応の問題は早急に解決されるべきであり、そのための基礎的な研究がより活発におこなわれる必要がある。

欧米では、留学生の受け入れの歴史が長く、高等教育機関在学者数に対する留学生数の割合も高く、留学生の異文化適応に関する研究成果が蓄積されてきた。しかし、渡航者の出身地の社会文化的文脈特性や、留学先の社会文化的文脈特性を無視する研究では、個々の留学生の適応過程を十分に理解することができない（Berry, 1997）。また、異文化滞在者は、受け入れ社会の状況を反映する存在であるため、欧米の先行研究ばかりでなく、日本での滞在に焦点化した検討がより有効であると指摘されている（田中，2009）。よって、大勢の在日中国人留学生を対象にした異文化適応研究は実践にも研究にも価値があるだろう。

在日留学生の適応問題に関する心理学研究においては、異文化適応にかかわる様々な個人要因と環境要因が検討されている。個人要因としては、言語能力（安達, 2002）やソーシャル・スキル（田中, 1996; 湯, 2004）、留学の目的（葛, 1999; 岡益・深田・周, 1996）、異文化理解（加賀美, 2002）、学習態度・意欲（吉, 1999）、アイデンティティ（大野, 2002; 趙, 2007）などの影響が考察されている。また環境面では、ソーシャル・サポート（宋・石川・神庭 他, 2006）やソーシャル・ネットワーク（田中, 1997）、対人関係（James, 2007）、文化距離（井上, 2007; 横林, 2001）、ホスト国側の受け入れ態度（井上, 1997; 鈴木, 1997）な

どの影響が論じられている。これらの研究結果によって、留学生の意欲や認知、能力などにおける個人差および異文化環境におけるリソースへのアクセス難易度が異文化適応を規定することは明らかにされてきたが、個人のパーソナリティにおける個人差による異文化適応への影響はまだ検討されていない。異文化適応にとって望ましい留学生側のパーソナリティは何か、あるいは、適応に困難を生じやすいパーソナリティは何かなど、パーソナリティに注目した研究は極めて少ない（樋口，1997）。また、近年、異文化適応や受容、異文化コミュニケーション能力に対する実践的なアプローチとして、異文化トレーニングと呼ばれる訓練法も開発されつつあるが、これまでの異文化トレーニングは参加者全員に対して一律な方法で実施されることが多く、トレーニング前に個人のパーソナリティ特性や個人差が考慮されていることはまだ少ない（前村・小杉・藤原，2006）。異文化適応と個人のパーソナリティとの関連性を明らかにすることができれば、こうしたトレーニング・プログラムにおいても個人差特性を考慮したうえでのより細やかな対応策を開発することが可能となり、異文化移行時の不適応を予防的に回避することにも役立つことが予想される。従って、本論では在日中国人留学生のパーソナリティに注目し、パーソナリティと異文化適応との関連を検討することを第一の目的とする。そして、在日留学生の異文化適応に関する先行研究の中で、ソーシャル・サポートは重要な適応のリソースとして多く検討されているが、サポートの獲得に影響する個人側の要因はほとんど触れていない。そこで、本論はパーソナリティという個人内要因がどのようにサポートなどのリソースを動かしながら、異文化適応に影響を与えるか、3 要因間の関連性とメカニズムを解明していく。

また、これまで、在日留学生の適応問題をめぐる研究において横断研究は多いが、観測変数の時系列的な変容や変数間の因果関係を明らかにする縦断的な研究はまだ少ない。さらに、同じ対象者を留学前から留学後まで追いかけて徹底的に分析・考察する研究はほとんど見当たらない。Sam (2006)では、横断研究は異文化適応の「結果」を示すに有効であるが、異文化適応の「過程」を検討するには縦断研究が必要であると述べられている。そこ

で、本論では在日中国人留学生を対象に、彼らのパーソナリティや適応状態を留学前から留学後まで追跡し、縦断的な研究デザインによって、異文化適応のダイナミックなプロセス及び関連要因との因果関係について検討する。そして、近年、注目されてきた環境の変化による留学生のパーソナリティにおける発達的な変化も検証する。以上のことから、本論では、パーソナリティの視点から、在日中国人留学生を対象に、①留学志向によるパーソナリティの特徴、②異文化体験によるパーソナリティの変容、③異文化適応の実態、④異文化適応に影響を及ぼすパーソナリティ要因及びそのメカニズム（パーソナリティと異文化適応の間における内的・外的リソースの媒介作用）、を検討することを目的とする。

第 2 章 理論と先行研究

本論の基盤となる Berry の異文化受容理論に、Hobfoll のリソース理論と Cloninger のパーソナリティ理論を導入し、関連の先行研究をレビューしながら、本論の仮説を述べる。

2.1 文化受容ストレス理論 (Berry)

文化変容(acculturation)¹⁾

移民や難民、留学生など異文化滞在者を対象とする異文化研究の中に、「文化変容」という概念がよく使われる。一般的な理解では、「文化変容」は異なる文化背景を持つ個人や集団が接触している間に生じるあらゆる変化を含む。Redfieldら (Redfield, Linton & Herskovits, 1936) は、「異なる文化を持つ個人の集団に継続的かつ直接的に接触することによって、片方または両方の元文化パターンにもたらした変化」を「文化変容」と定義した。この定義によって、通常「文化変容」は文化自体に起きた変化を指すと思われるが、Berry (1991) は集団のレベルにおいて、物理的変容 (e.g., 難民たちのために立てた仮住宅) や、生理的変容 (e.g., 病気への抵抗力における変化)、政策的変容 (e.g., 移民政策の導入)、経済的変容 (e.g., 外国人の労働者による経済への貢献)、社会的変容 (e.g., 人種/民族差別)、及び文化的変容の一つまたはそれらの組み合わせも「文化変容」に含まれると指摘した。ここでは個人のレベルに起きた心理的変容に注目する。

1) Acculturationの訳語について、文脈によって「文化変容」(渡辺, 1995)や「文化受容」(江畑・箕口・曾・斉藤・原・丹羽, 1996)、「異文化化」(Segall, Dasen, Berry, & Poortinga, 1990, 田中・谷川訳, 1995)などの訳語が使われている。井上・伊藤 (1997) は、個人を問題にするときにはacculturationを「文化受容」、集団を問題にするときには「文化変容」と訳しわけけるのも一方法であると提案した。本論では、井上・伊藤 (1997) の訳し方を参考し、単なる「acculturation」という概念を「文化変容」と訳すが、個人の問題に関わる「acculturation stress」は、「文化受容ストレス」と訳すことにした。

「心理的文化変容（psychological acculturation）」は個人の特性（e.g., 価値観, 態度, アイデンティティなど）における内面的な変化を指す。Wardが提唱したABCs (Affective, Behavioral, Cognitive) of Acculturation (Ward, 2001) においては, 心理的文化変容は通常情動的, 行動的および認知的な変化を含める。さらにWardら (Ward, Bochner & Furnham, 2001) は異文化接触および文化変容に関する研究について, 基盤となる理論的アプローチをまとめた。アプローチは3つあり, 1) ストレス及びコーピングのフレームワーク; 2) 文化学習のアプローチ; 3) 社会アイデンティティ確立の視点, それぞれ異文化受容過程の中で生じる情動, 行動および認知面の変化を強調している。

文化受容ストレス (acculturation stress)

ストレスアプローチは主に個人または集団にストレスをもたらす変化に注目する。なぜならば, 異文化接触の際に, 文化の間にも（特に敵意を持つ接触の場合）, 個人の間にも（特にリソースが乏しい場合）衝突する可能性があるからである。また, 文化学習／脱落の際にも心理的葛藤が生じる可能性がある。例えば, それは両文化の価値観が合わない場合に起こる。これらの文化受容における問題場面を理解／対応するために, Berry (1970) は「文化受容ストレス」という概念を提唱した。文化受容ストレスとは, 文化間の接触に基づくライフイベントに対するネガティブな反応を指す。通常は, 高めの抑うつ（文化喪失による）と不安（新環境での生活に対する不確定性による）傾向につながる反応を意味する。この概念は「カルチャー・ショック」(Oberg, 1954)に近いが, Berryは代わりに「文化受容ストレス」という言葉を使った方が良いと指摘した。なぜならば, 1) 「ショック」という言葉はネガティブな経験と困難という結果の意味しか伝わっていないのに対し, 「ストレス」という用語は心理ストレス理論に基づくものであり, それは人々が様々なコーピング方略を利用しながら, ネガティブな経験に対応しつつ, 最終的にはある程度の適応に至ることも意味している。2) ストレスの多い経験は一つの文化によるものではなく, 文

化間の相互作用で生じたものであり、一方の文化に対する驚きや戸惑いを表現する「ショック」よりもストレスのほうが適切である、という理由付けをおこなっている。

文化受容ストレスのプロセス

Berryは文化受容ストレスのプロセスをFigure 2.1 のように示している（詳しくはBerry, 2006; Berry & Sam, 1997 を参照）。この図の中で、文化受容ストレスに影響する要因は、文化受容前に既存している要因と文化受容中に生じる要因、という2つの側面から考えられる。それらの要因は調整要因と媒介要因の両方を含めている。

文化受容前に既存している影響要因FPA（moderating factors existing prior to acculturation, 以降ではFPAと略す）はFigure 2.1 で示しているように、年齢をはじめ、受けた教育や移民/留学動機など様々な文化接触前に既に存在した個人の特性要素を含む。それらの個人要因から異文化適応への予測性は先行研究間ではほぼ一致する結果が出ているが、パーソナリティに関する結果はまちまちである（Berry, 2006）。例えば、内向性／外向性、Big Fiveなどパーソナリティからの影響が検討されたが、それらの特性は異文化適応にとってリスク要因となるのか防御要因になるのかについては一致した結果が報告されていない。不一致の原因として一つ考えられるのは、特性自体ではなく、その特性と新文化との「適合性」（fit）の問題である可能性が考えられる。要するに、個人のパーソナリティが滞在先の文化特性と適合する場合はパーソナリティ要因は異文化適応を促進するものになるが、滞在先の文化と適合しない場合は異文化適応を防げるものになる。従って、パーソナリティの影響性はそれぞれの異文化環境の下で環境との適合性を考慮して検討していく必要があると思われる。そこで、本論は日本文化という異文化環境において、中国人留学生のパーソナリティのどのような特性がどのような環境と適合するのか/しないのかという適合性の観点から検討をおこなうこととする。

文化受容中に生じる影響要因FDA (moderating factors arising during acculturation, 以降ではFDAと略す)は, Figure 2.1 で示しているように, 異文化との接触頻度や, 異文化受容戦略, 得られたまたは知覚されたソーシャル・サポートなど, 文化受容過程の中に生じる様々な影響要因を含む。

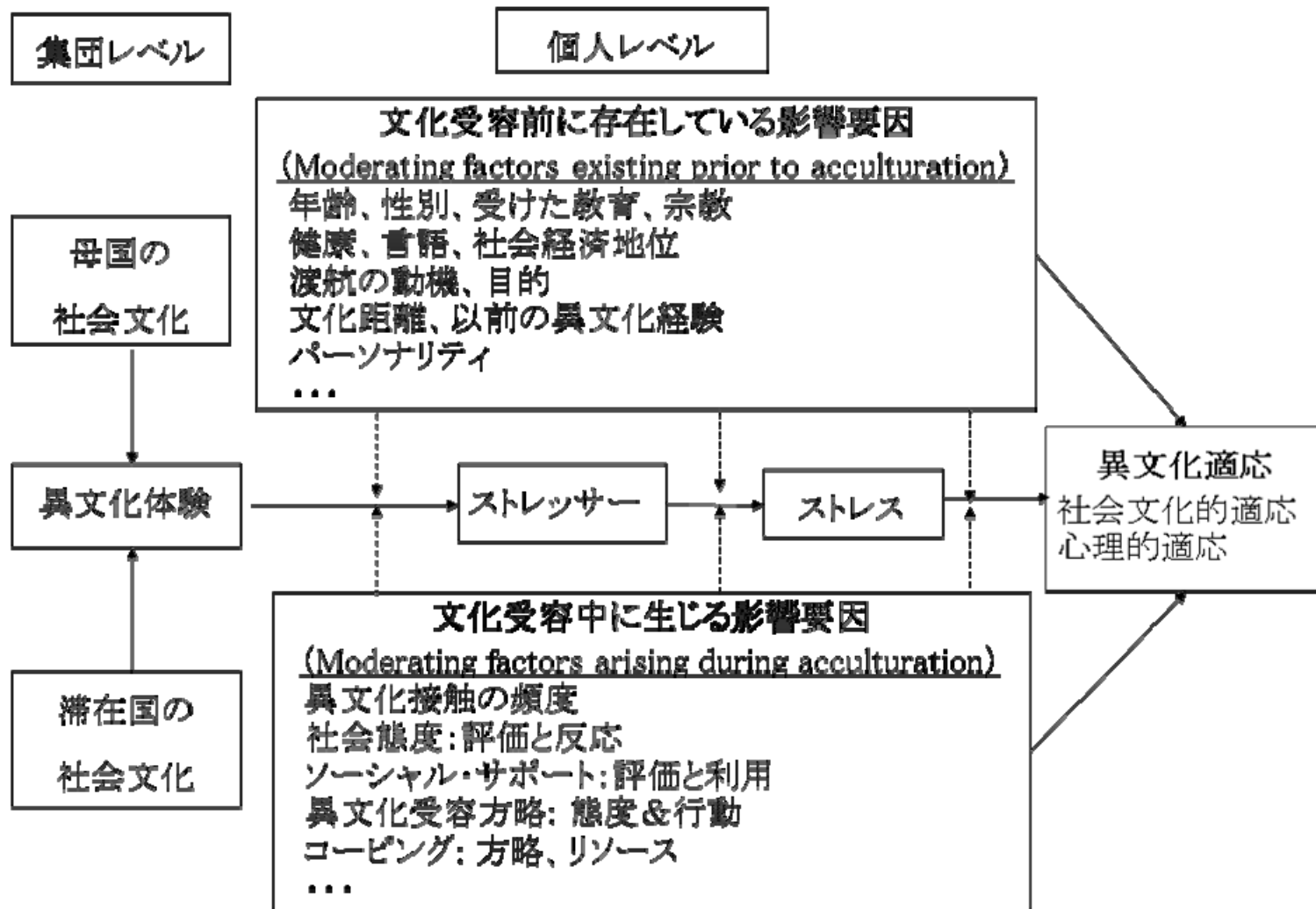


Figure 2.1 文化受容ストレスおよび異文化適応の影響要因 (Berry,2006 より抜粋)

異文化適応 (acculturation adaptation)

Figure 2.1 の最後は様々な適応の様子を呈示している。ここでの適応 (adaptation) は異文化接触の最初におこなった短期的な調整 (adjustment) と概念上に区別されて、人々が新しい環境での生活を整えて、「多少」満足といった現状に定着しているという長期的な結果を意味している。「多少」というのは、新しい文化環境での生活への「適応」を、非常にネガティブな状態から非常にポジティブな状態まで、広い定義をしており、その中庸部分の適応できている比較的広い範疇のなかにあることを指している。

Wardらは、適応の内容によって異文化適応を「社会文化的適応」と「心理的適応」の2つに大別した (Ward, 1996; Ward & Rana-Deuba, 1999)。心理的適応は個人の内的な心理的状态 (internal psychological outcomes) を指し、新しい環境の中で統合された自己及び文化アイデンティティや、良好な精神状態、個人的な満足感などを含む。一方、社会文化的適応は個人をその新しい環境につなげる外的な心理的状态 (external psychological outcomes) を指し、特に家庭生活や仕事、学校などの領域における日常問題処理能力に関わる (Berry & Sam, 1997)。その2種類の適応の間の相関関係が検証されてきたが、それらを概念的に区別する理由は2つある。第1に、この2種類の適応の予測要因が異なる。第2に、心理的適応はストレスや精神病理的アプローチの文脈で検討するのがよいが、社会文化的適応は社会的スキルの枠により検討することが多い (Ward & Kennedy, 1993a)。通常、良好な心理的適応の予測要因は、パーソナリティや、生活変件事象 (life-change event)、ソーシャル・サポートなどが考えられるが、良い社会文化的適応の予測要因は、文化的な知識や、異文化との接触程度、ポジティブなinter-group態度などからなる。統合的文化受容方略 (integration acculturation strategy) や小さい文化間距離 (less cultural-distance) は心理的適応と社会文化的適応両方を予測する (Ward & Kennedy, 1993b; Ward, 1996)。

よって、本論もパーソナリティの異文化適応への影響を検討する際に、心理的適応と文化的適応の両方を分けて定義・測定をおこない、その関連性について考察していく。また、異文化研究の中に、心理的適応の変数は、満足感や幸福感、自尊心などポジティブな指標のみ、あるいは、ストレスや、抑うつ、不安などネガティブな指標のみを使用しており(Berry & Sam, 1997)、それらの関係を検討することが難しい。従って、ここでは、個人の認知面の適応状態を反映する自己効力感をポジティブな心理指標として、感情面を表す状態不安をネガティブな心理指標として、同時に用い、両者の間の関連および行動面の適応状態を表す社会文化的適応との関連を検討することにする。

一方、改めてFigure 2.1 で示された異文化心理研究のフレームワークを総合的に見ると、FPA要因（文化受容前の要因）とFDA要因（文化受容中の要因）はそれぞれ文化受容ストレスや異文化適応に影響を及ぼすことが強調されているが、FPAとFDAとの間の関連性については言及されていない。個人が文化受容前に持っている心理特性がその後、文化受容中に生じるすべての要因を左右するとは言えないが、一部は関連するだろう。例えば、個人のパーソナリティによって、選んだ文化受容ストラテジーが違うことが検証されている(Bakker, van der Zee, & van Oudenhoven, 2003 ; Benet-Martínez & Haritatos, 2005)。異文化研究においては、ソーシャル・サポートと適応との関連がよく論じられるが、ソーシャル・サポートの獲得に影響する留学生側の個人特性を検討するものはまだ少ない。そのため、本論では、パーソナリティからソーシャル・サポートへの影響を検討することで、FPA要因からFDA要因への影響性を検証する。

また、なぜソーシャル・サポートや、言語力、受けた教育、社会地位などFPA要因とFDA要因が異文化適応に影響を及ぼすのだろうか。Berry (2006) は、それらの要因が異文化接触中における重要なリソースとして働くゆえに、異文化に移行することによって自国文化のなかで形成・維持されていたそれらのリソースが損失するまたは機能できなくなるから、リセットされた環境における日常問題に対応できなくなることがストレスにつながると述

べた。Lazarus (1966) は、心理的ストレスを「ある個人のリソースに負担をかけたり、あるいはそれを超えたり、そして個人の心身の健康を脅かすものとして評価された、人間と環境とのある特性な関係」と定義した。即ち、BerryもLazarusも、リソースの欠如がストレスの原因であることを指摘している。従って、本論はリソース・ストレス関連理論を異文化受容ストレスに導入し、リソースの観点からさらにパーソナリティと異文化適応のメカニズムを探る。

2.2 リソース・ストレス理論 (Hobfoll)

Hobfoll (1998) のリソース維持理論 (Conservation of Resource, COR) によると、人間は常に様々な要求 (Demanding) に対応しなければならないため、それらに応じる必要なリソースが減少・不足・喪失すると、対応できなくなり、ストレスが生じる (Hobfoll & Freedy, 1993)。特に述すると、以下の場合にストレスが生じる：1) リソースが喪失する恐れがある場合；2) リソースが既に喪失している場合；3) より多くのリソースを獲得するために、大量のリソースを投資したものの（予期通りの結果を）十分に得られなかった場合といった3つの状況である。海外移住の初期段階はまさに様々なリソースが大量に喪失する（または喪失の恐れがある）ことになる。例えば、Aycan & Berry (1996) は、社会的地位 (social status) の喪失と制約された地位の改善が海外移住者にとって共通な経験であると指摘した。また、教育や仕事のために取った資格や認定書などは出国後に通常無価値になるため、異国での社会地位は母国より低くなることも示唆されている (Cumming, Lee & Oreopoulos, 1989)。異文化研究者は、個人の持つ心理特性 (e.g., 自尊感情, 自己効力感) や、経済力/社会地位, 受けた教育, ソーシャル・サポートなど文化受容にとって重要なリソースの喪失が、異文化受容ストレスにつながると述べた (Berry, 2006; Kosic, 2006)。そこで、留学生はもともと経済力・生活力が弱いからだけでなく、母国で持っていたリソースの多くが突然無効になるため、ストレスが生じやすいと考えられる。

また、新しい環境の下で順調に生活していくため、改めて必要なリソースを確保しなければならない。よって、異文化に適応していく過程はまさに喪失したリソースを新たに獲得していく過程であると考えられる。必要なリソースをうまく得られなかった留学生はストレス反応を示しがちであろう。反面、より多くのリソースを得られた留学生は、適応状態もよりよいのではないかと推測される。従って、本論では異文化適応過程の初期段階のリソースに焦点を当てて、リソースと適応との関連を検討することにする。一方、遡っ

て追究すると、どのような人がより多くのリソースを得られるかというパーソナリティの個人差に関わる問題が本論のもう一つのリサーチ・クエスチョンである。

ここでリソースの概念と分類を見てみる。Hobfoll (1998) によって、リソースは、人々にとって有益、有用、必要なあらゆるものであると定義されている。簡単に分類すると、(1) 体力や気質、知能、自尊感情といった個人が持っている「内的リソース」(internal resource) と、(2) ソーシャル・サポート、職業、経済的地位、自然資源といった個人に所有されていない「外的リソース」(external resource) の2つに大別される (Hobfoll, 1998)。その中で、リソース同士は互いに影響しあうと論じられている。とくに内的リソースから外的リソースに対する管理的働きが示唆されている (Hobfoll, 1998)。例えば、個人の統制能力 (Mastery) は、異なるストレス状況下でのソーシャル・サポートの利用方法を統括的に管理することが示唆されている (Kobasa & Puccetti, 1983)。内的リソースの中でも、特に自尊感情、楽観性、および希望などの個人特性リソース (personal trait resource) が重要な個人内リソースとして取り上げられている。Strelau (1995) は、それらの特性の背後には、生理学を基盤とした気質が司っている部分があると述べた。生理的気質によって、一部の人はより高い社会性やポジティブな態度、活動性を養成しやすい。一方、個人の早期経験と成長経験もそれらの個人特性リソースに大きな影響を与える (Ainsworth, 1989; Bowlby, 1980)。個人の早期の成長経験は性格にも反映する (Cloninger, Svrakic & Przybeck, 1993) ことから、気質と性格が個人特性リソースの説明変数になると考えられる。そこで、本論では人々が本来持っている気質と性格を個人特性リソースの規定要因と位置づける。

以上Hobfollの理論から、パーソナリティ (気質・性格特性) → 内的リソース → 外的リソースという影響の流れが見えてきたが、この過程を実証する研究が行われていないため、本論では異文化適応過程というリソースの獲得プロセスにおいて、パーソナリティのリソースへの影響およびリソース間同士の相互作用を検証することを目的にする。

2.3 パーソナリティの気質・性格 7 因子理論 (Cloninger)

本論では、前述したリソースと気質・性格の関連に応じて、Cloningerらが人間の生物性と社会性に基づいて開発した気質・性格 7 因子尺度—Temperament and Character Inventory (TCI) (Cloninger, Svrakic & Przybeck, 1993)をパーソナリティの指標として用いて検討する。

TCIとは、Cloningerらが神経生理学的・遺伝学的な視点からヒトや動物の学習を研究する神経行動学や行動遺伝学の方法によって精神疾患の説明を行うなかで、構築したパーソナリティ理論 (Cloninger, 1986, 1987; Cloninger & Gilligan, 1987) である。TCI理論によって、パーソナリティとは、「環境に対する独特な適応の仕方を決定する心理生理的なシステムをもつ個人内の動的な組織」と定義されている。TCIは、4つの気質特性(新奇性追求, 損害回避, 報酬依存, 固執)と3つの性格特性(自己志向, 協調, 自己超越), 合わせて7次元からなる。自分でも無意識に周りの環境に反応してしまう特徴を「気質」、意識的に自分の行動をコントロールしようとする特徴を「性格」と呼ぶ。「気質」と「性格」の大きな違いは、「気質」は無意識による反応であるのに対して、「性格」は意識的な行動であるということと、「気質」は一生の中で非常に安定しているが、「性格」は社会文化的学習に影響され、発達につれて成熟していく、という2点にある(木島, 2000; 木島ら, 1996)。また、気質特性は情緒的プロセスを、性格特性は理性的認知プロセスを予測すると論じられている(Cloninger, 2008)。本論は留学生の心理的適応について感情面(状態不安)および認知面(自己効力感)から観測する予定であり、パーソナリティが留学生の感情面および認知面の適応状態にどのような影響を及ぼすかを検討する際に、情緒面に焦点化した気質尺度と認知面に焦点化した性格尺度を有するTCIを用いて測定をおこなうことが有利であると考えられる。また異文化体験は気質と性格のどちらに影響しやすいかについても検討したいため、パーソナリティを気質と性格に分化させた理論的背景を有す

るTCIパーソナリティ尺度を採用することとした。加えて性格の3次元は、発達に伴う人格的成長や変化を考慮して想定されており、成人期以降に成熟し、自己の有用性あるいは社会の有効性に影響することから、個人の適応状態と人生の満足度を知る上で重要であることが示唆されている（Cloninger et al., 1993）。それはパーソナリティと適応の関連を検討する際にも適切な尺度であると考えられる。

この「気質」と「性格」の関係は、Figure 2.2 に示されている。

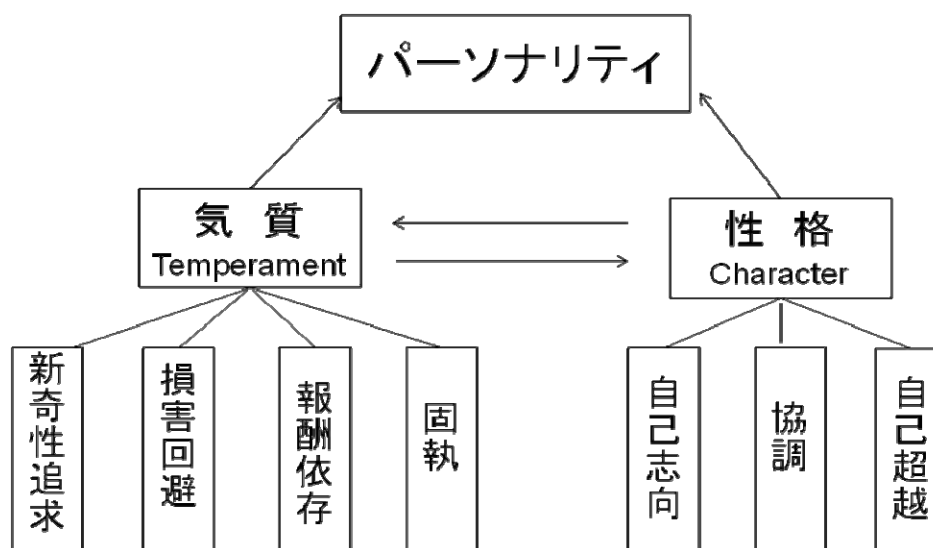


Figure 2.2 TCIの次元関係図（Cloninger, 1994; 木島, 2000 より転載）

TCIにおける気質（Temperament）次元

Cloninger（1997）によると、気質とは刺激に対する自動的な情動反応であり、大脳辺縁系によって調整される情動行動が外的刺激によって条件づけられる際に、この条件づけに関する遺伝的に規定された傾向に関与するものであるとされる。気質因子は行動の（1）触発、（2）抑制、（3）維持、（4）固着にかかわり、それぞれ（1）新奇性追求、（2）損害回避、（3）報酬依存、（4）固執と呼ばれる。以下、Cloninger（1987）やCloninger ら（1993）による、その4因子の定義と特徴について記述する。

①新奇性追求（Novelty Seeking）

新奇性追求は、新奇刺激に対する頻繁な探索行動、衝動的な決定、報酬の合図の接近における浪費、気分の素早い変化、そして葛藤の能動的回避のような、行動の活性化と開始に関する遺伝的傾向性である。新奇性追求の高い人は、衝動的、探索的、気まぐれ、飽きっぽい、興奮しやすい、怒りやすい、浪費家であるといった特徴をもつ。一方、新奇性追求の低い人は、新たな物事にゆっくりと取り組む、関心が狭くなりやすい、行動する前にじっくりと考えるといった特徴をもつ。

②損害回避 (Harm Avoidance)

損害回避は未来の問題の予想における悲観的な心配、不確かさを恐れたり見知らぬ人に対して内気になったりといった受動的回避行動、急激に疲れやすいのような、行動の抑制と中止に関する遺伝的傾向性である。損害回避の高い人は、用心深い、緊張している、予期不安を持っている、怖がり、内気、そして疲れやすいといった特徴をもつ。一方、損害回避の低い人は、自信に満ちていてリラックスしている、楽観的、無責任、社交的かつ活動的といった特徴をもつ。

③報酬依存 (Reward Dependence)

報酬依存は、情にもろい、社会的愛着、そして他者の賞賛に対する依存のような、進行中の行動の維持と持続に関わる遺伝的傾向性である。

報酬依存の高い人は、他者を喜ばそうとしたり、共感的であり、心情的、そして最終的な報酬のために期待を持続することが出来るといった特徴をもつ。一方、報酬依存の低い人は、社会的に孤立していて、情緒的に冷静で、感傷的でない、短期的な報酬が得られない場合にすぐに飽きてしまうといった特徴がある。

④固執 (Persistence)

固執は報酬依存の下位尺度であったものが因子として独立したものである。固執は、忍耐強く一つの行動を行う、一つのことをやり通すといったように、行動の固着に関する遺伝的な傾向性である。報酬依存との違いとしては、報酬依存は主に社会的な愛着関係への

依存や、そのような関係を維持する行動に関わるのに対し、固執は部分強化に対する行動の固着に関わる。

TCIにおける性格 (Character) 次元

性格は自己概念についての洞察学習をすることによって発達するもので、自己の有効性もしくは社会の有効性に影響を与えるものと定義される。そして、性格次元は3因子からなり、各次元は(1) 自律的な個人として(2) 社会の不可欠な一部として(3) 全てが相互依存する全体である宇宙の不可欠な一部として、自己を同定する程度によって分けられる。そして、それぞれ(1) 自己志向(2) 協調(3) 自己超越と呼ばれる。以下、その3因子について記述する。

①自己志向 (Self-Directedness)

自己志向は、自己決定や意思の力(will power)，もしくは選択した目的や価値に一致する状況に適合するために行動をコントロール、調整し、そして選択する個人の能力であると定義される。自己志向の高い人は、責任感があり、目標を設定しそれにむけた行動を選択でき、選択した行動を可能にする能力をもち、自分で選択した行動に自分を動機づけることができるといった特徴をもつ。一方、自己志向が低い人は、責任感が低く、目標に向けた行動を取ることが出来なく、自尊心が低く、自己奮起できないといった特徴をもつ。

②協調 (Cooperativeness)

協調は、他者と同一化し、受容する際の個人差を説明するためのものと定義される。つまり、協調的な人は、社会的に寛容で、共感的で、有用、かつ同情的である。一方、非協調的な人は、社会的に不寛容、他者に無関心、役に立たず、そして執念深い。

③自己超越 (Self-Transcendence)

自己超越やスピリチュアリティに関係する性格特性は、これまでのパーソナリティ研究では取り扱われることが少なかった。Cloningerは、これらの概念を積極的に取り入れるこ

とで、性格次元の中に自己超越を位置づけた。自己超越とは統一された全体の本質的、必然的部分として理解される全てのものとの一体化と定義される。これには、全てのものは全体の部分であるという統一意識の状態が含まれる。

Table 2.1 はTCIの7次元の下位因子を示す。

Table 2.1 気質と性格の次元別表(木島ら, 1996)

気質の4次元	性格の3次元
新奇性追求 (Novelty Seeking, NS)	自己志向 (Self-Directedness, SD)
NS1 探求心 (vs. 厳格)	SD1 自己責任 (vs. 他人非難)
NS2 衝動 (vs. 熟考)	SD2 目的指向性 (vs. 目的指向性の欠如)
NS3 浪費 (vs. 儉約)	SD3 臨機応変
NS4 無秩序 (vs. 組織化)	SD4 自己受容
損害回避 (Harm Avoidance, HA)	SD5 啓発された第二の天性
HA1 予期懸念・悲観 (vs. 無制御の楽観)	協調 (Cooperativeness, C)
HA2 不確実性に対する恐れ	C1 社会的受容性 (vs. 社会的不寛容)
HA3 人見知り	C2 共感 (vs. 社会的無関心)
HA4 易疲労性・無力症	C3 協力 (vs. 非協力)
報酬依存 (Reward Dependence, RD)	C4 同情心 (vs. 復讐心)
RD1 感傷	C5 純粋な良心 (vs. 利己主義)
RD3 愛着	自己超越 (Self-Transcendence, ST)
RD4 依存	ST1 霊的現象の受容 (vs. 合理的物質主義)
固執 (Persistence, P)	ST2 自己忘却 (vs. 自己意識経験)
P 固執	ST3 超個人的同一化 (vs. 自己弁別)

2.4 パーソナリティ及びリソースの働き

本節では、これまで行われたパーソナリティ、リソース及び適応の間の関連について、先行研究を概観したうえで、異文化適応におけるパーソナリティとリソースの働きに関する仮説を立てる。

2.4.1 パーソナリティから異文化適応への影響

それぞれの個人の持つ心理特性によって、異文化適応の過程中には個人差が現れることが考えられる (Berry, 1997) が、異文化心理学の先行研究を見ると、パーソナリティという個人の基本的な心理特性に関する検討は意外と乏しい (Kosic, 2006)。さらに、Cloninger の気質・性格尺度 (TCI) でパーソナリティと異文化適応の関連を検討する研究は管見の限り見あたらなかった。ここでは、ユングの外向性と Big Five に関する研究結果をレビューする。

外向型

外向型 (Extraversion) はユングのパーソナリティ類型論に基づく性格タイプの一、活動的で、感情をよく表にあらわし、社交的で周囲に同化しやすく、いつも外のものに関心を示すような性格タイプである。異文化研究によく注目されているパーソナリティ特性の一つである。移民者や留学生たちは、新しい環境に移った際に、新しい社会関係を作り出したり、求めたりしなければならない。McCrae & Costa (1997)によると、外向性が高い人は他人とのふれあいが好きであると示唆されたが、外向性と異文化適応との間の関係性については不一致な研究結果が提示されている (cf. Ward, 2001)。両者の間に、正の相関、負の相関、または無相関といった様々な研究結果が報告されている (Ones & Viswesvaran, 1999)。研究者によって、外向性の尺度に、ホスト国の人を含む他人との人間関係を作り出す能力も含まれる場合もある。ホスト国の人と友人関係を作ることは社会文化学習や異

文化適応に役立つと考えられるが、文化によって外向性より内向性を持つ人間が好まれることも考慮に入れなければならない (Kosic, 2006)。そこで、Ward & Chang (1997) がそれらの不一致な結果に関して、「文化適合性」 (cultural fit) という仮説を提出した。彼らは個人と状況 (person × situation) の相互作用を強調している。つまり、2.1 節にも述べたように、パーソナリティ自体が異文化適応の促進/リスク要因になるより、異文化接触者とホスト国の文化との間の文化適合度が適応状態を左右することが予想されるのである。従って、本論で検討されるパーソナリティと異文化適応の関連性も中国人留学生と日本文化という文脈の下で考察しなければならないだろう。

Big Five

近年、統合的なパーソナリティモデル、「5 因子パーソナリティモデル (Big Five)」を用いて、パーソナリティと異文化適応との関連を検討する研究も行われている。5 因子とは外向性、神経症傾向、開放性、調和性、誠実性である。Ward, Leong & Low (2004) は、そのうち、4 つの因子が異文化適応と関連があることを報告した。心理的適応は外向性、調和性、誠実性および (低度の) 神経症傾向、社会的適応は外向性、(低度の) 神経症傾向、調和性、誠実性と関連する。調和性は有効なコミュニケーションと社会関係を促進する。調和性の高い人は他者への思いやりと協力性がより高い。一方、誠実性の高い人はより慎重で、勤勉的、自律的である。Ones & Viswesvaran (1999) によって、移民者の有効性 (effectiveness) に対して、誠実性は 5 因子の中に予測性が最も高い因子であることが示された。Caligiuri (2000) は外向性、調和性と情緒安定性が移民者の帰国願望と負の相関があることを報告した。

また、他の研究者は、ストレスの生じやすい異文化状況において、有効な認知評価と行動対応を予測するパーソナリティおよびスキルにも注目している。例えば、文化的共感性や、寛容性、社会的独創性 (social initiative)、柔軟性、情緒安定性などが取り上げられて

いる (Mol, Van Oudenhoven & Van der Zee, 2001; Van der Zee, Van Oudenhoven & De Grijs, 2004) (cf. Kosic, 2006)。

以上の先行研究と TCI の各下位概念の定義に基づいて、TCI 気質・性格の各次元は、異文化適応にそれぞれ異なる影響を与えると予測される。新奇性追求は 5 因子の外向性と開放性に近い特徴があり (Cloninger ら (1994) によると、新奇性追求は外向性及び開放性との間に正の相関を持つ)、異文化探索に貢献するところが期待されるが、リスクを好む部分と不秩序的な部分は日本社会への適応にリスクを招くのではないか。損害回避は新たな物事に対して予期不安や心配による回避的行動が多く、Big Five の神経症傾向と似ている部分があつて、新しい文化との接触を妨げると予測される。報酬依存の高い人は社会的愛着が高いため、異文化社会においても積極的に周りとの接触を求め、適応を促進すると考えられる。中学生を対象にした研究では、報酬依存の低さが抑うつを高めることが示唆された (田中, 2010)。固執は忍耐力が強いので、異文化受容中に困難があつても乗り越えられ、最終的にはよい適応状態に到達できるだろう。自己志向は適応との間に正の相関を持つことが検証されており (松浦ら, 2008 ; 田中, 2010)、異文化適応においてもポジティブな影響を及ぼすと考えられる。協調性は Big Five の調和性と誠実性と共通している部分があり、異文化適応にとって防御的な要因となるだろう。自己超越は個人の直感力、人生に対する充足感、自然との一体感を表すものであるため、自己超越性の高い人は精神状態もよいのではないかと推測される。

2.4.2 ソーシャル・サポートと適応の関連

異文化受容の過程の中で、必要となるリソースの種類は非常に多く、個人によってリソースとされるものもそれぞれ異なる。本論はまず一般の分野で適応と密接な関連が見られる外的リソースの代表——ソーシャル・サポートを取り上げて検討することにする。ここで、一般文脈及び留学生で検証されたソーシャル・サポートと適応との関連をレビューす

る。

ソーシャル・サポートは様々な物質的および感情的サポートに関わる重要な外的リソースとみなされ、これまでに個人の精神健康との関連について多く検討がなされてきている (Boehmer, Luszczynska, & Schwarzer, 2007; Schwarzer, Hahn, & Jerusalem, 1993)。サポートの抑うつ徴候軽減効果や、サポートの喪失によるネガティブな気分の増加（物質の喪失による経済的なストレス状況において、同時に多くのソーシャル・サポートが失われた場合、抑うつ気分や怒りが強くなること）(Hobfoll, Johnson, Ennis, & Jackson, 2003) などが報告されている。留学生の異文化移行期においても、ソーシャル・サポートは適応にとってとりわけ重要なリソースであると考えられる。周・深田（2002）は、ソーシャル・サポートを「あらゆる支援的な働きかけ」と定義し、縦断調査によって留学生が来日 1 年目では、サポートを多く受け取れば適応度（総合的な適応尺度で測定されたもの）が高まることを明らかにしている。

2.4.3 パーソナリティとソーシャル・サポートの関連

一般の人を対象者とした先行研究では、パーソナリティによるソーシャル・サポートの獲得への影響も検討されてきている (Masten, Best, & Garmezy, 1990)。たとえば、外向性や調和性の高い人がよりうまく共有リソース (collective resource) を利用できる (Koole, Jager, van-den-Berg, Vlek, & Hofstee, 2001)。慢性病患者においても、楽観性と自己管理能力がサポートの獲得と正の相関を持つこと (Schröder & Schwarzer, 2001) が明らかにされている。そこで、本論は TCI 気質・性格尺度を用いて、留学生を対象とした場合、パーソナリティがソーシャル・サポートの獲得にどのような影響を及ぼすかについて検討する。

2.4.4 パーソナリティとソーシャル・サポートと異文化適応の関連

以上の先行研究で示したように、パーソナリティとソーシャル・サポートおよび適応の間に、それぞれの関連性は既に検証されているが、この三者の関係を検討するものはまだ少ない。本論では、理論および先行研究を踏まえて、パーソナリティと異文化適応の間における外的リソース（ソーシャル・サポート）の媒介作用を仮定する。

2.4.5 内的リソースと外的リソースの相互影響

前節で述べたように、リソース維持理論では、リソース同士が互いに影響しあうと論じられている。とくに個人の統制能力（mastery）といった内的リソースから外的リソースに対する管理的な働きが示唆されている（Kobasa & Puccetti, 1983）。しかし、ソーシャル・サポートの獲得に影響を及ぼす内的リソースパーソナリティは今までに取り上げられていなかった。本論ではサポートの獲得を予測する個人の内的リソースを検討したい。

Hobfoll (1989)のCOR理論で、提唱されているのは、自分に適した（fitの形容詞）リソースを利用するだけではなく、リソースを自分に適合させる（fitの動詞）ということである。即ち、周りにある様々なリソースを合理的に調整し、うまく利用すれば、不利な状況も有利に転換できる。このことは、人間の能動性を重視していると考えられる。この理論に沿って考えると、多くの場合は、周りのリソースが十分あるにもかかわらず、個人が積極的に利用していないため、不利な状況に陥っているのではないかと考えられる。従って、これからは、リソースに対する追求や利用など個人の能動性における個人差に注目すべきだろう。

この「Fitting Resource」理論（Thoits, 1994 ; Hobfoll, 1998）によって、「人間は環境からのさまざまな要求を満たすために、リソースを開拓したり調整したり管理する能動性を持っている」ということがわかっている。そこで、本論では、その能動性を概念化し、「リソース管理力」というリソース全体の開発・利用・調達に関する個人の能力を取り上げる。全体的にリソース管理を積極的に行う留学生はより多くのサポートを得られ、適応

状態もよりよいのではないかと予測される。しかし、実際に得られたソーシャル・サポートの量は個人要素以外、社会要素から規定される部分も多いため、サポートの獲得量だけでは個人のリソース管理力を直ちに反映できない部分もあると考えられる。従って、本論では個人がどれくらい自発的、積極的にサポートを求めたか、という具体的なリソース（ソーシャル・サポート）に対する個人の追求度にも注目する。周・深田（2002）では、留学生がサポートを求めた程度について調査を行ったが、サポートを求めた程度と実際に獲得したサポート量との関連については検討がなされなかった。本論では、個人のサポートに対する追求度は、リソース管理力とも実際のサポート獲得量ともより密接な関連を持つ両者の媒介要因だろうと推測される。よって、本論では、内的・外的リソース間同士の相互影響について、「リソース管理力→サポート追求度→サポート獲得量」というような影響の流れを予測する。

2.4.6 異文化適応変数間の関連

前述したように、本論では、異文化適応を社会文化的適応と心理的適応に分けて検討することになっている。さらに心理的適応については、自己効力感と状態不安を用い、ポジティブとネガティブおよび認知と感情の2つの側面から検討する。

しかし、異文化適応研究の中に、自尊感情が心理的適応の指標として検討されたものがあるが、自己効力感を扱ったものは見当たらなかった。自己効力感とは、個人が何らかの行動を目標程度まできちんと遂行できるかどうかという、自分の能力に対する予期および確信のことである。よって、自己効力感個人の認知面の心理状況を反映していると考えられる。そして、高い自己効力感が個人の心身健康を向上するとみなされている（Bandura, 1994）。Kosic（2006）も、自己に対するポジティブな認識は、ストレスや挫折に対応する防御因子になる一方、自己に対するネガティブな認識は不適応や抑うつなど精神的問題につながるとみなされる、と述べた。自己効力感が十分に高い人の場合には、困難な状況に

においても、ストレスに耐えられ、身体的・精神的な健康を損なわず、適切な対処行動や問題解決行動をしていける特徴が示唆されている（嶋田, 2002）。高齢者を対象とした研究で、一般的自己効力感は既にエージング適応の一つ因子として検討されている（Moraitou, Kolovou, Papasozomenou, & Paschoula, 2006）。

さらに、高齢者や慢性疾患患者を対象とした先行研究では、自己効力感がリソースと精神健康の媒介要因として働いていることが検証されている。例えば、高齢者の自己効力感がリソースの媒介要因になって、幸福感に影響を与えること（Jopp & Rott, 2006）が示唆された。慢性疾患患者を対象とした研究では、ソーシャル・サポートが自己効力感を介してストレス反応を軽減することが検証された（金・嶋田・坂野, 1998）。よって、留学生の異文化適応においても、リソースが自己効力感（認知）を媒介して社会文化適応（行動）と不安（感情）に影響を与えるだろうと予測する。

そして、Ouarasse & van de Vijver（2005）やShupe（2007）によれば、社会文化的適応の良好さは精神健康の良好さにつながることが既に検証されているため、本論の仮説においても社会文化的適応の良好さを状態不安に先立つ変数として取り上げることとする。

2.4.7 パーソナリティとリソース、異文化適応の関連についての仮説

以上の予測によって、本論の仮説をFigure 2.3 の仮説モデルにまとめる。

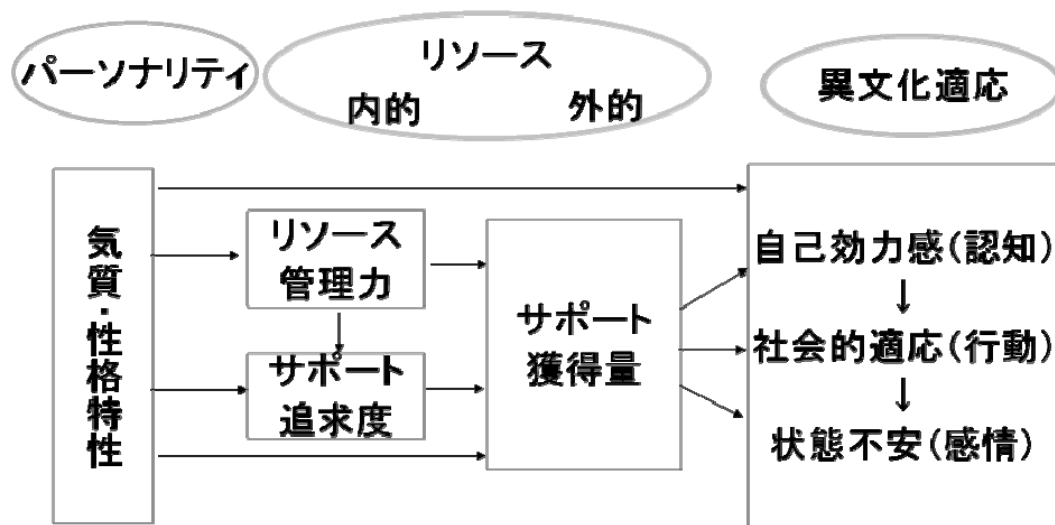


Figure 2.3 パーソナリティとリソース，異文化適応の関連に関する仮説モデル

2.5 異文化接触前後のパーソナリティ

前節では、異文化適応の過程に注目し、パーソナリティとリソース、異文化適応、その3者の間の関連についてレビューしたが、本節では異文化接触の前後に焦点を当て、留学生は本来どのようなパーソナリティ特徴を持つか（留学志向による特徴）、異文化接触や異文化適応過程が個人のパーソナリティにどのような変化を起こすか（留学効果による変化）について、関連理論と先行研究をレビューする。

2.5.1 異文化滞在者のパーソナリティの特徴

国の留学政策や家庭の経済力など留学に関する個人外の要因を除いて、そもそも留学という行動を選択する集団（留学志向者）は選択しない集団と何らかの内的個人差があると予測される。留学することは様々な困難が予想される中、異文化社会で一定期間生活していこうという大きな挑戦であるため、留学を行うその決意の背景には特徴的なパーソナリティが存在する可能性が考えられる。留学志向者のパーソナリティの特徴を明らかにすることは留学中の適応を支援していくうえで重要な意味を持つと考えられる。しかし、それに関する先行研究は調べた限りで極めて少ない。ここで、移民を含む異文化滞在者のパーソナリティ特徴に関する欧米の先行研究をレビューする。

Morrison & Wheeler (1976)は「pioneering personality」（先駆的なパーソナリティ）という用語をつくり出して、移民志向のある個人の心理的特性を指した。Ray (1986)では、移民は非移民と比べて、anxiety（不安）とinsecurity（不安定）の傾向が弱いことが示唆された。Bonevaら（2001）によると、移民者は非移民者よりも高い仕事志向や高い達成動機、高い権力への志向性を持つことが明らかにされている。Poleka, Van Oudenhovenb & Ten Bergeb (2011) はポーランドからオランダに移民した人はポーランドに定住しているポーランド人と比較した結果、愛着尺度において、前者は後者より安定的（secure）及び拒絶的（dismissing）であることを示した。また、直接に留学生を対象とした研究ではないが、

Wright (2004) では、(在米) 留学生を教える教授にインタビューした結果、教授たちは留学生にHardworking, organized, motivated, retiring, introverted, lacking self-confidence などステレオタイプの印象を持っていることが報告された。

以上の先行研究によって、異文化滞在者のパーソナリティ特徴が示されているが、それは移民や留学志向する人がもともと持っていた特徴なのか(移民/留学志向)、それとも異文化経験による結果であるか(移民/留学効果)、それらの研究では明確に区別されていない。本論では、留学生の本来のパーソナリティ特徴を把握するため、留学前という時点で、留学したい「留学志向有」のひと、留学したいと思わない「留学志向無」の人のパーソナリティを比較することによって、留学志向者のパーソナリティ特徴を検討することを目的とする。留学志向者も移民志向者のように、高い仕事志向や高い達成動機などの特徴を持つ。また、それらの特徴は留学中の異文化適応にポジティブな影響を与えるか、それともネガティブな影響を与えるか。本論は、さらに対象者の留学過程を追跡していくことによって、それぞれ解明していく。

2.5.2 異文化接触によるパーソナリティの変化

一方、留学中の異文化環境や異文化体験によって、留学生のパーソナリティにおいて、変化が起きるか、それも本論のリサーチ・クエスチョンの一つである。

パーソナリティの変容について、榎本らが著した「パーソナリティ心理学」(榎本, 堀毛, 安藤, 2009)の中には以下のように述べられている:

「パーソナリティの発達的变化は、遺伝要因と環境要因の絡み合いによって生じると考えられる。……パーソナリティは変わるのか変わらないのか、パーソナリティのどのような側面が変わりやすくどのような側面は変わりにくいのかといった議論があり、さまざまな研究が行われています。一般的に遺伝要因に強く規定される性質は変わりにくいと考えられています。……ただし、ここで取り上げるパーソナリティの発達的变化は、パーソナリティの表れの変化も含まれます。」(p. 136)

Caspi & Roberts (1999) も、「遺伝子の規定によって、個人のパーソナリティはある程度安定しているが、社会文化や個人内環境の変化によって、パーソナリティにも進化や変化をもたらすことが理解されている」と述べた。(p. 300 - 326)

以上述べたように、遺伝によるパーソナリティの安定性が強調されている一方、環境による発達性も想定されている。

先行研究では、異文化接触によって、受け入れ文化への肯定的・客観的態度の形成、自文化の見直し、広い世界観の獲得、ステレオタイプや自文化中心主義の低減、自己知覚の拡大、など個人の認知・行動への影響が知られている (Adler, 1975; 加藤・加藤, 1984; 斎藤, 1986; 星野, 1990)。異文化滞在が長期化した場合には、文化的アイデンティティの変化など個人の内的な問題が生じるとみなされている (箕浦, 1995; 秋山, 1992)。例えば、異文化接触とバイリンガリズムは移民者のパーソナリティやアイデンティティに大きな影響を与えていることが示唆された (Boski et al., 1989; Ervin-Tripp, 2011)。また、社会化の途上で異文化接触を経験する児童・青年の場合は、比較的短時間の接触によっても、発達の側面に強く影響が生じる (大西, 2001)。例えば、西 (1993) では、アメリカ滞りが少年期のアイデンティティに及ぼす影響が示唆された。趙 (2007) では、来日した中国人高校生の文化的アイデンティティの変容および再形成が観察された。また、留学生を対象とした縦断研究では、留学経験によって自信が出て、前向き志向になったことが示唆された (青木・松原, 2010)。早矢仕 (2002) では、日本人留学生の自尊感情と自己効力感が留学前より高くなったことが示された。このように、異文化接触の影響を時間軸で考察すると、個人の発達面に様々な変化が見られることがわかった。本論では、まだ研究の進んでいない在日中国人留学生のパーソナリティに焦点をあて、日本での留学生活によって彼らのパーソナリティにどのような変化が起きるのかについて検討する。

第 3 章 本論文の構成

本章では、前述した理論と先行研究を踏まえて、本論文の構成、及びデータソースについて述べる。

3.1 本論文の構成

本論文は、序論、本論、結論および補論から構成され、本論は留学生のパーソナリティ（第Ⅰ部）とパーソナリティと異文化適応との関連（第Ⅱ部）、2部構成となっている。

Figure 3.1 に示す通り、本論の第Ⅰ部では、留学生のパーソナリティ自体に焦点を当て、留学志向による特徴と留学効果による変化を検討することを目的としている。第4章（研究1）では、「留学志向有り」と「留学志向無し」の人のパーソナリティを比較することによって、留学志向者のパーソナリティ特徴を調べる。第5章では、中国人留学生が日本での留学経験によって、パーソナリティに変化が生じるかについて、個人内基準と個人間基準でその変容を調べる。その中、5.1（研究2）では、縦断調査で留学1年間におけるパーソナリティの変化を観測する。5.2（研究3）では、さらに留学1年間以上の長期留学生を加え、長期留学生、短期留学生（留学1年未満）と非留学生のパーソナリティを比較することによって、留学経験によるパーソナリティの変化を検討する。

第Ⅱ部では、留学生にとって最も適応に困難をきたす1年目に注目し、在日中国人留学生の適応状態とパーソナリティとの関連を検討することを目的としている。まず、第6章では、横断的視点および縦断的視点から在日中国人留学生の異文化適応実態について検討する（研究4、研究5）。そして、第7章では、横断調査と縦断調査を通じて、パーソナリティの異文化適応への影響を検討する。7.1（研究6）では、TCIパーソナリティの7因子がそれぞれ異文化適応にとって促進要因となるのか、リスク要因となるのか、横断調査によって、パーソナリティと異文化適応の関連について検討を行う。7.2（研究7）では、さらに縦断データを用いて分析し、因果関係でパーソナリティの異文化適応への影響を検討

する。第 8 章（研究 8）では、異文化適応の過程中的内的リソースおよび外的リソースに焦点をあて、パーソナリティと異文化適応の間におけるリソースの媒介作用を検証する。

以上の結果を踏まえて、第 9 章の結論にて、本論文の総括ならび貢献、提言、さらに今後の課題について述べる。

最後に、交換留学生という異文化接触者の特徴として、一定の留学期間終了後に一旦本国に帰ることが予定されているため、彼らの帰国後の適応問題も異文化接触による異文化適応問題の一環として考慮に入れなければならない。ようやく海外での異文化環境に慣れた際に、一旦母国に帰ってみると、慣れ親しんだ、よく知っている環境にも関わらず、「何か以前とは違う感じがする」という違和感は、久しぶりに母国に帰国した留学生の多くが体験するものである。ある程度で、今度は母国の文化が「異文化」となっている。それは「逆カルチャー・ショック」と呼ばれる現象である（Gaw, 2000）。本論文では、その帰国後の適応状況について大規模の量的調査を実施することが実現できなかったが、試みとして本論対象者の中の 10 人に帰国後の再適応についてインタビューを実施した。そのインタビュー結果に基づき、補論では、質的分析を行ない、中国人留学生が日本から帰国した後の適応実態および適応困難の原因について探索してみることを目的としている。

本論の構成

第I部：留学生のパーソナリティ特性

研究1

留学志向によるパーソナリティの特徴

研究2,3

留学効果によるパーソナリティの変化

第Ⅱ部：パーソナリティと異文化適応との関連

研究4,5

異文化適応の実態

研究6,7

パーソナリティによる異文化適応への影響

研究8

パーソナリティ・リソース・異文化適応の関連

Figure 3.1 本論の構成

3.2 本論文のデータソース

本論文では、4つのデータソースを使用した（Table 3.1を参照）。以下に各データソースの概要を示す。調査内容、尺度、分析に使用した尺度における調査対象の特徴などの詳細については、本論中の各章で示す。いずれの調査データにおいても、欠損値があったが、データソースに掲載している数は最後の有効回答者の人数である。また、分析の目的によって対象者の中から分析者を選抜している場合があるため、対象者と分析対象者の人数が異なることがある点に注意されたい。

Table 3.1 本論文のデータ・ソース

	調査Ⅰ	調査Ⅱ	調査Ⅲ	調査Ⅳ
調査方法	質問紙 横断	質問紙 縦断	質問紙 横断	interview 横断
調査対象	中国の 大学生 (176人)	来日留学予定のある 中国人大学生 (231人)	在日中国 人留学生 (182人)	日本から帰国 した中国人留 学生(10人)
調査時期	06年9月	07年—09年 T0=出国1ヶ月前(231人) T1=留学1ヶ月後(36人) T2=留学半年後(151人) T3=留学一年後(72人)	07年、08年	08年10月
使用した研究	研究1,3	研究1-8	研究2,4,6,8	研究9(補論)

1. 調査Ⅰ

本データは、中国上海の大学に在籍している中国人大学生を対象に実施した横断調査のデータである。

① 調査対象者

中国にいる中国人大学生

② 調査方法

中国上海と浙江省にある2つの4年制共学大学の教員を通じて、在学している中国人大学生200名に調査協力を依頼した。協力者の同意を得た上で、各大学の教室で質問紙調査を行なった。有効回答数計176名、有効回収率88%。

③ 調査時期

2006年9月

2. 調査Ⅱ

本データは日本で1年間以上留学する予定のある中国人大学生を対象に実施された縦断調査のデータである。

① 調査対象者

日本で1年間以上留学する予定のある中国人大学生

② 調査方法

中国の北京、上海、大連における4つの大学の教員を通じて、これから日本で1年間以上留学する予定のある中国人大学生に調査協力を依頼した。同意を得た上で、彼らを対象に、留学直前 (Time0=留学1ヶ月前)、留学直後 (Time1=留学1ヶ月後) 留学半年後 (Time2)、留学1年後 (Time3) のパーソナリティと適応状態について、回の追跡調査を実施した。留学直前の調査はすべて中国現地の大学で行なった。その後、彼らは主に東京、金沢、長崎、福岡、長野、鹿児島にある10ヶ所の大学に居住していたため、留学後の追跡調査では、東京と金沢にいる対象者に現地で調査を実施したが、長崎、福岡、長野、鹿児島にいる人にはインターネットを利用しWeb調査を通じて追跡調査を行なった。Time0時点で有効回答数は231名であった。

③ 調査時期

追跡調査を実施した時期はTable 3.1 を参照。

3. 調査Ⅲ

本データは東京と金沢市にある大学（大学院）に在学している中国人留学生を対象に実施された横断調査のデータである。

① 調査対象者

在日中国人留学生

② 調査方法

東京と金沢市にある 4 ヶ所の 4 年制大学の国際交流センターの教員を通じて、在学している中国人留学生（年齢 30 歳以下、来日年数制限なし、計 250 名）に調査協力を依頼した。同意を得た上で、各大学の教室で調査票を配布し、無記名で回答してもらった。合計 182 名分を回収した（回収率 73%）。

③ 調査時期

2007 年，2008 年の 2 年間中

4. 調査Ⅳ

本データは日本から帰国した元留学生を対象に実施されたインタビュー調査のデータである。

① 調査対象者

調査Ⅱの調査協力者の中で 1 年間の日本留学を終了した後、帰国した元中国人留学生

② 調査方法

調査Ⅱの最終回の質問紙の最後に「帰国後の調査にも参加したいですか」という質問を設けた。それについて「はい」と答えた元留学生の中に、留学前後条件の同質性を考えた

上で、出身大学が同じである 10 名にインタビュー調査の協力を依頼し、帰国直後の 1 ヶ月中に中国現地でインタビューを行なった。

③ 調査時期

2008 年 10 月

3.3 調査対象者の特徴

本論の対象者は一般中国人留学生であるが、留学生の中でも、留学費用によって公費留学生と私費留学生、留学目的によって語学勉強ための短期留学生と学位習得ための長期留学生、そして個人単位で留学する人と集団単位で留学する人など、様々な種類がある。それによって、留学生のデモグラフィック属性や留学条件、留学目的、留学後の進路などが大きく異なることが考えられる。

本論では、パーソナリティ要因から異文化適応への影響を検討することを目的としているため、可能な限り他の属性を統制することが望ましいと考え、主に集団で来日する中国人交換留学生を調査対象者にすることにした。大学の交換留学制度によって集団で来日する場合、留学の目的や、在日期间、留学先の学校環境、住環境、言語能力、経済状態などの条件がある程度統制されるため、比較的等質な被験者になるという点でメリットがあるといえる。近年、日中大学のグローバル化により大学間の国際連携が進み、来日する中国人交換留学生が増え続けている。留学生の中に、交換留学生は私費留学生の次に大きな割合を占めている。彼らの異文化適応は個人の発達に大きな影響を及ぼすだけでなく、両国の国際関係および大学間の交流事業にも影響を与えるため、この留学生集団の適応を検討することは社会的価値も研究的価値も十分あると考えられる。

ここで、本論の調査Ⅱ、調査Ⅲおよび調査Ⅳの対象者の基本状況を記述する。調査Ⅱの対象者（231 名）は全員交換留学生であった。彼らは主に中国の大連外国語大学をはじめ、北京言語大学、上海外国語大学といった外国語大学の日本語専攻の現役大学生であったが、

それらの大学と日本の大学間の締結により、1年間または2年間で日本の大学に編入する形で留学することになった。この4つの大学の交換留学制度に基づき、交換留学制度および交換留学生の特徴について簡単に紹介する。交換留学とは、大学と交換留学協定を結んでいる海外の大学との間で、留学生を相互に派遣、受入する制度である。学内選考を経て認定された学生が交換留学生として留学する。留学先大学での授業料その他学納金は免除となるが、留学先の寮費等生活費は自己負担となる。留学期間中も、所属大学には、授業料・教育充実費を納入する必要がある。留学期間は1学期から1年間という設定が多いが、締結学校の協定によって異なることもある。留学先大学で修得した単位は所属大学の単位として認定されるため、留学による留年がなく、留学終了後は所属大学に戻り、元通りに次の学年（学期）に進む。それらの制度によって、一般の留学生と比べて、学校の選考により選ばれた交換留学生はある程度の外国語能力や海外での生活能力を持ち、留学の目的及び帰国後の進路がより明確であり、両学からより多くのサポートを得られるといった特徴が想定されている。特に、学業だけでなく、異文化接触の面において、交換留学協定により、大学側から異文化交流や異文化体験などのイベントが交換留学事業の一部としてより頻繁に主催されることが留学中の異文化接触と異文化理解を促進すると考えられる。また、留学先での生活費は一般私費留学生と同じく自己負担になるが、留学大学の学費は全額免除または部分免除となるといったメリットがある。以上によって、交換留学生の基本状況は国費留学生ほど良くないが（国費留学生は学費の免除ないし生活費の支給など優遇がある）、一般の私費留学生よりは良好であると考えられる（例えば、学費の部分免除や、留学全過程において出身大学と留学先の大学、および留学生同士からより多くのサポートが得られるなど）。しかし、比較的に短期間の留学期間内に、異文化生活に適応しながら、出身大学と留学先の大学の課程を両方修得しなければならないことは一般私費留学生より学業におけるプレッシャーが大きいと考えられる。また、日本での生活費は中国より高いため、ほとんどの交換留学生も私費留学生のようにアルバイトをしなければならない現状である。

来日初期には、日本語が不十分のため、留学生はブルーカラーの職種につくことが多い。高学歴を持つ人であればあるほど、アルバイト先で低学歴者との接触にギャップを強く感じ、日本における異文化接触に対し、高い不満を持っている（加賀美，1994；孫，2004）ことが示唆されている。従って、異文化受容、自立生活、アルバイト、およびより高い学業達成動機などによるストレスは他の私費留学生と同様と推測され、彼らの異文化適応は楽観視できないだろう。

調査Ⅲの対象者（182名）の中に、140名は交換留学生（留学1年未満）であったが、長期留学生のデータを収集する際に、留学1年間以上の交換留学生が少なかったため、42名の一般私費留学生を対象に調査を実施した。この42名の私費留学生は140名の交換留学生と同じ大学に在学しているため、留学先の学校環境はある程度同質であると考えられる。

調査Ⅳの対象者（10名）は調査Ⅱの中の10名であった。彼らは1年間の交換留学生生活を終え、元の大学（全員中国上海にある2つの4年制大学）に戻り、大学4年生になった時点で、インタビュー調査に協力した。

本 論

第 I 部 留学生のパーソナリティ特性

第4章 留学志向によるパーソナリティの特徴

本章では、留学生のパーソナリティの特徴を検討するため、まず留学前という異文化接触する前の時点において、留学志向者と非留学志向者のパーソナリティを比較し、留学志向によるパーソナリティの特徴を把握しておく。

4.1 留学志向者と非留学志向者のパーソナリティ比較（研究 1）

目 的

そもそも留学という行動を選択する集団はどのようなパーソナリティの特徴を持っているのか。留学することは様々な困難が予想される中で異文化社会で一定期間に生活しているという大きな挑戦であり、異文化留学を行うその決意の背景には特徴的なパーソナリティが存在する可能性が考えられる。例えば、同じ異文化集団としての移民者に関する研究では、非移民者よりも仕事志向の高さや高い達成動機、高い権力への志向性を持つことなどが明らかにされている（Boneva et al., 2001）。

しかし、留学生のパーソナリティ特徴については未だ検討がおこなわれていない。これを明らかにすることは留学中の適応を支援していくうえでも重要な意味を持つと考えられる。本論では、在日中国人留学生のパーソナリティ特徴を明らかにすることを目的としている。序論にも述べたように、具体的には、留学志向と留学効果という二つの側面から、留学生のパーソナリティ特徴を検討していくが、ここではまず留学志向の有無によってパーソナリティに違いがあるかについて検討する。

方 法

使用データ 調査Ⅰと調査Ⅱの一部（第3章を参照）

調査対象者

これから日本へ留学する予定のある中国人大学生（大学院生を含む）と留学予定のない大学生を対象に、質問紙調査を実施した。

調査手続き

留学予備群：中国の北京、上海、大連における4つの大学の教員を通じて、2007年9月から日本で1年間以上留学する予定のある中国人大学生66名（男子17名、女性49名）に調査協力を依頼した。同意を得た上で、彼らが出国する前の1ヶ月の間に、各大学の教室で、彼らの留学前のパーソナリティについて質問紙調査を行なった。調査票はその場で回収した。年齢19–24歳（ $M = 21.14$, $SD = 1.08$ ）。

中国人大学生：2006年9月の間に、中国上海と浙江省にある2つの4年制共学大学の教員を通じて、在学している中国人大学生200名に調査協力を依頼した。同意を得た上で、各大学の教室で、彼らのパーソナリティおよび留学志向の有無について質問紙調査を行なった。有効回答人数は176名（男子61名、女性115名）であった。年齢18–23歳（ $M = 20.24$, $SD = 1.19$ ）。

調査内容

1. デモグラフィック属性：年齢、性別

2. 留学志向の有無：

A. 留学予備群に、「自分の意志で留学することにした」

B. 普通の中国人大学生には、「可能であれば、留学してみたいと思っている」

という質問について「はい、いいえ」で答えてもらう。

3. パーソナリティの測定：

Cloninger, Svrakic, & Przybeck (1993) の Temperament and Character Inventory (TCI) 中国語版 (125 項目) を使用した。「当てはまる」から「当てはまらない」の4件法で尋ねた。TCIの7次元は、4つの性格（新奇性追求、損害回避、報酬依存、固執）と3

つの気質（自己志向，自己超越，協調性）からなる（各下位尺度の詳細についてはCloninger, Przybeck, Svrakie, & Wetzel, 1994 および木島・斎藤・竹内・吉野・大野・加藤・北村, 1996 を参照）。新奇性追求及び，損害回避，報酬依存，固執，自己志向，自己超越，協調性の α 係数はそれぞれ .68, .89, .62, .65, .83, .90, .88 であった。

結 果

1. 留学志向の有無による群分け

留学意欲の有無によって，留学する意欲のある人となない人を「留学志向あり」と「留学志向なし」という 2 群に分ける。留学予備群の 66 名は全員「はい」という回答であったため，全員「留学志向あり」群に入れた。普通の大学生には，「いいえ」と答えた 104 名を「留学志向なし」群にいれて，「はい」と答えた 72 名を「留学志向あり」群に入れた。計，「留学志向あり」群 138 名，「留学志向なし」群 104 名。

2. 「留学志向有り」群と「留学志向無し」群のパーソナリティの比較

まず「留学志向あり」群の中の，留学予定のある 66 名（留学予備群）と留学予定のない 72 名（普通の大学生）のパーソナリティについて平均値の t 検定で分析した結果，TCI7 次元において，5%の有意水準ですべて有意差がなかった。よって，「留学志向あり」の大学生と留学予備群のTCI特性が同質であると判断した。

次は「留学志向あり」群と「留学志向なし」群のTCI特性について，平均値の t 検定で分析した。その結果，損害回避の下位尺度「不確実性恐れ」，「易疲労」，固執，自己志向の下位因子「目的指向」，協調性およびその下位因子「純粋性」にそれぞれ有意差が見られた（Table 4.1）。よって，「留学志向あり」群が「留学志向なし」群より，損害回避が低い，固執・自己志向・協調性が高い傾向が示された。

Table 4.1 「留学志向あり」群と「留学志向なし」群のパーソナリティ比較

TCI下位尺度	留学志向なし(N=104)		留学志向あり(N=138)		t 値
	M	SD	M	SD	
新奇性追求	48.43	7.67	49.01	8.03	-0.57
探究心	12.28	2.57	12.83	2.49	-1.67
衝動性	11.88	3.08	11.99	4.42	-0.22
浪費性	11.68	2.85	11.62	2.63	0.17
無秩序	12.60	2.65	12.58	2.47	0.05
損害回避	47.58	8.48	45.72	8.82	1.64
悲観	12.00	2.29	12.02	2.41	-0.07
不確実性恐れ	12.60	2.89	> 11.86	2.74	2.03 *
人見知り	11.41	3.18	11.01	2.89	1.04
易疲労	11.57	2.67	> 10.84	2.97	1.96 *
報酬依存	37.98	5.53	38.78	5.17	-1.16
感傷	13.24	2.59	13.76	2.25	-1.67
愛着	12.58	2.96	12.87	3.18	-0.73
依存	12.16	2.55	12.15	2.63	0.03
固執	13.26	2.44	< 14.93	2.60	-5.09 ***
自己志向	66.11	10.28	67.93	9.53	-1.43
自己責任	14.55	2.92	14.62	3.04	-0.18
目的指向	13.19	3.05	< 14.57	2.73	-3.68 ***
臨機応変	13.59	2.99	14.05	2.47	-1.32
自己受容	11.01	3.11	10.91	3.14	0.24
自己啓発	13.77	2.78	13.79	2.26	-0.06
協調性	74.19	8.50	< 77.12	9.94	-2.41 *
社会受容	14.65	2.55	15.26	2.53	-1.84
共感性	15.03	2.13	15.50	2.48	-1.55
協力性	14.40	1.94	14.73	2.22	-1.20
同情心	14.53	2.95	15.28	3.28	-1.85
純粋性	15.58	2.62	< 16.35	2.43	-2.36 *
自己超越	35.04	7.90	36.86	8.55	-1.69
直感力	10.98	3.45	11.66	3.79	-1.43
充足感	12.01	2.97	12.68	3.03	-1.72
一体感	12.05	2.72	12.51	3.09	-1.22

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考 察

本研究では、留学意欲を持つ人を留学志向者と定義し、このような人のパーソナリティにどのような特徴があるかについて検討するため、「留学志向有」群と「留学志向無」群のパーソナリティを比較した。その結果、留学志向者には、損害回避がより低く、固執および自己志向、協調性がより高い傾向が示された。

詳しく見ると、損害回避では、下位因子の「不確実性への恐れ」と「易疲労」において、留学志向者の得点が有意に低いことが見られた。「不確実性への恐れ」と「易疲労」は不安・緊張と疲れやすさを表すものである。つまり、心配症、緊張しやすい、ストレス・疲労を感じやすい人は留学しない、逆に、慣れない環境にも直ぐに適応でき、緊張せず、疲労やストレスから回復しやすい人は留学意欲が高いという傾向が示唆されている。これはRay (1986) によって検証された、移民者は非移民者と比べて、anxiety (不安) とinsecurity (不安定) の傾向が弱いという結果と一致している。

そして、固執性の得点もより高いことから、留学志向者は目標を達成するまでやり遂げる忍耐力がより強い傾向が示された。この特徴は移民者にも見られている。Boneva ら (2001) によると、移民者が非移民者より高い達成動機を持つことが示されている。

自己志向の総合得点には、有意差がなかったが、下位因子「目的指向」には有意差が見られた。「目的指向」は目的指向性を表すものである。つまり、留学意欲のある人には、自分の人生の目的や意味を認識していて揺るがない性格を持つ人が多い。

協調性では、総合得点にも下位因子「純粋性」にも有意差が見られた。TCIの協調性尺度には社会受容、共感性、協力性、同情心および純粋心を含めている。よって、留学志向者の協調性（特に「純粋性」）が有意に高いことは、彼らの社会受容性や共感性がより高く、利己主義に寄らず他人と協力できるといった性格特徴があることが示唆されている。

また、留学志向者の新奇性追求がより高いと思われがちであるが、本研究の結果によってこの傾向はやや見られたが、統計上には有意差が認められなかった。

以上に示したパーソナリティ特徴から見ると、留学志向者は単純に新奇性や探求心が高いから外国に行って留学してみたいというような人は少ない。つまり、人間の行動促進要因である新奇性追求が留学意欲を促すという傾向は確認できなかった。逆に、行動制御要因である損害回避は留学意欲を抑える強い因子であることが示唆された。異国での留学生活には様々な困難や不安定要素が予測されるため、リスクやストレスを感じやすい人は異文化体験に興味があっても留学はしたくないと考える傾向があるのではないかと解釈できよう。また、固執性、自己志向性と協調性も留学志向を支える特性であることが示された。つまり、自分の意志力（will-power）が強く、自分が選択した目的に従って状況に合う行動を取れる人なら、自分は異国で一人でも生きていけると考え；目標を達成するまで諦めない粘り強い人なら、自分は留學生活中の困難を乗り越えられると考え；社会受容性や協力が高い人なら、自分は異文化や異国の人も受け入れられると判断し、留学を選択する可能性が高まるのではないだろうか。

また、留学志向者に見られた不安・緊張傾向が低い、達成動機が高いと言った特徴は移民者のパーソナリティ特徴と一致していることから、それらの特徴が異文化環境に移住する意欲を持つ人の共通点であるかもしれない。

ただし、本研究で測定されたパーソナリティ特性の得点は自己評価によるものであったため、自己評価に起因するバイアスも考慮に入れなければならない。つまり、本研究で見られたパーソナリティの特徴は本当の留学志向者の行動特徴ではなく、あくまで留学志向者がそのような自己像を描きがちであることを示しているのかもしれない。移民者を対象とした先行研究にも同じ問題が存在しているだろう。今後は他者評価の尺度も加えてこれらの結果を検証することが望ましい。

第 5 章 留学効果によるパーソナリティの変化

序論にも述べたように、パーソナリティの発達的变化について、様々な議論が行われ、遺伝によるパーソナリティの安定性が強調されている一方、環境による発達性も肯定されている。特に、パーソナリティと文化との相互作用はパーソナリティの発達 (Havighurst, Kuhlen & McGuire, 1947) またはパーソナリティの進化(Tuckman & Widener, 1997)を促進する要因であるとみなされている。異文化接触によって移民者の認知、行動、パーソナリティ、アイデンティティなどに変容が起きることが先行研究で検証されている(Boski, et al., 1989; Ervin-Tripp, 2011)。しかし、異文化接触による留学生のパーソナリティ変化を取り上げる研究はまだ少ない。留学生は異国に滞在する期間が移民と比べると短いものの、留学による生活環境の変化が、青年期から成人に移行する発達段階に置かれている彼らのパーソナリティに、どう影響しているのか注目する必要がある。Stitsworth (1989) は、留学中の異文化環境によって留学生のパーソナリティが変化する可能性を指摘している。大西 (2001) も、社会化の途上で異文化接触を経験する児童・青年は、比較的短時間の異文化接触によっても、発達の側面に強く影響が生じると述べた。例えば、趙 (2007) では、来日した中国人高校生の文化的アイデンティティにおける変容および再形成が検討された。日本人留学生を対象とした縦断研究では、留学経験による自尊感情と自己効力感の向上 (早矢仕, 2002) が示唆されている。

本章では、中国人留学生の来日 1 年目に注目し、彼らが日本の社会文化に適応していくうちに、パーソナリティに変化が生じるかについて、横断研究と縦断研究を用いて個人内基準と個人間基準でその変容を検討することを目的とする。

日本と中国は地理的に近く、アジア文化の共通要素を有しているが、両国の社会文化には様々な差異が存在している (元, 2002)。また、経済発展から見ても、先進国である日本と途上国である中国の間に、生活環境においても大きな格差が存在している (Shwalb, Nakazawa, Yamamoto & Hyun, 2004)。この大きな文化差の下での留学経験は発達移行期における中国人留学生のパーソナリティに影響を及ぼすと予測される。

5.1 留学 1 年間ににおけるパーソナリティの変化（研究 2）

目 的

本研究は、中国人留学生が日本で留学している 1 年目の間に、パーソナリティに変化が起きるのかについて、3 時点の縦断研究で個人内の変化を検討する。

方 法

使用データ 調査Ⅱデータ（第 3 章を参照）

調査対象者

日本への留学予定のある中国人留学生を対象に、質問紙調査を 3 回（T0＝留学直前，T2＝留学半年後，T3＝留学 1 年後）実施した。3 回の調査にすべて参加した人は 72 名であった（男子 19 名，女子 53 名）。年齢範囲 19－26 歳（ $M = 21.18$ ， $SD = 1.29$ ）。

質問紙の構成

デモグラフィック属性：年齢，性別，滞在期間

パーソナリティ：

Time0（留学直前）：TCI 中国語版（125 項目）（尺度の内容は研究 1 を参照）

Time2（留学半年後）：TCI 中国語版の短縮版（55 項目）

Time3（留学 1 年後）：TCI 中国語版の短縮版（55 項目）

TCI 中国語版の短縮版は、TCI 中国語版の 125 項目を用い、150 人を対象とした予備調査で得られたデータに対して、因子分析と信頼性分析を行い、7 次元の各下位尺度において、信頼性と因子負荷量の高い項目を選んで作成したものである。回答は、「当てはまらない（1 点）」から「当てはまる（4 点）」の 4 件法で尋ねた。

尺度の詳細内容は研究 1 を参照

結 果

3 時点のパーソナリティ得点の間に変化があるかについて検討するため、対応のあるサンプルのt検定を行なった。その結果、新奇性追求以外のパーソナリティに有意差が見られた。損害回避と報酬依存において、T2 とT3 の得点がT0 より有意に上昇したが、T2 とT3 の間には有意差がなかった；固執と協調性でも、T2 とT3 の得点がT0 より有意に低下したが、T2 とT3 の間には有意差がなかった；自己志向と自己超越においては、T2 の得点がT0 より有意に低下したが、T3 の得点がまた上昇し、T0 およびT2 との間に有意差が見られなくなった；3 時点の新奇性追求得点には、有意差が認められなかったが、少しずつ低下している傾向が見られた。(Table 5.1, Figure 5.1)。

Table 5.1 3時点におけるパーソナリティ得点の平均値の比較($N = 72$)

	新奇性追求	損害回避	報酬依存	固執	自己志向	協調	自己超越
Time0	26.01	17.51 a	20.24 a	9.19 a	24.74 a	30.72 a	13.64 a
Time2	25.92	18.59 b**	21.47 b**	8.31 b**	23.46 b*	28.94 b**	12.67 b*
Time3	25.65	18.32 b*	22.46 b**	8.44 b**	24.19	29.88 b*	12.72

aとbの間に有意差があり, ** $p < .01$, * $p < .05$

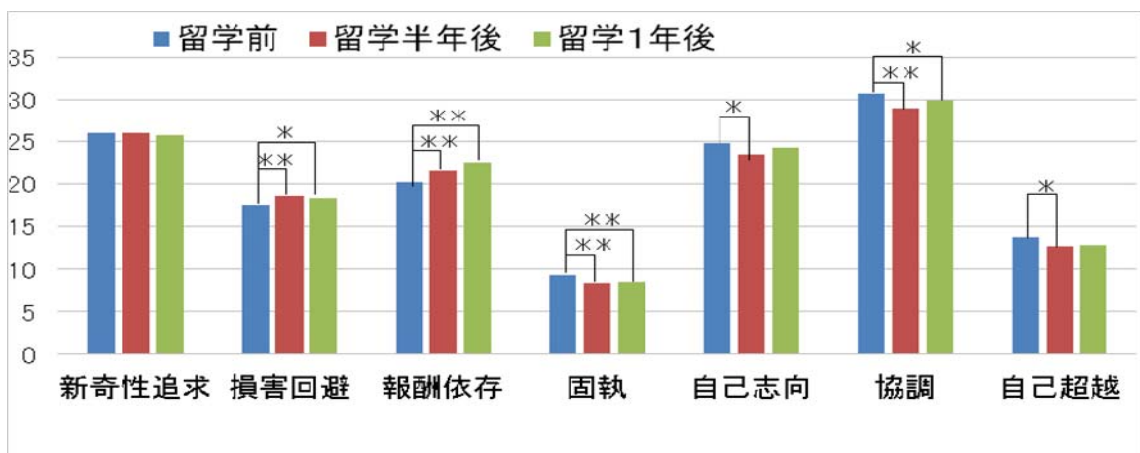


Figure 5.1 3 時点におけるパーソナリティの比較. ** $p < .01$, * $p < .05$

考 察

本研究では、中国人留学生を対象に留学直前から留学 1 年後までの 3 時点で、縦断調査を行なった。その結果、中国人留学生が日本で留学している 1 年目の間に、7 つの気質・性格特性において、様々な変化が見られることが分かった。

損害回避において、留学半年後（T2）と留学 1 年後（T3）の得点が留学直前（T0）より有意に高かったことから、留学後、損害回避が留学前より上昇したことが示された。T2 と T3 の間に有意差はなかったが、T3 の得点が T2 よりやや低くなった傾向が見られた。TCI パーソナリティ理論（Cloningerら, 1994）によって、損害回避は行動制御を示すブレーキのような特性である。損害回避が高い人は、用心深い、緊張している、予期不安、怖がり、内気、そして疲れやすいといった特徴を持つ。よって、個人が留学後、突然新しい社会文化や生活環境に置かれて、知らないまたは馴染みのない物事が沢山あり、生活の不確実性が高いため、緊張感や不安が高くなり、精神的に疲れやすい、行動にもブレーキをかけることが多いと推察される。この未知な世界に慣れるまでは緊張や不安が続くだろう。この結果は第 8 章に示した、留学生の 1 年間における状態不安の変動と一致している。その後、T3 時点での損害回避が T2 よりやや低くなった傾向から、1 年間をかけて、留学生が異文化環境に慣れていくうちに、徐々に落ち着く可能性が示唆された。

新奇性追求には、留学前後に有意な変化が認められなかった。この結果より、異文化環境は個人の新奇性追求に影響しにくいと考えられる。傾向としては、1 年間でやや低くなっている様子が見られた。新奇性追求の高い人は新しい物事やスリルを求める、意思決定が早い、衝動的な行動が多いといった特徴がある。日本での異文化体験によって、新しい物事に対する好奇心がやや低くなって、衝動的な行動も少し抑えられたのではないか。

報酬依存の得点が、T2 と T3 において、T0 時点より有意に高くなったことは、報酬依存が留学後に上昇したことを示した。T2 と T3 の間に有意差はなかったが、さらに高くなる傾

向が示された。報酬依存は、情にもろい、社会的愛着、そして他者の賞賛に対する依存のような傾向性を示すものである。中国人留学生の報酬依存が高まったことには日本文化の影響が大きいと考えられる。日中文化差として、日本人は組織や社会への愛着性が高く、感情がより繊細で、他者との共感を大事にするが、それに対し、中国人は社会組織より身内や家庭への愛着性が高く、他人との共感より個人の独立性や個性が求める（ヤマモト，2007）。日本人はつねに他者に依拠し、集団での行動を好み、集団に依存するという行動特性も指摘されている（近藤，1981；木村，2009）。よって、日本文化の下で日本人との接触を重ねるにつれ、在日中国人留学生も社会や集団、身内以外の他人への依存が強くなり、共感性も高くなったのではないかと考えられる。一方、日中の文化差だけではなく、一般的に新しい環境に適応する過程で同様な現象（他者への愛着や依存性が高まる）が生起する可能性も排除できない。特に、「他者の心理状態を正確に判断する認知能力」とされる共感性は（鈴木・木野，2008），異文化受容態度に影響を及ぼす（前村，2009），文化の異なる他者を受け容れるために重要な情緒的特性であると考えられるため，異文化環境での滞在期間が長くなるにつれ，異文化接触経験の増加が留学生の共感性を高めることも推測される。今後は日本以外の異文化環境でこの現象を確かめる必要があるだろう。

固執では、留学後の得点が留学前より有意に低くなったことから、1年間の留学生活で留学生の持続性や行動に対する固着、完璧主義などの傾向が低下していることが示唆された。つまり、目標に向かっている途中で、困難や挫折に遭われたら、諦めることが多くなっている。日本人のいわゆる根性強さがよく知られているため、中国人留学生もその文化の下で持続性や忍耐力が高くなると予測していた。しかし、本研究は逆の結果を示した。留学生にとって初めての留学生活が容易ではなく、特に1年目、思った以上の困難やストレスに直面されることで留学生のやる気や持続性が弱まったと推察される。一方、T3の固執性はT2よりもやや高い傾向を示しており、留学後1年間のスパンで見ると、U型曲線を示す傾向にあると考えられる。

自己志向においても、T2の得点がT0より有意に低下したが、T3時点ではまた上昇し、T0と同じ水準に戻ったことが示された。つまり、自己志向にもU型曲線の傾向があると考えられる。自己志向とは、自己決定や意思の力（will power）、もしくは選択した目的や価値に従って、状況に合う行動を自ら統制し、調整する能力を示すものである。留学生が異文化に置かれた最初の段階では、様々な困難やカルチャー・ショックによって自分の方向性を失ったり、自己調整の能力が弱まったりするが、その環境に慣れていくうちに次第に自己志向性が回復してくると考えられる。

自己超越も自己志向と同様に、来日半年後は有意に低下したが、1年後の時点ではまたやや回復した傾向が見られた。つまり、留学半年後、留学生の直感力やひらめき、周囲・自然との一体感などスピリチュアリティに関するものが薄くなっていることが分かった。また、自己超越は個人の人生全般に対する満足感も反映していることから、第8章に示した留学1年目における心理的適応の低下との結果に一致している。

協調性でも、留学後の得点が留学前より有意に低下したことが見られたが、1年後の得点は半年後よりやや上昇して、U型曲線になる傾向が示唆された。集団主義や「和」の精神が強い日本文化において、留学生の協調性はますます高くなると予測していたが、結果は予測と反対であった。対象者のうち、数名にインタビューを行った結果、留学前、中国にいたときは、周りの人が異なる意見を持っても、周りも同じ文化圏の人であるため、それらの意見を受容できたが、日本に来てから、実際に異文化の人と接触している間に、余りにも価値観や文化が違うため、理解ができて、やはり受容はできないと認識するようになったことがあげられた。また、対象者の中に、日本で差別された経験が多少ある人もいたため、社会協調性を低下させたのではないかという解釈も考えられる。もう一つの解釈として、異国に来たばかりの留学生たちは自分の能力も利用できるリソースも限られているため、他人を助ける行動が減少したということである。その後は、異国での生活に慣れ

ていくうちに、日本文化もより深く理解できるようになったことで、社会受容性や協力性が少しずつ回復していると考えられる。

以上に述べたように、留学一年目の間に中国人留学生の気質と性格において、様々な変化が起きていることが明らかになった。特に、半年間の変化が著しく、統計的にも有意であることが示された。今までの先行研究では、留学3ヶ月後から1年間の間に心理的適応が低下していることが報告されているが (Zheng & Berry, 1991 ; 井上・伊藤, 1997), 留学生のパーソナリティにおける変化はほとんど触れられていない。本研究の結果によって、最も適応困難が生じやすいと思われる留学1年目の間に、適応状態とともに個人のパーソナリティにも変化が生じていることが示唆された。Stitsworth (1989) や大西 (2001) が指摘した異文化環境による青年期にある留学生のパーソナリティの可変性を実証した。

さらに、留学1年後は、新奇性追求と報酬依存以外、ほとんどの気質・性格に起きた変化が縮んでいく傾向が見られた。Lysgaard (1955) による適応のU型曲線仮説はパーソナリティの変化にも適用するかもしれない。ただし、本研究の結果では、半年後から1年後にかけての回復部分の変化は顕著ではなかった。今後、より長期的な追跡調査を行い、いつから本格的な回復が見られるか、またどの程度回復するのか、検討する必要がある。

5.2 留学生と非留学生のパーソナリティ比較（研究3）

目 的

5.1 では、中国人留学生の1年目の間に、個人内におけるパーソナリティの変化について縦断研究を行なった結果、U型曲線変化傾向がやや見られたが、半年後から1年後にかけての変化は顕著ではなかった。そこで本研究では、横断データを用いてより長期の留学経験のある対象を含めて、留学生と非留学生のパーソナリティを比較することで、個人間の差異を検討しながら、留学生のパーソナリティにおけるU型曲線変化をさらに検証していくことを目的とする。また、第4章で検証された留学志向によるパーソナリティへの影響を考慮し、本研究で扱う非留学生対象者は留学志向のある人に限定することにする。それによって、異文化環境での留学経験が中国人留学生のパーソナリティに及ぼす影響を検討していく。

方 法

使用データ 調査Ⅰ，調査Ⅱ，調査Ⅲのデータ（第3章を参照）

調査対象

本研究の分析対象者は非留学生と留学生からなる。留学生の中にはまた滞在期間1年を分け目にして、短期留学生と長期留学生に分けた。

a.非留学生：第5章の研究2の留学志向者と同じ（調査Ⅰと調査Ⅱのデータ）

計138人，男性66名，女性72名，年齢18－26歳（ $M=20.89$, $SD=1.26$ ）。

b.短期留学生：在日期間1年未満の中国人留学生（調査Ⅲのデータ）

計140人，男性58名，女性82名，年齢19－27歳（ $M=21.78$, $SD=1.03$ ）。

滞在期間6ヶ月－12ヶ月（ $M=7.81$, $SD=1.09$ ）。

c.長期留学生：在日期間1年以上の中国人留学生（調査Ⅲのデータ）

計42人，男子15名，女性27名。年齢20－32歳（ $M=24.12$, $SD=2.83$ ）。

滞在期間13ヶ月－72ヶ月（ $M=32.89$, $SD=12.67$ ）。

質問紙の構成

デモグラフィック属性：年齢，性別，日本での滞在期間

パーソナリティ：TCIの中国語版（125 項目）

尺度の詳細な内容は研究 1 を参照。

結 果

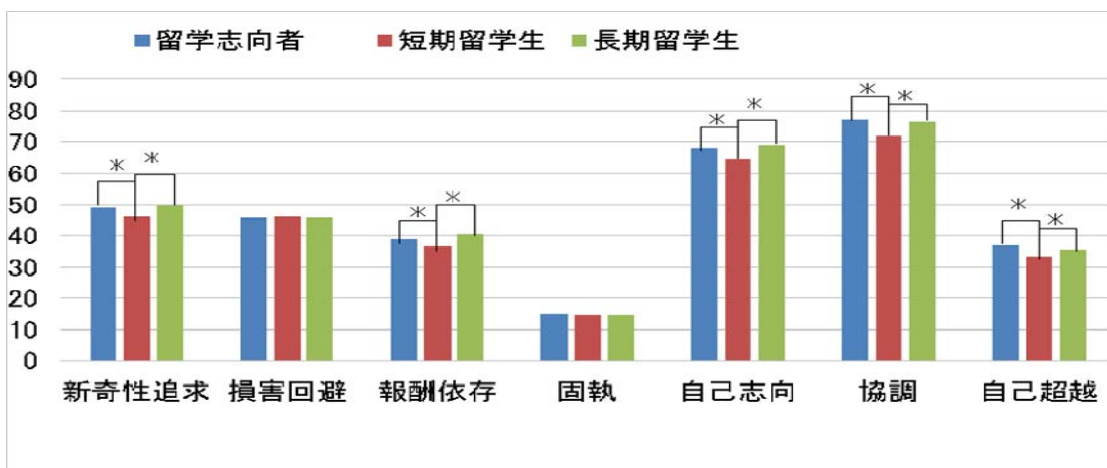
異文化環境から留学生のパーソナリティへの影響を検討するため，一元配置分散分析で非留学生，短期留学生，長期留学生のパーソナリティを比較した。その結果，Table 5.2.に示したように，損害回避と固執以外に，すべての気質・性格特性において，3 群の間に有意差が見られた(Table 5.2, Figure 5.2)。その有意差はほとんど短期留学生と他の 2 群の間に存在する。つまり，短期留学生と留学志向者の間に，新奇性追求，報酬依存，自己志向，協調性および自己超越においてパーソナリティの有意差が見られたが，長期留学生と留学志向者の間には有意差が認められなかった。

Table 5.2 留学生と非留学生のパーソナリティ比較

	留学志向者 (<i>N</i> =138)		短期留学生 (<i>N</i> =140)		長期留学生 (<i>N</i> =42)		<i>F</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
新奇性追求	49.01 ^a	8.03	46.16 ^b	7.67	49.60 ^a	6.69	5.99 **
損害回避	45.72	8.82	45.98	9.84	45.90	9.63	0.03
報酬依存	38.78 ^a	5.17	36.54 ^b	6.70	40.50 ^a	5.55	9.14 ***
固執	14.93	2.60	14.54	2.80	14.86	2.31	0.82
自己志向	67.93 ^a	9.53	64.43 ^b	12.77	69.17 ^a	11.51	4.62 *
協調	77.12 ^a	9.94	72.05 ^b	12.96	76.45	9.24	7.53 **
自己超越	36.86 ^a	8.55	33.31 ^b	8.36	35.79	7.32	6.43 **

注: * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(Turkey法)aとbの間に $p < .05$ で有意差がある。

Figure 5.2 非留学生と留学生のパーソナリティ比較. (* $p < .05$)

考 察

本研究では、留学志向のある非留学生、短期留学生および長期留学生のパーソナリティを比較した。その結果、新奇性追求、報酬依存、自己志向、協調性および自己超越において、短期留学生の得点が非留学生および長期留学生より有意に低いことが示されたが、長期留学生と非留学生の間には有意差が見られなかった。よって、留学効果による留学生と非留学生のパーソナリティ差は、短期留学生のみに見られる可能性がある。

また、本研究で扱った非留学生は留学生と同様に留学志向のある中国大学生であるため、彼らの状態が留学生の出国する前の状態に相当すると考えられる。彼らのパーソナリティを留学生のベースラインと見なすと、留学の1年目には個人のパーソナリティに様々な変化が起きるが、滞在期間につれて1年以上を経つと個人のパーソナリティがまた元に戻ることを示唆された。この結果は本章前半、研究2の3時点縦断調査結果に示されたU型曲線傾向と一致している。

新奇性追求において、研究2では1年目の間に留学生個人内の変化が顕著ではなかったが、本研究では、短期留学生の得点が非留学生より有意に低かったことが示された。留学の最初段階では異国の環境や社会文化にまだ慣れていなく、普段より慎重的に行動しなければならないため、衝動的、浪費的な行動を抑えたと推測される。また、日本社会の秩序が中国よりよく、日本人が規則などに対する要求も中国人より高いから、来日初期では環境に適応するため、中国人留学生も規則に従って行動することが増えたのではないかと考えられる。しかし、長期留学生と非留学生の間には有意差が見られなかったことから、新奇性追求の高い人だけがより長く異国に残ったという解釈より、留学生が環境に慣れていくうちにまた自分の本性に戻った可能性が高いかもしれない。

損害回避と固執では、3群の間に有意差がなかったことから、個人間の基準では、損害回避と固執において変動が起こりにくいのではないかと考えられる。また、損害回避がかなり高く、固執性が低いと長期留学はしないだろうという解釈も考えられる。

自己志向、協調性および自己超越においては、短期留学生の得点が非留学生より有意に低かったが、長期留学生と非留学生の間には有意差がなかった。よって、1年目の間に留学生の心理機能が低下したが、滞在期間につれて元の水準に戻ったことが示唆されている。それは研究2に示された留学1年目に起きた個人内の変化を個人間の基準で検証した一方、研究2の結果によって提唱されたパーソナリティにおけるU型曲線変化仮説を支持した。

報酬依存にも短期留学生の得点が他の2群より有意に低く、U型曲線変化が示された。これは研究2に示された1年間の間に増加する一方という結果と一致していないが、長期留学生の特性が非留学生よりやや高い傾向が研究2の結果と一致している。中国人留学生のパーソナリティは適応初期段階という特殊な時期を過ぎると、基本的に本性に戻るが、日本文化の影響によって、報酬依存がやや高まる可能性も考えられるかもしれない。

以上のことから、本研究では、新奇性追求、報酬依存、自己志向、協調性および自己超越において、留学期間につれてU型曲線のような変動パターンが見られ、異文化での留学生生活を適応していくうちにそれらのパーソナリティ特性も次第に元に戻っていく傾向が示唆された。

第5章の総合考察

本章では、在日中国人留学生のパーソナリティにおける変化について個人内基準（研究2）および個人間基準（研究3）で検討し、ほぼ一致した結果が示された。TCIパーソナリティ特性の7次元において、1年間の間に一時的な変化が生じたが、1年後から長期にわたって、留学前の水準に戻る傾向が多くの特性に見られた。（個人内の基準で回復が顕著でなかったとしても、個人間の基準では元の水準に戻った。）よって、異文化環境の下で、よく検討される適応状態だけでなく、個人のパーソナリティにおいてもU型曲線が見られる可能性が示唆されている。先行研究によって、留学1年間で個人の認知状態および精神状態における変化も報告されていることから（Zheng & Berry, 1991; 井上・伊藤, 1997; 早矢仕, 2002）、留学の1年目は最も適応困難が生じやすい時期であると同時に最も変動が起きやすい時期でもあるだろう。そのとき、知らない環境に置かれた際の緊張感、新しい経験による認知上の変化、および文化学習/脱落の際に生じる心理的葛藤などが留学生のパーソナリティにも変容を起こしたと推測される。しかし、異文化環境を慣れていくうちに、新しい刺激が減少し、大部分の人は異文化と自文化の統合もよくとれたことが想定される。従って、起きた心理的变化も徐々に減少し、元の心理的状态に戻ったと考えられる。これは個人の外的環境および内的環境に応じた変動と回復と言えよう。言い換えれば、外的/内的環境の中に、あるパーソナリティ特性を引き出す要因が存在すれば、特性に変化が見られるが、その誘導因がなくなると、変化も見られなくなるということだと考えられる。

カスピラ（2010）は子どもの知能IQにおける変化と元戻りを実証した。これによると、知能特性における変化は「状態」と見なされ、「状態とは短時間の何らかの影響力により特性付近に起る短時間の変化を意味する」と指摘されている。つまり、その変化は特性に基づく一時的な状態である。環境など外的要因に影響され、表れた特性は高くなったり、低くなったりするが、基本的には特性の真値の付近にあると考えられる。その見地は本論で

検証されたパーソナリティの変化にも適用できるだろう。異文化環境に置かれた初期段階で現れるパーソナリティの変化は短時間で特性付近に起きた状態的な変化であり、環境に慣れていくうちに個人の特性がまた本来の水準に戻ると理解できる。榎本・堀毛・安藤（2009）の中でも、パーソナリティの変化を、パーソナリティの表れの変化として取り上げられている。

ただし、報酬依存においては、個人内で増加するという傾向と、個人間で長期留学生の得点が非留学生よりやや高い傾向が見られた。それは前述したように、日本の社会文化特性に応じた変化であるかもしれない。ある文化に生存するためには、その文化に適する行動を取らなければならない（亀田・村田，2010）。あるいは、報酬依存の高まりは異文化経験による異文化接触者の共通的な変化であるという解釈もできる。特に、異文化経験による共感力の高まりが考えられる。それこそが留学効果による留学生のパーソナリティ特徴であるかもしれない。ただし、短期留学生の得点が非留学生よりも長期留学生よりも有意に低いという現象は、留学初期という特殊時期（環境変化や異文化に対する不理解によって葛藤が生じやすい時期）における特殊な心理状態であるか、研究 3 の対象者の異質による結果であるか、今後更なる検討が必要である。また、留学生が帰国後にはまた自国の文化に応じる行動に切り替えるか、この変化は消えるのかについても今後の課題になる。

また、本論の留学生が青年から成人に移行する発達成長期にあることと、留學生活の中に異文化体験のほか、自立経験も重要な一部であることを考慮すると、心理的変容は異文化接触によるものか、個体の発生的発達によるものか、明確に区別することは実に容易ではない。その両者が混在している可能性も考えられる（Sam, in pressを参考。その中で、移民背景を持つ子どもと青年の適応行動は文化変容によるものか、発達によるものかについて検討されている）。

第Ⅱ部 パーソナリティと異文化適応の関連

第 6 章 在日中国人留学生の異文化適応の実態

本章では、パーソナリティと異文化適応の関連を検討する前に、在日中国人留学生の異文化適応実態について検討することを目的とする。

近年、在日中国人留学生の適応問題については、様々な側面よりアプローチされているが、異文化適応の実態という素朴な問題を取り上げる研究は少ない。在日中国人留学生の適応実態に関する先行研究はほとんど1990年代という時代背景の下で行なった研究である。例えば、徐・蔭山（1994）や岡・深田（1995）、岡・深田・周（1996）による研究結果がいまでも参考されている。しかし、2000年以降の中国は迅速な経済発展につれて国民の生活水準がだいぶ改善されたため、来日した中国人留学生のバックグラウンド（e.g., 留学目的、経済状況、個人的な能力など）も90年代に来日した人と大きく違う。それによって、日本での生活スタイルも違うため、適応状況も改めて検討する必要があるだろう。従って、ここで本論の対象者、集団で来日した中国人交換留学生の異文化適応実態について検討していく。

6.1 留学1年目の異文化適応実態（研究4）

目 的

本研究は、来日1年目の中国人留学生の適応状態を調べることを目的とする。異文化適応といっても、適応の内容や領域によって、適応の状況が異なるため、一概に論じることができない。しかし、これまで多側面から在日中国人留学生の異文化適応について検討した研究はまだ少ない。異なる適応変数間の関連も未だに明らかにされていない。そこで、本研究は、Ward（1996）による適応の内容に対する分類に従って、異文化適応を社会文化的適応と心理的適応に分けて測定し、異なる側面から留学生の異文化適応の実態を把握しながら、社会文化的適応と心理的適応の関連を検討する。また、心理的適応においては、

自己効力感と状態不安という2つの指標を用いて、ポジティブな面とネガティブな面から同時に観測することにする。さらに、留学生の心理的適応の平均値と一般の中国人大学生の平均値を比較することで、在日中国人留学生の精神健康を個人間の水準で考察していく。

方 法

使用データ 調査Ⅱと調査Ⅲ（第3章を参照）

調査対象

日本での生活がある程度安定していることと、来日後約一年間で留学生の精神健康度が低下する傾向（井上・伊藤，1997）を考慮した上で、今回の分析対象者は、来日期间が半年以上1年未満の中国人留学生に限定した。合計、来日半年以上1年未満の中国人留学生291名（男子125名，女子166名）。年齢範囲20－28歳（ $M=21.64$ ， $SD=1.13$ ）。対象者は全員旧日本語能力試験2級以上であった。

質問紙の構成

デモグラフィック属性：年齢，性別，日本での滞在期間

社会文化的適応：学校，アルバイト，日常生活，日本社会の4つの領域について，18項目から成る在日中国人留学生向けの社会文化的適応尺度を作成した（例：「学校の宿題や課題をよくできる」）。「当てはまらない（1点）」から「当てはまる（4点）」の4件法で評定を求め，算出した合計得点が高いほど，社会文化的適応状況が良いことを示す。 α 係数は.82であった。

自己効力感：心理的適応のポジティブな指標として，Schwarzer による一般的自己効力感尺度（General Self-Efficacy Scale, GSES）の10項目の中国語版（王・劉，2000）を使用

した（例：「何かあっても、私はうまく対応することができる」）。「当てはまらない（1点）」から「当てはまる（4点）」の4件法で評定を求め、算出した合計得点が高いほど、一般性自己効力感が高いことを示す。 $\alpha = .89$ 。

状態不安：心理的適応のネガティブな指標として、Spielberger（1970）による状態・特性不安検査（State-Trait Anxiety Inventory）の状態不安の中国語版（20項目）を使用した（例：「この1週間の間に、緊張している」）。「ほとんど感じていない（1点）」から「よく感じている（4点）」の4件法で評定を求めた。20項目の得点を合計し、「不安」得点とした。得点が高いほど、不安が強く適応状態が悪いことを示す。 α 係数は.93であった。

結 果

1. 来日半年後の異文化適応状態

在日中国人留学生の適応状態を社会文化的適応および心理的適応から測るため、対象者の社会文化的適応、自己効力感、状態不安について調査した。その結果、Table 6.1.1に示したように、社会文化的適応の平均値＝46.64、標準偏差＝7.64；自己効力感の平均値＝29.30、標準偏差＝4.79；状態不安の平均値＝48.54、標準偏差＝10.88であった。

Table 6.1.1 各異文化適応変数の平均値および標準偏差

	社会文化的適応	自己効力感	状態不安
平均値	46.64	29.3	48.53
標準偏差	7.64	4.78	10.88

一般自己効力感（GSES）の標準化得点の計算法（10項目の合計得点を10で割る）によると、本研究対象者のGSES平均値は2.93になる（男子2.99，女子2.89）。一般中国人大学生のGSES平均値は男女それぞれ2.69，2.55である（王・劉，2000）。それと比較した結果、在日中国人留学生のGSES得点が男女ともに一般の中国大学生より有意に高い（ $t = 6.64$ ， $t =$

9.56, $p < .001$) ことが示された (Table 6.1.2)。留学生の男女の間には、有意差が認められなかった ($t = 9.56$, $n.s.$)。

Table 6.1.2 在日中国人留学生と中国人大学生の自己効力感の比較

	在日中国人留学生		中国人大学生		t	
	M	SD	M	SD		
男子	2.99	0.50	2.69	0.57	6.64	***
女子	2.90	0.46	2.55	0.53	9.56	***

注. $p < .001$

李・銭 (1995) によると、中国人大学生の状態不安の平均値は45.31、標準偏差は11.99であった。それと比較すると、在日中国人留学生の状態不安が一般の中国人大学生より有意に高い ($t = 5.06$, $p < .001$) ことが示された。つまり、留学生の精神状態が一般の中国大学生より悪化していることが示唆されている。

2. デモグラフィック属性と異文化適応の関連

対象者のデモグラフィック属性 (年齢、性別、および日本に滞在した期間) と適応の関連を検討するため、属性変数と適応変数との相関関係を分析した。

Table 6.1.3 に示したように、年齢と滞在期間が社会文化的適応との間に正の相関が見られた ($r = .21$, $p < .01$; $r = .38$, $p < .01$)。年齢が高く、滞在期間が長いほど、社会文化的適応がよいことが分かった。しかし、それらの属性変数と自己効力感および不安との間に有意な相関は見られなかった。即ち、それらの属性は心理的適応と関連がなかった。性別は3つの適応変数ともに相関が見られなかった。

Table 6.1.3 属性変数の平均値、標準偏差、および適応変数との相関

属性変数	平均値	標準偏差	自己効力感	社会文化的適応	状態不安	1	2
1. 年齢	21.64	1.14	.09	.21 **	-.05	-	
2. 性別	1.57	0.50	-.10	.06	.09	-.01	-
3. 滞在期間	7.94	2.39	.02	.38 **	-.08	.15 *	.12

* $p < .05$, ** $p < .01$

性別はダミー変数 1. 男子 2. 女子

年齢と滞在期間の間にも有意な相関があったため ($r = .15, p < .05$)、年齢を統制した上で滞在期間と社会文化的適応の偏相関を改めて求めた。その結果も、両者の間に有意な相関があることを示した ($r = .35, p < .01$)。

3. 各異文化適応変数の間の相関

年齢、性別、滞在期間を統制した上で、異文化適応の各変数の間の偏相関を求めた。Table 8.1.4 に示したように、3 つの適応指標の間に、強い相関が見られた。自己効力感と社会文化的適応は両方ともポジティブな状態を示すものであるため、両者の間に正の相関があった ($r = .40, p < .01$)。状態不安はネガティブな精神状態を示すものであるため、自己効力感および社会文化的適応との間に負の相関があった ($r = -.32, p < .01$; $r = -.38, p < .01$)。つまり、自己効力感の高い人は、社会文化的適応も高く、不安が低い傾向があることが示唆された。

Table 6.1.4 各異文化適応変数間の偏相関係数

変数	社会文化的適応	状態不安	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
自己効力感	.40 **	-.32 **	29.30	4.79	.89
社会文化的適応	--	-.38 **	46.64	7.64	.82
状態不安		--	48.54	10.88	.93

* $p < .05$, ** $p < .01$

年齢・性別・滞在期間を統制した

考 察

1. 中国人留学生の心理的適応実態

本研究の結果によって、来日 1 年目の中国人留学生の自己効力感と状態不安の得点の両方が一般の中国大学生より有意に高いことが示された。自己効力感 (Self-efficacy) という概念は、スタンフォード大学教授のバンデューラ博士によって提唱されたものである (Bandura, 1977)。これによると、自己効力感が高いことは、個人が一般の行動を目標程度まできちんと遂行できるかどうかという、自分の能力に対する確信が強い、つまり自信が高いことを示す。また、Schwarzer, Mueller, & Greenglass (1999) や王・劉 (2000) の研究では、男性の自己効力感が女性より有意に高いことが報告されているが、本研究の対象者にはこの男女差が見られなかった。留学生は男女同じ水準で、中国一般の大学生より自己効力感が高い。おそらく、自分に対して自信がないと、留学という大きなチャレンジを選択しないだろう。一方、状態不安が高いことは、やはり留学 1 年目の間にストレスが感じられ、非留学生より精神状態が悪いと推測される。よって、来日 1 年目の間に、中国人留学生の状態不安が非留学生より高く、精神的にストレスがかかっている可能性は高いが、自己効力感も高いため、直面しているまたはこれから直面する困難を乗り越える自信は持っていると考えられる。ただし、この滞在中のストレスは異文化接触によるものか、留学後の進路や就職などに起因するものかは明確に区別することはできなかった。今後は、この結果について、さらに厳密な比較調査が必要であろう。

2. 滞在期間と異文化適応の関連

留学先での滞在期間と社会文化的適応との間に中程度の正の相関が見られた。つまり、滞在期間が長いほど、社会文化的適応がより良いことが示唆されている。これは先行研究の結果と一致する。岩男・荻原 (1987, 1988) による留学生の対日イメージを中心とした

一連の研究結果では、滞在期間が長くなるにつれ、語学力が向上し、「生活に対する障害」が少なくなり、「日本に対する態度」が上昇する傾向があることが報告されている。

欧米の研究においても、滞在期間につれて異文化滞在者の社会的適応が良くなることが示されている (Masgoret et al., 2000; Ward & Kennedy, 1992; 1994)。

一方、本研究では、滞在期間と心理的適応との関連は見られなかった。心理的適応の過程について、Lysgaard(1955)によるU型曲線仮説が代表的であるが、その仮説を支持する実証研究が少ないことが指摘されている (Berry, 2006)。さらに、Berryは、固定した時間より、時間に伴う個人の具体的な異文化経験および異文化接触中に遭遇した問題と適応との関連を検討したほうがより異文化適応の本質に近づくのではないかと述べている。

よって、滞在期間と社会文化的適応との関連は社会学習理論および実証研究により検証されているが、心理的適応との関連については更なる実証研究が必要である。

3. 適応状態の各側面の間の関連

本研究では、異文化適応状態を多側面から把握するため、自己効力感、社会文化的適応および状態不安という3つの尺度で測定した。この3つの適応指標の間に強い相関が見られた。自己効力感の高い人は、社会文化的適応も高く、不安が低い傾向があることが示唆された。一方、自己効力感と状態不安は心理的適応状態を示すものであるため、それらと社会文化的適応との相関関係は先行研究 (Ouarasse & van de Vijver, 2005; Shupe, 2007) で示した心理的適応と社会文化的適応との関連を支持した。

6.2 留学1年間における異文化適応状態の変化（研究5）

目 的

研究4では、横断調査の結果によって、社会文化的適応は滞在期間が長くなるにつれ改善する傾向が示されたが、留学生の心理的適応は滞在期間との直線相関が認められなかった。そのことから、異文化適応の過程はダイナミックなものであり、直線以外の関係を検証するため、2時点以上の縦断的研究手法を使って留学生の適応状態を時間軸で検討する必要があると考えられる。

Lysgaard (1955) によるU型曲線仮説は、留学生の適応の過程やその位相に関する代表的な理論である。Lysgaardはノルウェーからフルブライト奨学金で米国に研究者として滞在した200名を対象に面接調査を行い、異文化適応は、滞在初期の楽観的で意気揚々とした段階から、異文化適応の困難に直面し適応レベルの落ち込みを経験する段階、徐々にそれが回復し高い適応レベルに進む段階を経る「U字型」を描くと指摘した。このU型曲線仮説が在日中国人留学生にも認められれば、この曲線に沿って適切なサポートを提供することができると考えられる。

しかしながら、その後の研究ではU型曲線仮説を支持している実証研究が少なく（Berry, 2006）、適応の内容や領域によって異文化適応の過程が一樣でないことが報告されている（佐々木・水野, 2000）。Church（1982）は異文化適応研究についてのレビューの中で、U型曲線仮説は不確定で過度の一般化に基づくものであると指摘している。また、Furnham & Bochner（1986）は、従属変数の異文化適応が一樣ではないこと、何をU型にするかといったU型曲線自体の定義が曖昧なこと、横断的な調査が多く縦断的なデータに基づいて調査している研究が少ないこと、理論化のためには適応過程の記述が不十分であることを指摘している。在日外国人研修生を対象とした縦断研究（佐々木・水野, 2000）では、時間の経過が適応に影響を及ぼすことが分かったが、適応の領域によって適応過程がそれぞれ異

なり、その形状は必ずしもU型曲線とは限らないことが指摘されている。学習領域における適応過程はU型曲線を示したが、日本文化領域は時間経過とともに右上がりに上昇し、住居・経済領域は時間経過とともに右下がり減少した。井上・伊藤（1997）では、日本語予備教育課程の国費留学生53名を対象として、精神的健康状態を来日当初、半年後、1年後の3回の調査で調べた結果、精神的健康度を示すSCL-90Rの総合重症度（GSI）が1年後に有意に高まったことが分かった。これは、1年後の精神的健康度が低い傾向を示している。

以上のことから、留学生の異文化適応実態を明らかにするため、縦断的な研究法で、適応の多様な側面を調べる必要があると考えられる。ここでは、在日中国人留学生の社会文化的適応と心理的適応について、3時点の縦断調査で検討していく。

方 法

使用データ 調査Ⅱ（第3章を参照）

調査対象者

来日直後の中国人留学生を対象に3回の追跡調査（T1=留学1ヶ月後、T2=留学半年後、T3=留学1年後）を実施した。有効回答数は36名（男子13名、女子23名）であった。年齢19–24歳（ $M = 21.17$, $SD = 1.10$ ）。

質問紙の構成

社会文化的適応、自己効力感、状態不安

尺度の詳細な内容は研究4を参照

結 果

3時点において、各異文化適応変数の記述統計結果はTable 6.2.1に示した通りである。

Table 6.2.1 各異文化適応変数の3時点における記述統計

	時点	平均値		標準偏差
社会文化的適応	T1	45.67	a	7.30
	T2	49.17		7.39
	T3	50.03	b	6.56
自己効力感	T1	31.17	a	5.20
	T2	30.33		4.95
	T3	28.03	b	4.35
状態不安	T1	45.72		11.36
	T2	48.78		8.91
	T3	48.47		9.94

T1=留学1ヶ月後, T2=留学半年後, T3=留学1年後

Turkey法 a,b間に $p < .05$ で有意差あり

各適応変数の3時点における変化を調べるため、一要因の分散分析を行なった。その結果、状態不安[$F(107) = 0.99, n.s.$]には有意差が認められなかった。自己効力感[$F(107) = 4.05, p < .05$]と社会文化的適応[$F(107) = 3.82, p < .05$]においては、3時点の間に有意差が認められた。そこで、Tukey法による多重比較を行なったところ、社会文化的適応ではT3の得点がT1より有意に高く、自己効力感においては、T3の得点がT1の得点より有意に低い結果が得られた (Table 8.2.1)。

また、対応のあるサンプルのt検定で3時点の間の変化についてそれぞれ分析した。その結果、社会文化的適応において、T1とT2およびT1とT3の間に、それぞれ有意な得点の上昇が認められたが[$t(35) = -4.81, p < .01$; $t(35) = -2.42, p < .05$]、T2とT3の間には有意な変化が見られなかった[$t(35) = -0.47, n.s.$]。自己効力感では、T2とT3およびT1とT3の間に有意な得点の低下が認められたが[$t(35) = 2.02, p < .05$; $t(35) = 2.77, p < .01$]、T1とT2の間には有意な変化がなかった[$t(35) = 1.70, n.s.$]。状態不安においては、T1とT2の間に有意な得点の上昇が見られたが[$t(35) = -2.02, p < .01$]、T2とT3およびT1とT3の間には有意な変化が

見られなかった [$t(35)=0.15$; $t(35)=-1.07$, *n.s.*] (Table 6.2.2 ; Figure 6.2.1)。つまり、来日半年後から、社会文化的適応が有意に向上しているが、不安は有意に高まっていることが示された。一年後は、自己効力感も有意に低下したことが分かった。ただし、留学1年後の不安の得点は半年後よりやや低下し、留学直後の水準との間にも有意差が見られなくなっている。

Table 6.2.2 3時点における各異文化適応得点の比較

		平均値	t 値	
社会文化的適応	T1-T2	-3.50	-4.81	**
	T2-T3	-0.86	-0.47	
	T1-T3	-4.36	-2.42	*
自己効力感	T1-T2	0.83	1.70	
	T2-T3	2.31	2.02	*
	T1-T3	3.14	2.77	**
状態不安	T1-T2	-3.06	-2.02	**
	T2-T3	0.31	0.15	
	T1-T3	-2.75	-1.07	

* $p<.05$, ** $p<.01$

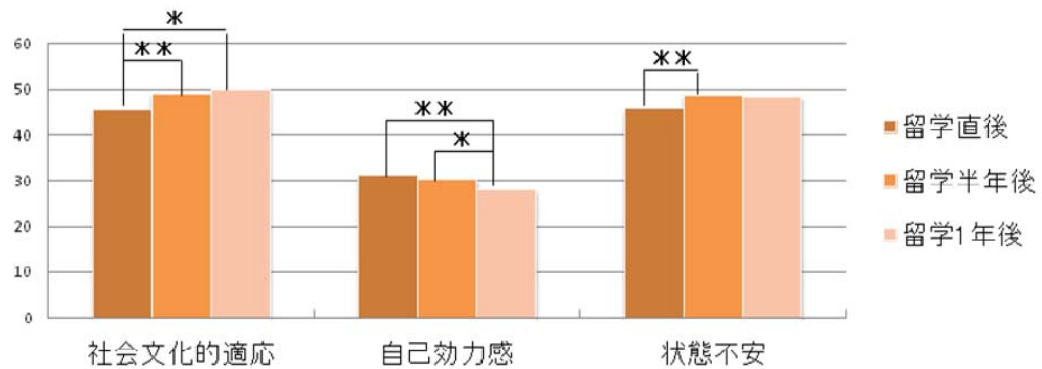


Figure 6.2.1 異文化適応状態の3時点比較 (T1= 留学直後, T2= 留学半年後, T3= 留学1年後)

考 察

来日1年目の適応状態を比較した結果、社会文化的適応と心理的適応ともに有意な変化が示された。社会文化的適応は滞在期間につれて向上する傾向が見られ、留学先での生活に慣れつつ、社会的スキルも上達していることが示された。先行研究の結果と一致している。

自己効力感は1年後に有意に低くなったことから、在日中国人留学生の自信が1年間で低下していることが示唆された。しかし、他の研究では不一致な結果が出ている。青木・松原（2010）では、日本から帰国した中国人留学生は留学前より自信が出て、前向き志向になったという結果が報告されている。欧米での日本人留学生を対象とした研究でも、留学中の自己効力感が留学前より向上したことが示されている（早矢仕，2002）。よって、測定時期や留学生の元文化、留学先の文化によって、自己効力感の変化傾向が異なることが考えられる。今後は一致した条件で比較することが望ましいだろう。一方、留学1年以降、在日中国人留学生の自己効力感がまた向上し、留学前または留学直後の水準まで回復する可能性も考えられるため、より長期な観測が必要である。

状態不安は半年後に有意に低下したことから、在日中国人留学生の精神状態が悪化していることが示唆された。Zheng & Berry (1991)はカナダに滞在する中国人留学生の心理健康について縦断調査を行なった結果、滞在3ヶ月後の精神状態が出国前より悪化した。井上・伊藤（1997）では、留学生の精神状態を3時点で（T1＝来日1ヶ月後、T2＝来日半年後、T3＝来日1年後）測定した結果、T1とT3の間に有意差が見られ、約1年間で精神健康度がやや低くなっていくことが示された。よって、本研究の人数が少なかったが、精神状態の変化は先行研究と同様の傾向が見られた。つまり、渡航後1年目の間に精神状態において一定の悪化時期が現れる。しかし、その変化の時期については、研究の対象者および研究手法によってそれぞれ違って、一致していないことが分かった。一方、留学1年後の不安得点がまた半年後よりやや低下し、留学直後の水準との間に有意差がなくなったことから、留学1年後は在日中国人留学生の精神状態が少し回復していることが示唆されている。前述したZheng & Berry (1991)の研究でも、2－5年間の長期滞在者の精神状態は出国前と同じ水準にあることが報告されている。よって、留学生の精神状態における回復の可能性が考えられる。ただし、本研究の結果では、1年後の不安得点と半年後の不安得点との間にも有意差が認められなかったため、顕著な回復とは言えない。したがって、Lysgaard (1955)によるU型曲線仮説の一部が支持されたしか言えない。今後、より長い期間での追跡調査が必要である。また、半年後と1年後の間に有意差が見られなかったことについて、精神状態が最も悪化している時期を見過ごした可能性も考えられる。カナダにいる中国人留学生は滞在3ヶ月後に精神状態が出国前より低下したことが報告されている（Zheng & Berry, 1991）ため、今後在日中国人留学生の適応状態についてもより早めに観測することが必要であるだろう。

以上によって、心理的適応は滞在期間との間に単純な直線相関ではないことが示唆されている。研究4の横断調査結果と一致した。また、心理的適応の変化傾向について、本研究

では、U型曲線仮説を完全に支持する結果が得られなかったが、その可能性は考えられる。

したがって、今後、心理的適応について、早期から多時点の長期観測が望ましいだろう。

第6章の総合考察

1. 留学1年間の心理的適応状態

本章では、在日中国人留学生の異文化適応実態について、横断調査と縦断調査を通じて検討した。研究4の横断調査結果によると、来日半年後に中国人留学生の自己効力感と状態不安の平均値がともに一般の中国人大学生の平均値より高いことが示唆されている。状態不安が高いことは、留学1年目はやはり留学生にとって最も大変な時期であるため（井上・伊藤，1997），異文化適応中にストレスが感じられ、非留学生より精神状態が悪いと推測される。また、自己効力感も高いことは留学生が非留学生より自分の能力に確信しており、直面しているまたはこれから直面する困難を乗り越える自信は持っていると考えられ、その後の回復が期待できるだろう。しかし、研究5の縦断調査結果によって、留学1年後の時点では、精神状態における有意な回復は見られなかった。不安状態が半年後から有意に高くなり、自己効力感も1年後に有意に低下している（非留学生の平均値よりはまだ高い値である）ことから、在日中国人留学生の心理的適応が一年間で低下している傾向が示唆されている。今後は顕著に回復するのか、またはいつ回復するのか、Lysgaard (1955) のU型曲線仮説を検証するため、より早期から長期間の追跡調査が必要である一方、個人の具体的な経験から心理的適応への影響を検討することも必要である。Berry (2006) は固定した時間より、時間に伴う個人の具体的な異文化経験および異文化接触中に遭遇した問題と適応との関連を検討したほうがより異文化適応の本質に近づくのではないかと述べている。

2. 滞在期間から社会文化的適応への影響

横断研究（研究4）と縦断研究（研究5）の結果によって、滞在期間から社会文化的適応への影響が検証された。つまり、滞在期間が長いほど、社会文化的適応が向上することが示された。これは多くの先行研究の結果と一致している（佐々木・水野，2000）。また、留学1年後の得点は半年後の得点より高かったが、統計上では有意ではなかったことも、渡航

4 ヶ月から半年の間に、社会的適応の上昇度は顕著であるが、1年後はあまり変わらない (Ward & Kennedy, 1996; Ward, Okura, Kennedy & Kojima, 1998) という変化の傾向と一致している。つまり、留学初期が社会文化的適応の急上昇期であることが示唆されている。これらの研究結果はスキル学習モデルを支持している。しかし、今後はより多くの対象者を集めて、1年間以上の追跡調査を通じて、社会文化的適応と滞在期間の関連をより長期的に観測することが必要であろう。

3. 各異文化適応変数間の関連

本章では、異文化適応状態を多側面から把握するため、自己効力感、社会文化的適応および状態不安という3つの尺度で測定した。この3つの適応指標の間に強い相関が見られた。社会文化的適応が高い人は、自己効力感も高く、不安が低い傾向が示唆された。これは、先行研究 (Ouarasse & van de Vijver, 2005; Shupe, 2007) でも指摘された社会文化的適応と心理的適応との関連を支持している。さらに、心理的適応の中に、個人の認知要因と感情要因との間の関連も検証した。しかし、それらの適応要因が関連しながらも、滞在期間が長くなるにつれての変動パターンは違うことが示唆されている。

次章では、さらにこれらの異文化適応変数間のメカニズムおよび予測要因について検討していく。

第7章 パーソナリティの異文化適応への影響

本章では、TCI 気質・性格特性の 7 因子がそれぞれ異文化適応にどのような影響を及ぼすかについて検討する。さらに、3 時点の縦断研究を加えて、パーソナリティと異文化適応の因果関係を探る。また、序論でも述べたように、Hobfoll (1989) のリソース維持理論を異文化適応研究に導入し、序論の中に立てたパーソナリティとリソース、適応の関連に関する仮説モデル (Figure 2.3) を検証しながら、パーソナリティと異文化適応のメカニズムを明らかにする。

7.1 パーソナリティと異文化適応の相関関係 (研究 6)

目 的

本研究は、横断研究により、同時点で測定されたパーソナリティと異文化適応の間の関連を検討することを目的とする。TCIの7次元がそれぞれ異文化適応の中に、防御要因として適応を促進するか、リスク要因として適応を妨害するかについて考察を行う。

方 法

使用データ 調査Ⅱと調査Ⅲデータ (第3章を参照)

調査対象者

本研究の分析対象者は第6章の研究4と同じである。来日半年以上1年間未満の中国人留学生291名 (男子125名, 女子166名)。年齢範囲20–28歳 ($M=21.64$, $SD=1.13$)。全員日本語能力試験2級以上であった。

質問紙の構成

パーソナリティ: TCI中国語版の短縮版 (55 項目)

異文化適応：社会文化的適応，自己効力感，状態不安（尺度内容は研究 4 を参照）

結 果

パーソナリティと適応との関連を検討するため，各変数間の相関関係を分析した。

Table 7.1 は対象者の年齢，性別，日本での滞在期間を統制した上で，各変数間の偏相関係数を示している。その結果，損害回避および固執，自己志向が自己効力感との間に強い相関を示した（ $r = -.32, p < .01$; $r = .42, p < .01$; $r = .19, p < .01$ ）。損害回避，固執，協調性は社会文化的適応との間に中程度の相関が見られた（ $r = -.32, p < .01$; $r = .31, p < .01$; $r = .18, p < .01$ ）。不安との間に相関があったのは損害回避（ $r = .17, p < .01$ ）と，自己志向（ $r = -.17, p < .01$ ），自己超越（ $r = .22, p < .01$ ）である。つまり，損害回避の高い人が自己効力感および社会的適応が低く，不安が高い傾向がある；固執の高い人は自己効力感も社会文化的適応も高い；自己志向の高い人は自己効力感が高く，不安が低い；協調性の高い人は社会文化的適応が高いことが示されている。

Table 7.1 TCIと異文化適応変数間の偏相関係数

変数	自己効力感	社会文化的適	状態不安	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
新奇性追求	-.07	-.13	.11	27.38	4.20	.66
損害回避	-.32 **	-.32 **	.17 **	20.49	3.73	.72
報酬依存	-.02	.05	-.01	21.80	3.19	.56
固執	.42 **	.31 **	-.10	7.91	1.85	.63
自己志向	.19 **	.13 *	-.17 **	22.46	4.51	.75
自己超越	.06	.11	.22 **	12.87	4.08	.81
協調性	-.06	.18 **	.06	26.97	4.95	.75
自己効力感	--	.40 **	-.32 **	29.30	4.79	.89
社会文化的適応		--	-.38 **	46.64	7.64	.82
状態不安			--	48.54	10.88	.93

* $p < .05$, ** $p < .01$

年齢・性別・滞在期間を統制した

考 察

本研究では、新奇性追求は3つの適応指標とも相関が見られなかった。新奇性追求の高い人は外向的で、常に新しい刺激を求めることは異文化探索や異文化接触を促進する一方、リスクを好む部分は適応にリスクを招く可能性も潜んでいるため、相殺効果で新奇性追求と適応の間に相関が見られなかったのではないかと考えられる。有意な相関はなかったが、方向性からみると、新奇性追求は適応指標（自己効力感と社会文化的適応）との間に負の相関、不適応指標（状態不安）とは正の相関があったことから、新奇性追求は適応を妨害する傾向がある可能性も考えられる。TCI理論において、新奇性追求の特徴は、新しい物事やスリルを求め、意思決定が早い、攻撃的行動、短気、規則や法への意識が薄いなどの活動的行動性の強度を表すものである。中国社会よりも規則や秩序を重視する日本社会では、無秩序や衝動、浪費などの行為は日本の社会文化に沿わないと思われる。そのため、このような特徴を持つ人は、日本の学校や職場、社会生活において、仕事や人間関係がうまく行かず、ストレスや悩みが生じる可能性が高くなるだろう。また、スリルを求めること自体が、そうでない人よりも危険な出来事を招くリスクが高いため、窮境に陥る可能性も高くなると考えられる。しかし、新奇性追求の概念に近い「外向性」には滞在国の文化によって、適応変数との相関の方向性が違ったり、または無関連になったりといった滞在文化に依存する結果が示されている（cf. Ward, 2001）ため、新奇性追求にも同じ問題が存在する可能性がある。つまり、滞在者と異文化との適合性によって、新奇性追求の影響が異なることが考えられる。

損害回避は適応指標と負の相関、不適応指標と正の相関を持つことから、異文化適応を妨害するリスク要因であることが示唆された。つまり、損害回避が高いほど、社会文化的適応と心理的適応の両方を低下させる可能性が考えられる。損害回避の高い個人は、心配症、緊張のしやすさ、内向的、ストレス・疲労を感じやすく、リスクを避ける行動傾向が見られる。そのため、未知なことや不確定なことが多い新しい環境において、積極的にチ

チャレンジすることが難しく、リスクやストレスを感じやすいと考えられ、社会生活の上でも心理的な面でも不適應になりやすいだろう。損害回避の概念と近い「神経症傾向」による異文化適應へのネガティブな影響が多く、多くの文化において検証されている (e.g., Cheung & Leung, 1998; Furukawa & Shibayama, 1993)。よって、不安傾向は異文化適應のリスク要因となることは文化共通の結果であるかもしれない。

報酬依存は3つの（不）適應指標との間に有意な相関が見られず、適應指標および不適應指標との間に関連方向性も一致していないため、適應との関連性が見られなかった。

固執は自己効力感および社会文化的適應との間に、強い相関が見られた。固執の高い人は忍耐力が強く、最後までやり遂げる持続性が高い。そのため、留学生生活を適應していくうちに困難があっても、頑張って乗り越える根性が強く、結果としては自己効力感（自分の能力に対する認知）が高く、社会文化的適應（主に留学生活における日常問題を処理する能力に関わる外的適應）もよい。しかし、固執と不安との間には有意な相関が見られなかった。固執の高い個人は、完全主義傾向もあることから (Cloninger, 1994)、良い精神状態になるとは言い切れない。

自己志向は3つの（不）適應指標とも有意な相関が見られた。適應指標とは正の相関、不適應指標とは負の相関を持つことから、自己志向は異文化適應にとって防衛要因であることが示唆される。一般人を扱った先行研究でも、自己志向は適應との間に正の相関を持つことが検証されている (松浦・菅原・酒井・眞榮・田中ら, 2008 ; 田中, 2010)。自己志向性とは、個人が選択した目的や価値観に従って、状況に合う行動を自ら統制したり、調節する能力のことである。自己志向性は、自らにとっての価値のある目的に向かい、葛藤状況においてもその状況の中で自らをコントロールする力が、精神的健康を損ねないための調節効果となる (松浦ら, 2008)。この自分をコントロールする能力は、異文化においても適應への不可欠な能力であろう。

自己超越は不安のみと正の相関を持つことから、自己超越は精神健康に影響を及ぼすことが示唆された。つまり、自己超越が高いほど、不安状態になる可能性が高い。自己超越とは、全体的に見て、周囲の一部として自らを見ているかを表す。Cloninger (1994) のTCI理論によると、自己超越の高い人は、精神的なものとの繋がりを感じる直観力が強く、人生全般に対し満足して何事も受容できる、周囲・自然との一体感を感じるといった特徴がある。要するに、自己超越という概念はスピリチュアリティに関係する性格特性である。従って、TCIの7次元の中で、精神状態との相関関係が最も強いことが理解できる。しかし、なぜ人生全般に対する満足度と受容度を表す自己超越が不安との間に正の相関を持つかということについては、自己超越の高い人は感受性が高く、精神上の統一感をより求めるため、困難の多い留学生活中にストレスを感じやすいのではないかと考えられるが、このことについては、今後の研究を通してさらに検証する必要がある。

協調性は自己超越と反対に、社会文化的適応のみと正の相関が見られた。つまり、協調性の高い人が日本社会において社会文化的適応がよいということが示された。Cloninger (1994) により、協調性のある個人は社会的に寛容で、共感的、協力的である。これは「和」を重視する日本社会の価値観と一致することから、このような特性を持つ人がより日本社会に馴染みやすいのではないかとと思われる。オーストラリアに滞在しているシンガポールの留学生を対象とした研究 (Ward, Leong & Low, 2004) でも、Big Fiveの「調和性」と社会的適応との関連が示されている。よって、他者への思いやりと協力性が高いことは、どの文化においても有効なコミュニケーションと社会関係を促進するため、社会文化的適応の促進要因になると考えられる。一方、Ward, Leong & Low (2004) の研究結果によって、調和性は心理的適応（抑うつ）にも（負の）影響を及ぼすが、本研究では、協調性と心理的適応（自己効力感および不安）との間に関連性が見られなかった。それは心理的適応指標の違いによる結果の不一致であるか、滞在者および滞在先の文化の違いによる不一致であるか、今後さらなる検討が必要である。

概してみると、在日中国人留学生の場合、損害回避は異文化適応全般のリスク要因になり、固執と自己志向は適応全般の促進要因、自己超越は精神健康のリスク要因、協調性は社会文化的適応の促進要因となる傾向が示唆された。新奇性追求と報酬依存については適応との間に直接の関連が見られなかった。今回得られた結果は比較的大きなサンプルで確認することができたものの、横断的な関連性であり、パーソナリティ特性と適応変数との影響関係を推定することはできない。そこで、次の研究7では、留学前から留学後1年目までの3時点の縦断的調査によって両者の影響過程についての考察を試みることにする。

7.2 パーソナリティと異文化適応の因果関係（研究7）

目 的

本研究は、縦断的調査を通じて、パーソナリティによる異文化適応への影響を因果順序でさらに検討することを目的とする。その中、3時点（T1＝留学直前、T2＝留学半年後、T3＝留学1年後）で測定されたデータを分析し、前時点（T1とT2）のパーソナリティがそれぞれ後時点（T2とT3）の適応に対して先行要因となるかその因果順序を検証することと、2時点（T2＝留学半年後、T3＝留学1年後）で測定されたデータを用いて、パーソナリティと異文化適応の交差遅延効果を検討する。

方 法

使用データ 調査Ⅱのデータ（第3章を参照）

調査対象者

日本への留学予定のある中国人留学生予備群を対象に3回の追跡調査（T0＝留学直前、T2＝留学半年後、T3＝留学1年後）を実施した。3回の調査にすべて参加した人は72名（男子19名、女子53名）であった。年齢範囲19–26歳（ $M = 21.18$, $SD = 1.29$ ）。

質問紙の構成

Time0（留学1ヶ月前）：TCI中国語版（125項目）

Time2（留学半年後）：TCI中国語版の短縮版（55項目）、社会文化的適応、
自己効力感、状態不安

Time3（留学1年後）：TCI中国語版の短縮版（55項目）、社会文化的適応、

自己効力感, 状態不安

尺度の詳しい内容は研究 1 と研究 4 を参照

結 果

1. パーソナリティと異文化適応変数との相関

3 時点におけるTCIの 7 次元と異文化適応変数間の相関係数を求めて検討した。

Table 7.2.1 は 3 時点におけるTCIの 7 次元間の相関係数を示している。

Table 7.2.2 は 3 時点におけるTCIの 7 次元と異文化適応の相関係数を示している。Table 7.2.2 に示したように, T0 で測定されたパーソナリティがT2 およびT3 の適応変数との間に有意な相関を持つ。T2 のパーソナリティもT3 の適応変数と有意な相関があった。また, T2 とT3 における異文化適応変数の間にもそれぞれ有意な相関が認められた。

Table 7.2.1 3時点におけるTCI7次元の間の相関係数

		Time2							Time3						
		NS2	HA2	RD2	P2	SD2	ST2	C2	NS3	HA3	RD3	P3	SD3	ST3	C3
Time0	NS0	.51 **	.15	-.14	-.09	-.20	.13	-.25 *	.43 **	.10	.01	-.01	-.18	.06	-.16
	HA0	-.01	.68 **	-.11	-.23 *	-.49 **	.02	-.28 *	-.07	.63 **	-.17	-.29 *	-.55 **	-.04	-.42 **
	RD0	-.18	-.01	.53 **	-.10	-.28 *	.18	.01	-.25	-.11	.50 **	.00	-.16	.11	.13
	P0	-.24 *	-.28 *	.14	.39 **	.09	-.08	.02	-.26	-.27 *	.12	.51 **	.23 *	-.09	.19
	SD0	-.02	-.57 **	.16	.16	.49 **	-.17	.33 **	-.12	-.53 **	.23	.32 *	.62 **	-.19	.59 **
	ST0	.23	.04	-.17	.05	-.16	.51 **	-.30 **	.28 *	.06	-.10	-.09	-.15	.50 **	-.32 *
	C0	.14	-.34 **	.24 *	.04	.33 **	-.13	.54 **	.19	-.34 **	.38 **	.05	.43 **	-.04	.69 **
Time2	NS2	1.00	.13	.09	-.20	-.23	.22	-.09	.91 **	.04	.08	-.11	-.07	.16	-.05
	HA2	.13	1.00	-.04	-.46 **	-.53 **	-.10	-.33 **	.10	.86 **	-.18	-.47 **	-.54 **	-.09	-.50 **
	RD2	.09	-.04	1.00	-.24 *	-.12	.02	.39 **	.06	-.10	.84 **	-.13	.05	-.10	.51 **
	P2	-.20	-.46 **	-.24 *	1.00	.24 *	.10	.07	-.07	-.39 **	-.38 **	.72 **	.18	.11	-.03
	SD2	-.23	-.53 **	-.12	.24 *	1	-.29 *	.39 **	-.24	-.44 **	-.08	.13	.73 **	-.19	.32 *
	ST2	.22	-.10	.02	.10		1	-.11	.31 *	-.10	.06	-.04	-.25 *	.85 **	-.19
	C2	-.09	-.33 **	.39 **	.07			1	-.05	-.30 **	.44 **	.07	.35 **	-.08	.79 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

NS : 新奇性追求 HA : 損害回避 RD : 報酬依存 P : 固執 SD:自己志向 ST : 自己超越 C : 協調

Time0 : 留学直前 Time2 : 留学半年後 Time3 : 留学1年後

Table 7.2.2 3時点におけるTCI7次元と異文化適応の相関係数

		Time2						Time3					
		異文化適応2						異文化適応3					
		自己効 力感2	社会文化 的適応2	不安2				自己効 力感3	社会文化 的適応3	不安3			
Time0	ハートナリテ10												
	新奇性追求0	-.46 **	-.43 **	.36 **				-.51 **	-.49 **	.50 **			
	損害回避0	-.33 **	-.39 **	.30 **				-.18	-.34	.23 *			
	報酬依存0	.11	.06	.07				.02	.06	.10			
	固執0	.25 *	.15	-.22				.20	.23 *	-.22			
	自己志向0	.39 **	.50 **	-.26 *				.53 **	.56 **	-.42 **			
	自己超越0	-.25 *	-.15	.00				-.25 *	-.18	.03			
Time2	ハートナリテ12												
	新奇性追求2	.07	-.27 *	.20				-.02	-.09	.09			
	損害回避2	-.56 **	-.60 **	.41 **				-.64 **	-.63 **	.53 **			
	報酬依存2	.21	.28 *	-.08				.14	.39 **	-.12			
	固執2	.30 *	.08	-.14				.32 **	.14	-.25 *			
	自己志向2	.33 **	.34 **	-.39 **				.45 **	.30 **	-.51 **			
	自己超越2	.04	-.02	.34 **				-.02	.10	.16			
Time3	適応2												
	自己効力感2		.47 **	-.38 **				.84 **	.57 **	-.46 **			
	社会文化的適応2			-.62 **				.52 **	.84 **	-.58 **			
	不安2							-.35 **	-.47 **	.73 **			
	適応3												
	自己効力感3								.65 **	-.45 **			
	社会文化的適応3									-.59 **			
	不安3												

* $p < .05$, ** $p < .01$

2. 異文化適応を従属変数とした重回帰分析結果

TCI 7次元から各異文化適応変数への予測性を検討するため、T2 およびT3 の各適応変数を従属変数とする重回帰分析をそれぞれ行なった。T0 およびT2 のTCI 7次元得点は説明変数として強制投入法で投入した (Table 7.2.3–Table 7.2.5)。

Table 7.2.3 T2の異文化適応を従属変数とした重回帰分析の結果

		Time2		
		自己効力感2	社会文化的適応2	不安2
		β	β	β
Time0	新奇性追求0	-.20 <i>n.s.</i>	-.32 **	.30 *
	損害回避0	-.41 **	-.27 *	.22 <i>n.s.</i>
	報酬依存0	.09 <i>n.s.</i>	.07 <i>n.s.</i>	.15 <i>n.s.</i>
	固執0	.01 <i>n.s.</i>	-.12 <i>n.s.</i>	-.09 <i>n.s.</i>
	自己志向0	.09 <i>n.s.</i>	.35 **	.01 <i>n.s.</i>
	自己超越0	-.20 <i>n.s.</i>	-.01 <i>n.s.</i>	-.12 <i>n.s.</i>
	協調性0	-.01 <i>n.s.</i>	-.06 <i>n.s.</i>	-.15 <i>n.s.</i>
		$R^2 = .35$	$R^2 = .38$	$R^2 = .50$

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7.2.3 に示したように、T0 の新奇性追求、損害回避および自己志向がT2 の適応状態を予測していた。

Table 7.2.4 T3の異文化適応を従属変数とした重回帰分析の結果a

		Time3		
		自己効力感3	社会文化的適応3	不安3
		β	β	β
Time2	新奇性追求2	.11 <i>n.s.</i>	-.06 <i>n.s.</i>	-.05 <i>n.s.</i>
	損害回避2	-.50 **	-.60 **	.33 *
	報酬依存2	.17 <i>n.s.</i>	.31 **	-.09 <i>n.s.</i>
	固執2	.11 <i>n.s.</i>	-.09 <i>n.s.</i>	-.07 <i>n.s.</i>
	自己志向2	.20 <i>n.s.</i>	.01 <i>n.s.</i>	-.25 <i>n.s.</i>
	自己超越2	-.05 <i>n.s.</i>	.06 <i>n.s.</i>	.12 <i>n.s.</i>
	協調性2	-.02 <i>n.s.</i>	.09 <i>n.s.</i>	-.16 <i>n.s.</i>
		$R^2 = .46$	$R^2 = .54$	$R^2 = .40$

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7.2.4 に示したように、T2 の損害回避および報酬依存がT3 の適応状態を予測していた。

Table 7.2.5 T3の異文化適応を従属変数とした重回帰分析の結果b

		Time3					
		自己効力感3		社会文化的適応3		不安3	
		β		β		β	
Time0	新奇性追求0	-.01	<i>n.s.</i>	-.22	*	.19	<i>n.s.</i>
	損害回避0	-.41	**	-.31	*	.29	*
	報酬依存0	.05	<i>n.s.</i>	.07	<i>n.s.</i>	.15	<i>n.s.</i>
	固執0	-.02	<i>n.s.</i>	-.03	<i>n.s.</i>	-.06	<i>n.s.</i>
	自己志向0	.32	*	.39	**	-.12	<i>n.s.</i>
	自己超越0	-.23	*	-.06	<i>n.s.</i>	-.08	<i>n.s.</i>
	協調性0	-.11	<i>n.s.</i>	-.10	<i>n.s.</i>	-.18	<i>n.s.</i>
		$R^2 = .40$		$R^2 = .43$		$R^2 = .34$	

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7.2.5 に示したように、T0 の新奇性追求、損害回避、自己志向および自己超越がT3 の適応状態を予測していた。

3. パーソナリティと異文化適応の因果関係について

以上の相関関係および重回帰分析の結果と、研究 6 の横断調査で得られたパーソナリティと各適応変数間の相関を参考にし上で、T0 とT2 の新奇性追求、損害回避、自己志向からそれぞれT2 とT3 の適応変数（自己効力感、社会文化的適応、不安）への影響についてさらにパス解析で、パーソナリティが適応に対して先行要因となるのか因果順序を検討した。ここで、有意なパス関係だけを示す(Figure 7.2.1–Figure 7.2.5)。

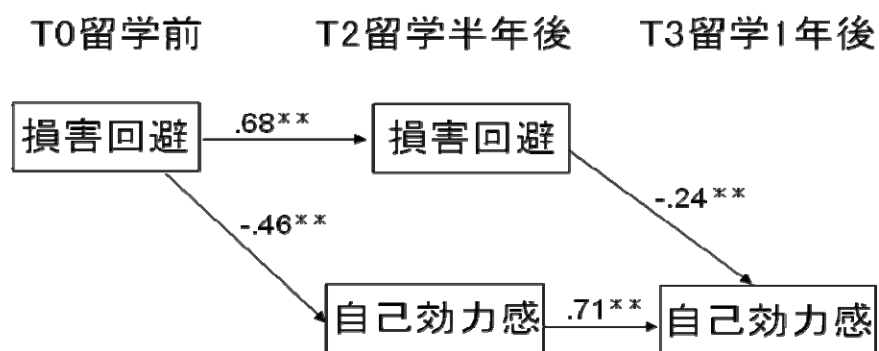
** $p < .01$, $\chi^2(df=1) = .11$, $p = .74$, GFI = .99, RMSEA = .00, AIC = 18.11

Figure 7.2.1 損害回避と自己効力感の因果モデル

損害回避と自己効力感の因果モデルの適合度はいずれも良い値であった。損害回避から自己効力感への影響が認められた。損害回避が高いほど、自己効力感が低くなることが示唆された。

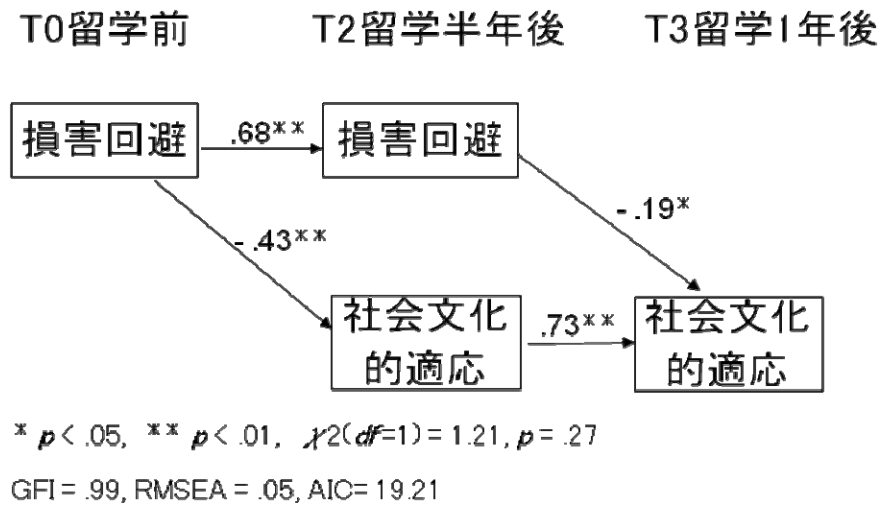


Figure 7.2.2 損害回避と社会文化的適応の因果モデル

損害回避と社会文化的適応の因果モデルの適合度も良かった。損害回避の得点がある後の社会文化的適応を予測していることが示された。

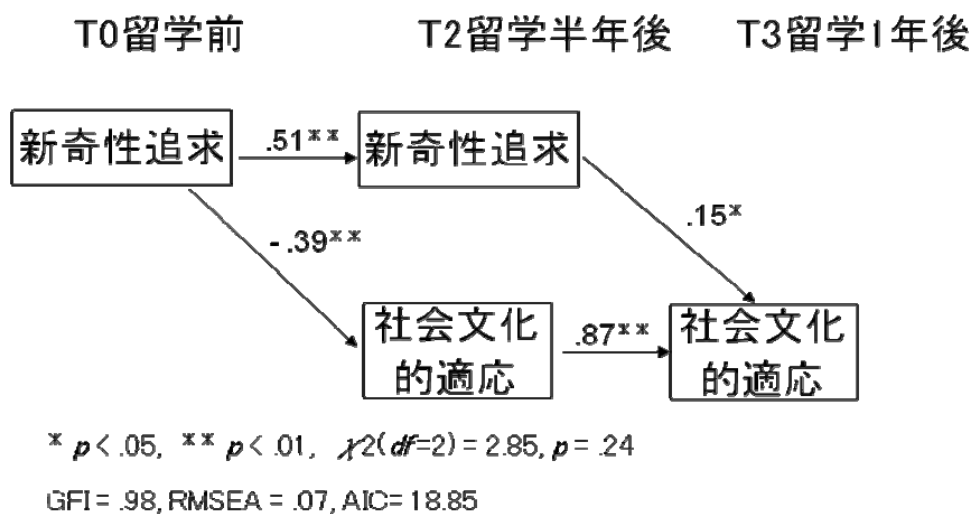


Figure 7.2.3 新奇性追求と社会文化的適応の因果モデル

T0 の新奇性追求からT2 の社会文化的適応へのパスは負のパスであるが、T2 の新奇性追求からT3 の社会文化的適応へのパスは正のパスであった。モデルの適合指標の一つ、RMSEA=.07 と、許容範囲内であるが、0.05 よりも小さい値が望ましいため、想定したモデルがデータの標本共分散行列をうまく説明しているとは判断できなかった。重回帰分析の結果 (Table 7.2.4) によっても、T2 の新奇性追求からT3 の社会文化的適応へ偏回帰係数が有意ではなかった。よって、T0 の新奇性追求からT2 の社会文化的適応への影響は有意であるが、T2 の新奇性追求からT3 の社会文化的適応への影響は有意ではないと判断した。

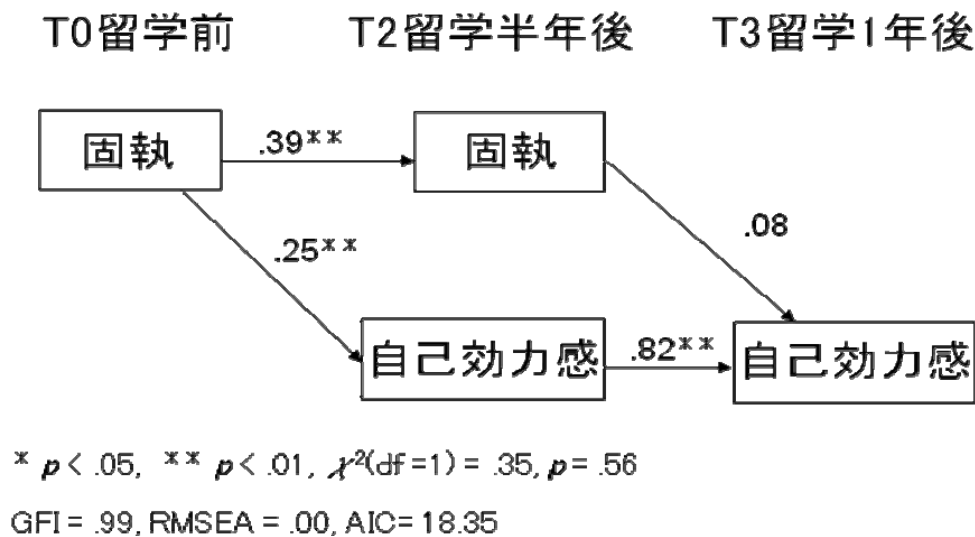


Figure 7.2.4 固執と自己効力感の因果モデル

固執と自己効力感の因果モデルの適合度は良かったが、T0 の固執からT2 の自己効力感へのパス係数が高くなかった。T2 の固執からT3 の自己効力感へのパス係数も有意ではなかった。よって、固執から自己効力感への予測性が弱いことが示唆された。

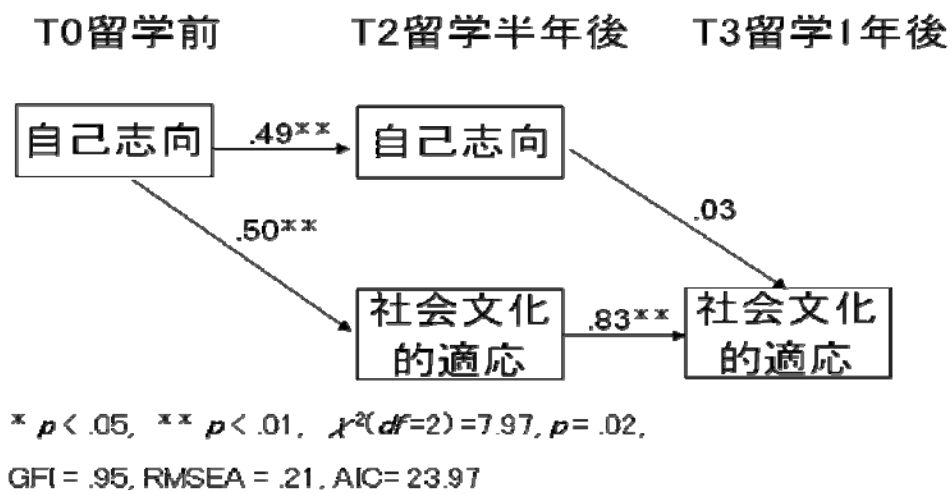
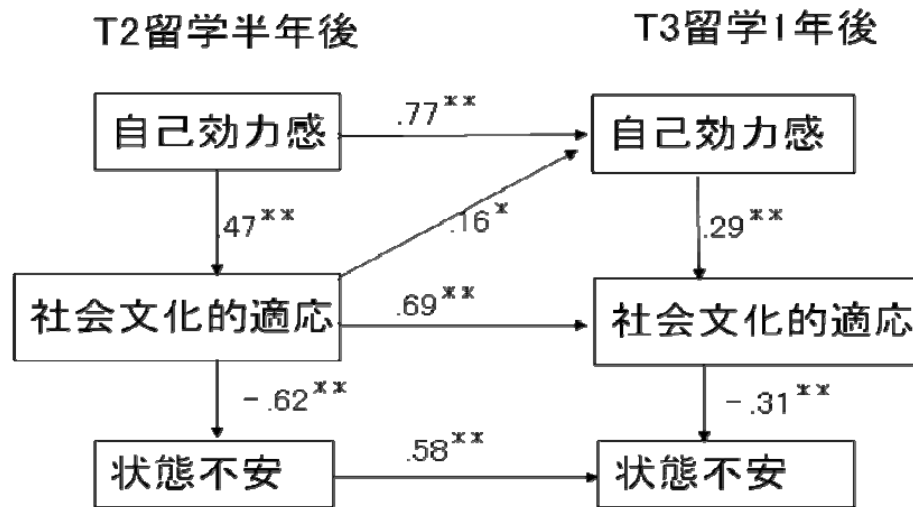


Figure 7.2.5 自己志向と社会文化的適応の因果モデル

自己志向と社会文化的適応の因果モデルの適合度は良くなかったため($p = .02$, RMSEA= .21), このモデルが支持されなかった。

要するに, 損害回避と自己効力感, 損害回避と社会文化的適応の間に一定な因果関係が認められたが, 自己志向と社会文化的適応の因果関係は認められなかった。新奇性追求と社会文化的適応, 固執と自己効力感の因果関係については, T0 時点からT2 時点への影響性だけが認められた。

3つの適応変数間の因果関係も検討した (Figure 7.2.6)。

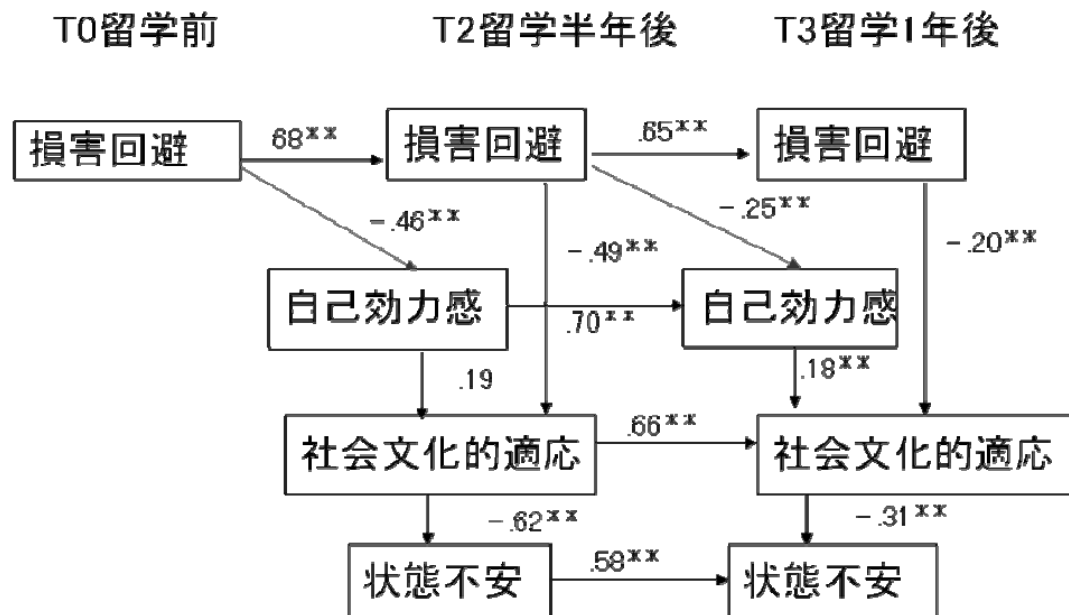


** $p < .01$, $\chi^2(df=7)=6.41$, $p = .49$ GFI = .97, RMSEA = .00, AIC= 34.41

Figure 7.2.6 異文化適応変数間の因果モデル

異文化適応変数間の因果モデルには、いずれの適合度も十分高い値であった ($\chi^2(df=7)=6.41$, $p = .49$, GFI = .97, RMSEA = .00, AIC= 34.41)。T2およびT3同時点では、「自己効力感→社会文化的適応→不安」という適応変数間の影響の流れが確認された。さらに、T2の社会文化的適応からT3の自己効力感へのパスも認められた。つまり、自己効力感が高い人は、社会文化的適応がより良好である一方、社会文化的適応の向上がその後の自己効力感を高めることが示唆されている。

そして、自己効力感および社会文化的適応の強い予測因子である損害回避を加え、3時点の損害回避と3つの適応変数間の因果関係をパス解析で分析した。その結果、Figure 7.2.7に示したモデルの適合度が最も良かった。「損害回避→自己効力感→社会文化的適応→不安」と「損害回避→社会文化的適応→不安」という2つの流れが示された。損害回避は同時点の社会文化的適応に直接な影響を与える一方、次の時点における自己効力感を媒介してからその後の社会文化的適応に間接的な影響も及ぼすことが示唆される。



** $p < .01$. $\chi^2(df=21) = 15.43$, $p = .80$, GFI = .94, RMSEA = .00, AIC = 69.99

注) 誤差項は省略

Figure 7.2.7 損害回避と異文化適応変数の総合因果モデル

考 察

本研究では、パーソナリティから異文化適応への影響を 3 時点の縦断調査で検討することを目的とした。

相関分析の結果から、前時点のパーソナリティ特性と次の時点における異文化適応変数の間に、様々な相関関係が見られた。TCIパーソナリティ特性の 7 次元の間にも相互相関があることを考慮し、T2 と T3 における各適応変数を従属変数とした重回帰分析を行い、TCI 7 次元から各適応変数への予測性を検討した。その結果、T0 の新奇性追求、損害回避および自己志向が T2 の適応状態を、T2 の損害回避と報酬依存が T3 の適応状態を、T0 の新奇性追求、損害回避、自己志向および自己超越が T3 の適応状態を予測したことが示された。

以上の相関分析と重回帰分析の結果、および研究 6 の横断調査で得られたパーソナリティと各適応変数間の相関関係を参考にした上で、新奇性追求、損害回避、固執、および自

自己志向と異文化適応の間に因果関係を持つと推測し、パス解析でさらに検討することにした。その結果、損害回避から自己効力感と社会文化的適応への影響は 3 時点のデータにおいて支持された。個人の損害回避が高いと、その後の自己効力感と社会文化的適応を低下させることが示唆された。

新奇性追求と異文化適応の因果関係については、Table 7.2.5 の重回帰分析の結果（T0 の新奇性追求から T3 の社会文化的適応への影響）と合わせて考察すると、T0 の新奇性追求から T2、T3 の社会文化的適応への予測性が比較的に高く安定していることが示された。つまり、留学前における高い新奇性追求が留学後の社会文化的適応の低さにつながることを示唆されている。しかし、留学後の新奇性追求得点とその後の適応状態の関連性は弱かったり、逆方向になったり、一致していない結果が得られた。

固執から異文化適応への影響も T0 から T2 への部分だけが認められた。T0 の固執が T2 の自己効力感にポジティブな影響を及ぼしたことが示されている。つまり、留学前に固執性の高い人が、留学後の自己効力感がより高いことが示唆された。

自己志向と適応の因果モデルは支持されなかったが、相関と重回帰の結果を見ると、T0 の自己志向は T2、T3 の社会文化的適応と関連することが示唆されている。つまり、留学前に自己志向の強い人が留学後の社会文化的適応がよりよい。

そして、損害回避と異文化適応変数の総合因果モデル（Figure 7.2.7）によって、損害回避と 3 つの異文化適応変数間の関連が示された。損害回避は同時点の社会文化的適応に直接な影響を与える一方（T2 と T3 時点で：損害回避→社会文化的適応→不安）、次の時点における自己効力感を媒介してからその後の社会文化的適応に間接的な影響も及ぼすことが示唆されている（T0 損害回避→T2 自己効力感→T2 社会文化的適応→T2 不安）。

第7章の総合考察

本章の研究6と研究7は、TCI気質・性格特性の7因子から異文化適応変数への影響について横断データと縦断データを併用し詳しく検討した。1時点のデータによって、損害回避は異文化適応に対して大きなリスク要因になる、固執、自己志向および協調性は異文化適応の促進要因になるという結果が得られ、仮説が支持された。さらに、3時点の縦断データで因果順序を検討した結果、T0（留学前）とT2（留学半年後）の損害回避がそれぞれT2（留学半年後）とT3（留学1年後）の自己効力感および社会文化的適応を予測したことが示唆されている。つまり、損害回避は現時点の適応状態を規定すると同時に、半年後の適応状態にも影響を与えることが明らかになった。損害回避が高いと、新環境に潜んでいるリスクを感じやすいため、異文化接触または異文化の人を避ける方略を取る可能性が高いので、その後の異文化適応を妨害すると理解できる。そして、横断研究の結果によって、新奇性追求と適応との間に相関関係が見られなかったが、縦断研究では、T0の新奇性追求からT2およびT3の社会文化的適応へのネガティブな影響が示された。新奇性追求から適応への影響における遅延効果があるかもしれない。また、T0の固執および自己志向とT2の社会文化的適応との間にも因果関係が示されたが、T2の固執および自己志向とはT3の適応との間には有意な関連性が認められなかった。よって、留学半年後の新奇性追求、固執および自己志向から1年後の適応状態への影響は弱いと考えられる。自己超越と状態不安の関連に関しては、同時点で正の相関があったことから自己超越の高い人が留学中に感じたストレスも高いという関連性は見られたが、3時点の因果関係分析結果によって自己超越からその後の精神状態への予測性は検証されなかった。

第 8 章 リソースの媒介作用

前章は、パーソナリティだけに焦点をあて、それと異文化適応との関連を検討したが、本章では、パーソナリティがどのように異文化適応に影響を与えるか、そのメカニズムを解明するため、個人の内的リソースと外的リソースに注目し、パーソナリティと異文化適応の間におけるリソースの媒介作用を検討する。

8.1 パーソナリティと異文化適応の間：リソースの媒介作用（研究 8）

目 的

Hobfollのリソース理論によって、留学行動に伴う母国で持っていたリソースの減少または喪失が異文化適応中のストレスの大きな原因と推測される。そして、異文化に適応していく過程は喪失したリソースを新たに獲得していく過程であると考えられる。したがってある時点で見れば、より多くの必要なリソースを獲得できた留学生は、その適応状態もよりよいものであると予測される。本研究では、どのような人がより多くのリソースを得られるか、個人のパーソナリティとリソースの関連を検討する。そして、パーソナリティがどのようにリソースと絡みながら、異文化適応に影響を与えるのか、パーソナリティと異文化適応の間における内的リソース（リソース管理力およびサポート追求度）、外的リソース（ソーシャル・サポート）の働きを検討しながら、そのメカニズムを解明していくことを目的とする。

方 法

使用データ 調査Ⅱと調査Ⅲのデータ（第3章を参照）

調査対象者

在日中国人留学生 251 名（男子 121 名，女子 130 名）；年齢 20—24 歳（ $M=21.53$, $SD=0.81$ ）であった。ソーシャル・サポートを獲得するプロセスを検討する目的と，来日 1 年間で留学生の精神状態が低下した（井上・伊藤，1997）ことを考慮し，今回の調査対象者を，来日期間が半年以上から 1 年以下の中国人留学生に限定した。今回の対象者は，全員日本語能力試験 2 級以上であった。

調査手続き

2008 年中，東京都と金沢市にある 4 年制大学から 4 ヶ所を選出し，各大学の国際交流センターの教員を通じて，在籍している中国人留学生（来日半年以上 1 年未満者，計 350 名）に調査票（すべて中国語）を配布した。同意を得た上で，無記名で回答を依頼し，1 週間後教員に提出してもらった。合計 251 名分を回収した（回収率 72%）。

質問紙の構成

パーソナリティ： TCI中国語版の短縮版（55 項目）（尺度の内容は研究 2 を参照）

異文化適応変数：社会文化的適応，自己効力感，状態不安（尺度の内容は研究 4 を参照）

リソース管理力：Hobfoll（1998）の「Fitting Resource」理論（序論の 2.4.5 を参照）を参考にして，資源の開発，利用，調達に関する能動性を測定するために，一般人向けの「リソース管理力尺度」を作成した（Table 8.1）。4 件法で評定を求め，算出した合計得点が高いほど，リソース管理力が高いことを示す。

Table 8.1 リソース管理力尺度

あなたは以下のようなことをいつも意識的に行っていますか？				
	殆どない	たまに	時々	常に
1. 常に意識して、周りに存在する様々な不利な要素を調整し、自分に有利な生活・勉強環境を作り	1	2	3	4
2. 常に有効な方法やルートを探し、自分自身または環境に存在する不足を補う。	1	2	3	4
3. 積極的に新しい団体に参加したり、新しい友達を作ったりするように、新しい資源を開拓する。	1	2	3	4
4. 回りに潜んでいる様々な資源を探し出す。	1	2	3	4
5. ある目的を果たすために、有形と無形を問わず、あらゆる資源を十分に利用する。	1	2	3	4

SS獲得量：周（1993）の「在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度」を参考に、サポート獲得尺度を作成した。尺度は、4つの領域（学習・対人関係・感情・日常生活）について、それぞれ7項目の合計28項目で構成される。ソーシャル・サポートに関する説明と教示文「日本で留学している間に、周りの人や学校側、日本社会から以下のようなサポートをもらったことがありますか？」に続いて、各項目に描写されたサポート（例：「落ち込んだり、挫けたりするとき、慰めてくれる」）について、実際にもらったことが「非常に少ない（1点）」から「非常に多い（4点）」まで、4件法で評定を求めた。算出した合計得点が高いほど、実際得られたソーシャル・サポートが高いことを示す。

SS追求度：個人のソーシャル・サポートを求める積極性を測るため、サポート追求尺度を作成した。ソーシャル・サポートに関する説明と教示文「日本で留学している間に、あなたが自ら積極的に周りの人や学校側、日本社会にサポートを求めたことがありますか？自分がどれくらい積極的に求めたか、その程度について評価してください」に続いて、各項目（SS獲得量の尺度項目と同じ）に描写されたサポートについて、自ら積極的に求めた程度に対して、「非常に低い（1点）」から「非常に高い（4点）」の4件法で評定を求め、算出した合計得点が高いほど、SS追求度が高いことを示す。

結 果

1. 変数間の相関

本研究では、パーソナリティ、リソース、および適応の関連を検討するため、まず各変数間の相関関係を分析した。

Table 8.2 TCI気質・性格特性と各変数との間の偏相関係数 ($N=251$)

変数	リソース 管理力	SS 追求度	SS 獲得量	自己 効力感	社会文化 的適応	状態 不安	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
新奇性追求	-.07	-.02	.12 *	.07	.01	.03	29.17	4.83	.66
損害回避	-.23 **	.03	.02	-.15 *	-.24 **	.10	20.8	3.59	.72
報酬依存	.06	.16 *	.13 *	.01	.05	-.05	21.73	3.17	.56
固執	.46 **	.16 *	.00	.43 **	.30 **	-.10	7.86	1.87	.63
自己志向	.05	-.07	-.02	.08	.02	-.04	22.31	4.39	.75
自己超越	.08	-.01	.10	.05	.11	.19 **	12.88	4.07	.81
協調	.09	-.09	.00	-.06	.18 **	.08	26.67	4.97	.75
リソース管理力	--	.25 **	.12 *	.43 **	.34 **	-.17 **	13.24	2.22	.69
SS追求度		--	.50 **	.06	.15 *	-.06	64.75	15.34	.95
SS獲得量			--	.00	.22 **	-.22 **	65.44	15.34	.94
自己効力感					.36 **	-.31 **	29.17	4.83	.89
社会文化的適応					--	-.33 **	45.98	7.23	.82
状態不安						--	48.58	10.58	.93

* $p < .05$, ** $p < .01$

年齢・性別・滞在期間を統制した

Table 8.2 は年齢、性別、日本での滞在期間を統制した上で、各変数間の偏相関係数を示している。

TCIの7次元とリソース変数の関連に関して、損害回避および固執がリソース管理力との間に強い相関を示した ($r = -.23, p < .01$; $r = .46, p < .01$)。つまり、損害回避が低く、固執が高い人のリソース管理力がより高いことが示された。報酬依存と固執はSS追求度との間に有意な正の相関が見られた ($r = .16, p < .05$; $r = .16, p < .05$)。新奇性追求と報酬依存はSS獲得量との間に有意な正の相関があった ($r = .12, p < .05$; $r = .13, p < .05$)。即ち、報

酬依存の高い個人はサポートを求める積極性が高く、得られたサポートの量も多いことが示された。

TCI次元と適応変数について、損害回避と固執は自己効力感と有意な相関を持つ ($r = -.15, p < .05$; $r = .43, p < .01$)。損害回避、固執、協調は社会文化的適応と有意な相関がある (それぞれ, $r = -.24$; $r = .30$; $r = .18$; すべて $p < .01$)。自己超越は状態不安と有意な相関が見られた ($r = .19, p < .01$)。

リソース管理力はSS追求度をはじめ、SS獲得量、自己効力感、社会文化的適応、不安とそれぞれ有意な相関がみられた ($r = .25, p < .01$; $r = .12, p < .05$; $r = .43, p < .01$; $r = .34, p < .01$; $r = -.17, p < .01$)。即ち、リソース管理力の高い個人は積極的にソーシャル・サポートを求め、得られたサポートの量が多く、異文化適応状態もよいことが示された。

ソーシャル・サポートでは、個人のSS追求度と実際のSS獲得量との間に強い正の相関が見られた ($r = .50, p < .01$)。即ち、積極的にSSを求めた人は、得られたSSの量も多いことが示された。ソーシャル・サポートと適応との関連については、SS獲得量は社会文化的適応と不安とも有意な相関が見られたが ($r = .22, p < .01$; $r = -.22, p < .01$)、自己効力感との間には、有意な相関が見られなかった ($r = -.001, n.s.$)。SS追求度は社会文化的適応のみに有意な相関が得られた ($r = .15, p < .05$)。

適応変数間の関連について、自己効力感は社会文化的適応と不安とも有意な相関が見られた ($r = .36, p < .01$; $r = -.31, p < .01$)。つまり、自己効力感が高ければ高いほど、社会文化的適応がよく、不安が低いと考えられる。

2. パス解析結果

次に、個人のパーソナリティからリソースおよび異文化適応に至るまでのプロセスを検討するため、変数間の相関関係と仮説モデル (Figure 2.3) に基づき、共分散構造分析を行った。有意でないパスを削除し、再度分析を行い、適合度が最も良くなる時点まで分析を

繰り返した。最終的に得られた変数間の階層関係をFigure 8.1 に示した ($\chi^2 = 75.76, p = .05, GFI = .96, CFI = .96, RMSEA = .04, AIC = 134.76$)。

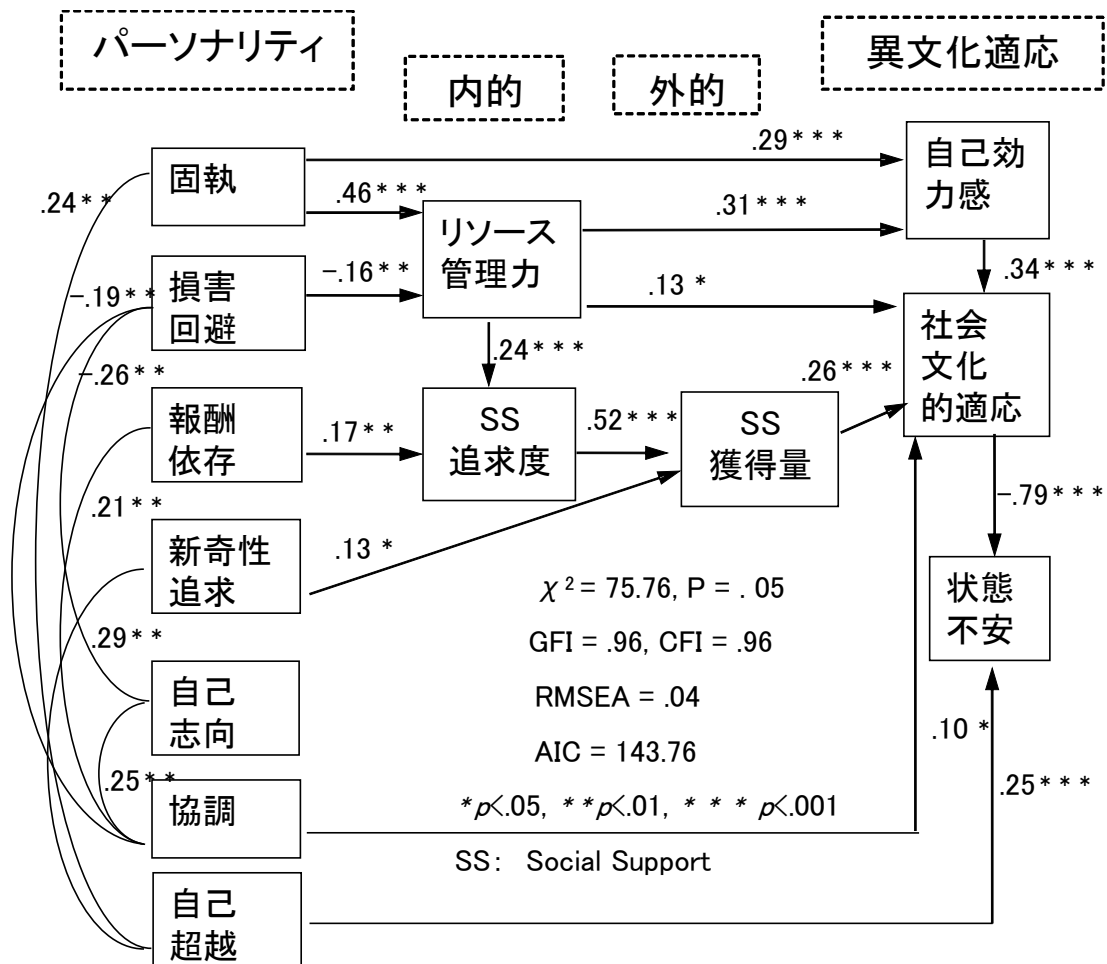


Figure 8.1 パーソナリティとリソース，異文化適応の関連モデル

Figure 8.1 で示した階層関係によって，リソース同士間では，リソース管理力とSS獲得量の間におけるSS追求度の媒介作用が見られた。

リソースと適応の関連について，リソース管理力は直接に自己効力感と社会文化的適応に影響を与える一方，ソーシャル・サポートを媒介して，間接的にも適応に影響を与えているプロセスが示された。SS獲得量は社会文化的適応と状態不安ともに相関があったが，パス解析結果によっては，社会文化的適応のみに直接な影響を与えることがわかった。

パーソナリティは特性ごとに異なるルートで、異文化適応に影響を与えていることが示された。損害回避は、リソース管理力を媒介して、社会文化的適応に影響を及ぼしているのに対し、固執は損害回避のように自己効力感に間接的な影響を与えた一方、直接的な影響も示された。この間接（相乗）効果から、固執の自己効力感への影響度（ $\beta = 0.29 + 0.46 \times 0.31 = 0.43$ ）がより高いことが示唆された。また、報酬依存はSS追求度とSS獲得量を媒介し、新奇性追求はSS獲得量を媒介して、社会文化的適応に影響を及ぼしていることが明らかにされた。協調と自己超越は中間変数を経由せず、それぞれ直接的に社会文化的適応と不安に影響を与えることがわかった。

適応変数間の関連に関しては、自己効力感→社会文化的適応→不安という影響の流れが認められた。よって、パーソナリティおよびリソース変数から不安への直接な影響は少なかったが、自己効力感と社会文化的適応を媒介して不安に間接的な影響を及ぼしていることがわかった。

総合的に見れば、内的リソースから外的リソースへの影響（リソース管理力→SS追求度→SS獲得量）、パーソナリティからリソースへの影響（新奇性追求→SS獲得量、報酬依存→SS追求度→SS獲得量、損害回避・固執→リソース管理力→SS追求度→SS獲得量）、それからリソースから異文化適応への影響（SS獲得量→社会文化的適応→心理的適応）プロセスが明らかにされ、パーソナリティが内的／外的リソースを通じて、異文化適応に影響を及ぼす仮説が支持されたと考えられる。

考 察

1. 内的リソースから外的リソースへの影響

本研究では、予測した内的リソースから外的リソースへの影響は認められた。しかし、リソース管理力からSS獲得量への直接の影響は見られず、SS追求度を媒介してからSS獲得

量に影響を与えることがわかってきた。そこで、すべての人が他人からのサポートを必要
なリソースとみなすのではない可能性がある。一方、やはり得られるソーシャル・サポー
トは個人内要因だけでなく、サポート側がどれくらい提供したかにもよるものであるため、
リソース管理力との関連が薄いのではないか。

2. パーソナリティとリソースの関連

在日中国人留学生におけるパーソナリティからリソースへの影響を検討した結果、損害
回避および固執はリソース管理力との間に有意なパスが見られ、パーソナリティからリソ
ース管理力への影響が示唆されている。損害回避は、行動の抑制に関わる。損害回避が高
い個人は、悲観的、内気、疲れやすいので、周りに存在する資源に対しても回避的で、意
欲的にアプローチしようとはしないと解釈できる。一方、固執とは、一生懸命さ、忍耐の
強度を示すものである。固執の高い個人では、物事に熱心に取り組み、野心的で完全主義
という傾向を持つ。そのため、固執の高い個人は、目的を遂げるに有利な資源に関心が高
く、資源の開発、利用、調達などに意識的に努力するだろう。

パーソナリティとSS追求度について、相関分析結果によっては、報酬依存と固執がSS追
求度と正の相関を持ち、報酬依存と固執の高い個人はSS追求度も高いことが考えられる。
しかし、パス解析結果においては、報酬依存だけがSS追求度に影響を及ぼすことが示され
た。報酬依存とは、行動の維持にかかわり、温かな社交的友好関係、社会的孤立に対する
苦痛、社会的契機に対する共鳴や感受性によって示される。報酬依存の高い人は、社交的、
友好的で、人・物への依存度が高いので、より積極的にソーシャル・ネットワークを作っ
たり、ソーシャル・サポートを求めたりすることが考えられる。職場ストレスに関する研
究においても、調和性 (Agreeableness, ビッグファイブの因子、他者への思いやりの面で
報酬依存の概念に近い) と非仕事関係サポートとの関連が報告されている (Bowling, Beehr,
& Swader, 2005)。

新奇性追求および報酬依存は、SS獲得量との間に正の相関を示したが、それらの相関はやや弱かった。Figure 8.1 のパス解析結果を参照すれば、報酬依存からSS獲得量への有意なパスは見られず、新奇性追求だけがSS獲得量に直接的な影響を及ぼすことが示されている。報酬依存は、SS追求度を介して、間接的にSS獲得量に影響を及ぼすことが示唆された。新奇性追求の高い人は強い好奇心や探究心を持っているから、新しいものを探したり、求めたりすることでより多くの資源を得られるのではないかと推測される。先行研究においても、外向性（Extraversion、ビッグファイブの因子、刺激希求性の面で新奇性追求の概念に近い；新奇性追求と正の相関を持つ、国里・山口・鈴木，2008）の高い人がよりうまく共有資源を利用できることが報告された（Koole et al., 2001）。これまで新奇性追求と自殺傾向（Gau, Chen, Tsai, Lee, Chiu, Soong, & Hwu, 2008）や薬物濫用（Wills, Vaccaro, & McNamara, 1994）との関連など、新奇性追求のネガティブな影響に言及した研究が多かったが、これからは新奇性追求のポジティブな一面も重要視すべきであろう。

損害回避、固執および報酬依存はSS獲得量に直接的な影響を与えなかったが、リソース管理力またはSS追求度を介して、SS獲得量に間接的な影響を与えたことが明らかになった。よって、TCI気質特性の中は、直接的に外的リソースを左右するもの（e.g., 新奇性追求）もあれば、内的リソースを媒介してから、外的リソースに影響を与えているもの（e.g., 損害回避、固執、報酬依存）もあると考えられる。

3. リソースと異文化適応の関連

仮説通り、SS獲得量から社会文化的適応への影響が認められた。ソーシャル・サポートの増加が留学生の社会文化的適応を高めることが示唆されている。SS獲得量と不安との間に直接な関連は見られなかったが、社会文化的適応を介して精神状態に影響を与えることが示されている。しかし、仮説モデルとしては、SS獲得量が自己効力感の向上につながると予測したが、本調査の結果によっては、この仮説が支持されなかった。サポートはあく

まで周りからもらったものなので、一般的な有能感にはつながらなかったのではないかと。一方、金ら（1998）の慢性疾患患者を対象とした研究においては、サポートと自己効力感との関連が検証された。その中、「疾患に対する行動的ソーシャル・サポート」が「健康行動に対する自己効力感」を高めるのに対し、「日常生活における情動的サポート」はその自己効力感を低めることが示された。このことから、サポートの内容によって、サポートと自己効力感との関係性も変わることが考えられる。今後、サポートについては内容別で、自己効力感については領域別でそれらの関連性を検討する必要があると考えられる。

また、仮説では予想されなかったが、リソース管理力と自己効力感との間に強い関連が見られた。自分が能動的に資源を管理しているという統制感または有能感が他人からのサポートより自己効力感につながるのではないかと考えられる。Bandura（1997）においては、個人が感知したリソースと要求の間の適合度は自己効力感と関連することが述べられた。つまり、個人が必要とするリソースの感知量が自己効力感と関連することが指摘されているが、本研究の結果によっては、個人が感知した自己のリソースに対する管理力自体も自己効力感につながることを示唆されている。

以上の結果から、リソース管理力は自己効力感と社会文化的適応に直接関連する一方、SS追求度とSS獲得量を媒介して異文化適応にも影響を及ぼすことが明らかになった。

4. パーソナリティとリソースおよび異文化適応

パス解析結果（Figure 8.1）によって、パーソナリティとリソース、異文化適応の関連モデルに良い適合度が得られ、パーソナリティが適応に直接的な影響を与えながら、内的／外的リソースを媒介してから、異文化適応に間接的な影響も及ぼす仮説が支持された。固執、協調性および自己超越はそれぞれ自己効力感、社会文化的適応、状態不安に直接な影響を与える。一方、固執と損害回避がリソース管理力を、報酬依存がSS追求度を、新奇性追求がSS獲得量を媒介して異文化適応変数に間接的な影響を及ぼすことも示された。不安

に対しては、自己超越を除き、パーソナリティやリソースはほとんど直接的な影響を与えなかった。留学生の状態不安を大きく影響する要因は社会文化的適応であることが示された。つまり、多くの個人内要因や環境要因は、直接的に精神状態を左右するのではなく、社会文化的適応を介して、それに影響を及ぼすことを示唆している。Ouarasse & van de Vijver (2005)においても、文化受容態度と心理的適応との間における社会文化的適応の媒介効果が示された。よって、社会文化的適応が精神面の心理的適応に対して、重要かつ直接的な影響要因であることが明らかとなった。

結 論

第 9 章 本論の総括と今後の展望

9.1 第 I 部の総括

本論の第 I 部では、在日中国人留学生のパーソナリティ特徴について検討する際に、留学志向と留学効果による影響を分別するため、それぞれ留学前と留学中の時点で彼らのパーソナリティを測定し、留学志向によるパーソナリティの特徴と留学経験によるパーソナリティの変化について検討を行った。

留学志向者のパーソナリティ特徴を検討したところ、「留学志向有り」の人が「留学志向無し」の人より損害回避が低く、固執性、自己志向および協調性が高いという特徴が示された。つまり、留学というリスクの多い道を選んだ人のパーソナリティにおいて、リスクやストレスから回復しやすい、目標達成するまで諦めない、意志や責任感が強い、社会受容性や協力性が高いといった強みが見出された。逆に考えると、リスクや挫折に強く、尚且つ包容性のある人が異文化環境での留学を選んだ可能性もあるだろう。

そして、異文化環境に適応していく過程の中には、パーソナリティにおいて様々な変化が見られた。留学 1 年目に注目し、3 時点の個人内変化について調べた結果、留学半年後の時点で、損害回避、固執、自己志向、自己超越および協調性において有意な変化が見られた。留学 1 年後の時点では、統計上は有意差が認められなかったが、やや回復する傾向が見られた。また、短期留学生および長期留学生を非留学生と比較した結果も、留学 1 年未満の短期留学生においてのみパーソナリティ（新奇性追求、報酬依存、自己志向、自己超越および協調性）の有意差が見られた。長期留学生のパーソナリティには非留学生との差異が見られず、異文化適応していくうちに、パーソナリティが元に戻ったことが考えられる。そこで、個人内と個人間の比較結果を合わせて見ると、TCIの気質特性には少しずれがあったが、TCIの性格特性には一致したU型曲線変化傾向が見られた。TCI気質・性格特性の理論（Cloningerら、1993；木島、2000；木島ら、1996）によると、「気質」は遺伝的に規定された傾向に関与するものであり、変わりにくい、「性格」は社会学習によって発達

するもので、変わることもあるし、成長しうる。従って、横断調査と縦断調査の結果から、性格因子では一致した変化結果が見られたが、気質因子においては変化があったり、なかったりすることが見られたと考えられる。例えば、損害回避と固執、個人内では変化が認められたが、個人間の基準では有意な変化が見られなかった。したがって、本論の結果はある程度Cloningerらに提唱された気質特性の安定性と性格特性の発達性を支持していると言えよう。

9.2 第Ⅱ部の総括

第Ⅱ部は在日中国人留学生の適応状態とパーソナリティとの関連を検討した。

留学 1 年目の適応状態を追跡観測した結果、社会文化的適応は滞在期間が長くなるにつれて向上したことが見られた。それは Tanaka & Takai (1994)やWard ら (1998)の研究結果と一致し、滞在期間の主効果が認められている。一方、状態不安は留学半年後に有意に高まったことと、自己効力感 は留学 1 年後に有意に低下したことから、留学後に心理的適応状態が低下することが示唆されたと言える。先行研究でも、留学 3 ヶ月後から 1 年間の間における心理的適応の低下が報告されている (Zheng & Berry, 1991; 井上・伊藤, 1997)。

しかし、Lysgaard (1955) による異文化適応のU型曲線仮説は確認できなかった。

心理的適応（自己効力感、状態不安）と社会文化的適応との間に強い相関があることも検証された。1 時点の横断研究の結果によっては、「自己効力感→社会文化的適応→不安」という影響の方向性が認められた。一方、縦断研究では、2 時点の縦断データを用いて遅延効果を検討したところ、T2（留学半年後）の社会文化的適応からT3（留学 1 年後）の自己効力感への予測が示された。つまり、良好な社会文化的適応がその後の自己効力感を高める（社会文化的適応→自己効力感）という逆方向の影響性もあることが示唆されている。今後は、自己効力感と社会文化的適応の相互作用をさらに検討することが必要であろう。社会文化的適応の不安への影響には遅延効果が確かめられなかった。現時点の社会文化的適応状態は同時点の精神状態を規定するという関連性がより強いかもしれない。よって、先行研究では、社会文化的適応が心理的適応に影響を及ぼすという方向性が検証されているが (Berry, 2006)、心理的適応の具体的な内容によって、その影響の方向性が変わる可能性もあるのではないかと。今後はより具体的な、より長い期間での観測が望ましいだろう。

パーソナリティと異文化適応の関連について、相関関係の分析結果、損害回避が低く、固執、自己志向および協調性が高い人の適応状態がよりよいことがわかった。よって、第

I 部で見出された留学志向者のパーソナリティの強みは確かに良好な異文化適応につながることが実証された。そして、因果関係の分析結果によって、留学前の新奇性追求、損害回避、固執および自己志向が留学後の適応状態を予測することができることが示されたが、留学半年後のパーソナリティから 1 年後の適応状態への予測は損害回避以外にほとんど見られなかった。よって、個人が留学前に持っているパーソナリティは異文化適応への影響がより大きいと考えられる一方、パーソナリティの適応への影響における遅延効果も示唆されている。従って、留学 1 年目の間に、パーソナリティにおいては U 型曲線変化傾向が見られたが、心理的適応にはまだ顕著な回復が見られなかったと推測される。先行研究では、滞在期間が 2 年以上の長期留学生の心理的適応状態は出国前と変わらないことが示されている (Zheng & Berry, 1991)。要するに、最も困難が予測される留学初期段階においては、個人の心理機能（適応状態およびパーソナリティ）において様々な変化が起こり得るが、適応していくうちに徐々に元に戻る可能性が高いと考えられる。

一方、適応していく過程で必要なリソースの獲得が重要であると想定し、パーソナリティのリソース（特に、得られたソーシャル・サポート）への影響、そして、パーソナリティとリソース、異文化適応、3 要因間のメカニズムも検討した。その結果、個人のパーソナリティが内的リソース（リソース管理力、サポート追求度）および外的リソース（ソーシャル・サポート）の獲得に影響を与えることが検証された。また、パーソナリティが異文化適応に直接的な影響を与えながら、内的リソースおよび外的リソースを媒介として、適応に間接的な影響も及ぼすことが明らかになった。固執が高く、損害回避が低い人のリソース管理力がより高い；報酬依存の高い人がより積極的に周りにサポートを求める；新奇性追求の高い人がより多くのサポートを得られることが示唆された。そして、内的リソース（リソース管理力、サポート追求度）と外的リソース（サポート獲得量）との関連も検証された。よって、固執および損害回避、報酬依存は内的リソースを介してからサポートの獲得に影響を及ぼすことも示唆された。また、そのうち本論で提案されたリソース管理

力という個人の内的リソースは外的リソースの獲得を規定するだけでなく、個人の自己効力感および社会文化的適応に直接的な影響を及ぼすことも見られた。個人が実際に持っているリソースが適応状態を良くすることがよく知られているが、この結果によっては、個人が感知した自分のリソースに対するコントロール力も直接的に良好な適応感につながっていることがわかってきた。今後はリソース管理力という概念および尺度の開発についてさらに検討する価値が大きいだろう。

9.3 本論の総合考察

本論は中国人留学生を対象として、日本への留学直前から留学 1 年後までの彼らの適応状況について、パーソナリティの視点から検討した。研究結果からは、留学志向者に損害回避が低く、固執性、自己志向および協調性が高いといった特徴が見られた。そして、パーソナリティと異文化適応の関連を検討したところ、それらの特徴は異文化適応にポジティブな影響を与えることが明らかになった。従って、留学生はもともと異文化環境の下で生きていくのに有利なパーソナリティ特性を持っているから、留学を選択した可能性がある。これは個人のパーソナリティと環境の相互作用の結果であるかもしれない。Scarr & McCartney (1983) が提案した「人間と環境間の相互作用」の中に、子どもは加齢に伴い自分の能力に見合った経験を積極的に選ぶようになる例が挙げられている。ここではまさにパーソナリティによる環境の選択である。人間は自分の気質・生活特性に見合う環境を選び、自分の特性を活かし、最大限に能力を発揮させる本能を持っていることが考えられる。留学したい人は留学する方が自分の強みを活用でき、留学をしたくない人は留学しない方が自分にとって最も有利であると分かっている可能性もあるのかもしれない。

そして、留学中の異文化環境において、パーソナリティがリソース（特に外的リソース、ソーシャル・サポート）を動かしながら適応に影響を及ぼしたことも、パーソナリティによる環境への働きかけを示唆している。パーソナリティ（新奇性追求、損害回避、報酬依存、および固執といった気質特性）によって、積極的にサポートを求めたり、利用したりする人もいれば、そうでない人もいる。ソーシャル・サポートの獲得量は直接的に社会文化的適応の良好さにつながるため、異文化適応の過程で損害回避が低く、新奇性追求、報酬依存および固執性が高い人が周りの環境からより多くのサポートを得られ、社会的適応度がより高いと考えられる。しかし、得られたサポートが多ければ多いほど、精神状態が良いとは言い切れない。パス解析結果ではサポート獲得量から心理的適応への直接的な影

響が見られなかった。また、Sun (2013) では精神健康度における損害回避とソーシャル・サポートの交互作用が示されている。つまり、個人のパーソナリティや、需要、状況などによって、必要とされるサポートの内容または量が違うことから、個人の特性やニーズに見合うサポートが最も有効であるだろう。

一方、留学1年の間に現れたパーソナリティの変化は異文化環境によるパーソナリティへの影響と考えられる。つまり、環境からパーソナリティへの作用である。第5章の考察部分にも述べたように、その変化は一時的な「状態」上の変化であり、いずれ最後は本来のパーソナリティに戻るというU型曲線傾向が見られたが、本論の結果はあくまで対象者の平均的な状況または平均的な変動であるため、「極端」な結果が出る場合もあるだろう。例えば、第5章の縦断研究で、留学1年間で留学生の報酬依存においては増加する一方だという結果が見られた。その後は回復するか、またはどのような環境で回復するかは、今後の課題になるが、文化間距離が大きい、異文化の影響力が強い場合、または異文化環境中にその変化が必要となる場合、個人の特性における変化は長期的または永久的なものになる可能性も考えられる。また、個人の特性が自国の文化のなかでもともと抑圧されていた場合、新しい環境によって引き出される場合もあるのではないだろうか。

9.4 本論文の貢献

9.4.1 異文化適応理論

個人と環境の適合性はそれぞれの環境で検討しなければならないため、パーソナリティと異文化適応の関連性を検討する際に、渡航者の元文化と渡航先の文化をそれぞれのペアで考慮する必要がある。本論は、欧米文化圏における異文化適応研究が盛んである中、東アジアの日本の社会文化において、同じ東アジアの中国人留学生のパーソナリティと異文化適応との関連を検討することで、従来の異文化適応に関する実証研究を拡大し、より充実させることに貢献できたといえる。

また、留学生の異文化適応に影響を及ぼす諸要因の中に、個人内要因であるパーソナリティに着目し、日本という異文化環境の中にストレスへの脆弱性が高い（あるいはレジリエンスが高い）留学生集団を予測することができた。

そして、研究8ではこれまで検討されていない、留学生のパーソナリティとソーシャル・サポートなどのリソースとの関連性を検討した。Berry (1996, 2006) が提唱した文化受容理論の中に、文化受容前に既存している要因（FPA）と文化受容中に生じる要因（FDA）それぞれによる異文化適応への影響は論じられているが、FPAとFDAとの関連性は触れていなかった。本論文では、パーソナリティが異文化適応中のリソースの獲得に及ぼす影響を検討することで、FPAによるFDAへの影響およびFPAがFDAを介して異文化適応に影響を与えることが明らかにされた（Figure 9.1）。

さらに、パーソナリティとリソース、異文化適応、3要因間の関連性も検討することによって、パーソナリティがどのようにリソースを介して異文化適応に影響を与えるのか、そのメカニズムが解明された。

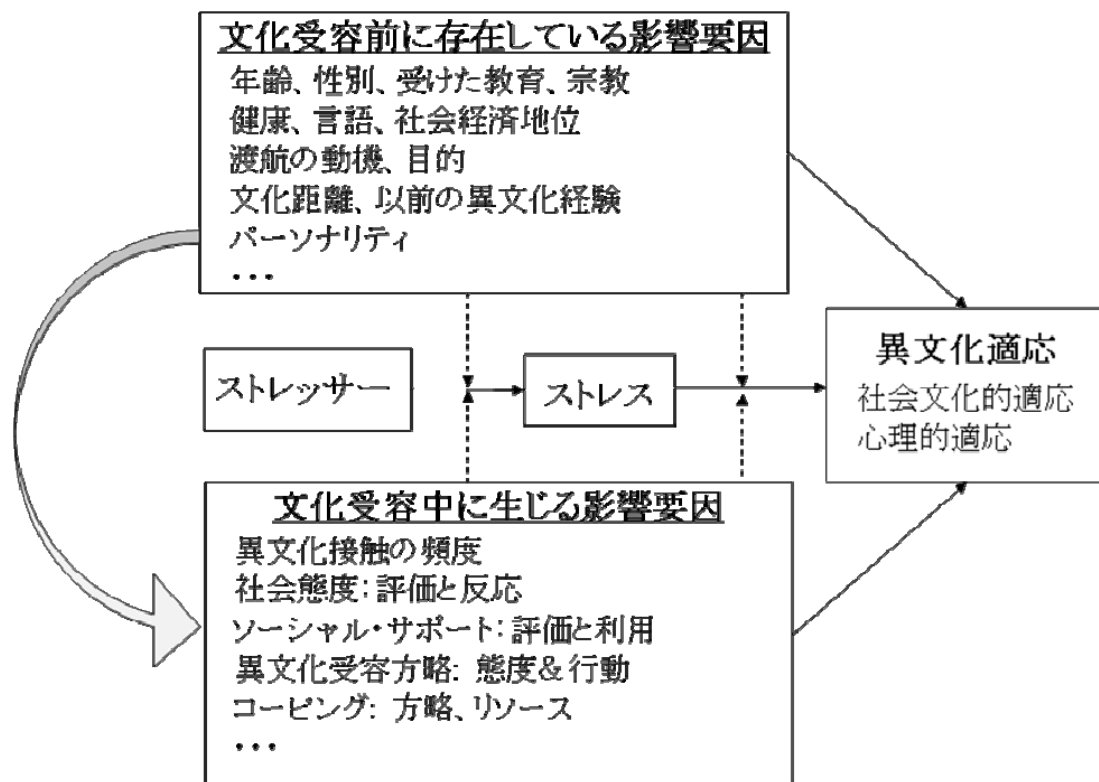


Figure 9.1 異文化適応研究への貢献

9.4.2 リソース理論

Hobfoll (1989) によるリソース維持理論の中に、リソース同士の相互影響が論じられているが、それについての実証研究はまだ少ない。個人のパーソナリティによるリソースへの影響も未だに検討されていない。本論文は、留学初期段階というリソースの獲得過程において、パーソナリティのリソースへの影響およびリソース同士の相互影響を検証した。

また、本論文では、Hobfoll (1998) が提唱したリソースに対する追求や利用など個人の能動性を概念化し、「リソース管理力」というリソース全体の開発・利用・調達に関する個人の能力を取り上げた。そこで、個人の総合的なリソース管理力が実際にソーシャル・サポートへの追求およびサポートの獲得を司ることが検証された。一方、個人のリソース管理力には気質・性格特性の影響が大きいことが分かってきた。よって、リソース利用の最適化を強調する際に、パーソナリティによる個人差も考慮しなければならないだろう。

9.4.3 パーソナリティの発達理論

個人のパーソナリティは変わるか変わらないか、あるいは、パーソナリティのどの側面が変わりやすいかどの側面が変わりにくいか、といった議論が行なわれている中、本論は異文化留学による大きな環境変化が個人のパーソナリティに変化をもたらすと仮定したが、横断および縦断調査の結果によって、留学 1 年目の間に気質・性格特性において一時的な変化が見られたが、その後は元に戻る傾向が示唆された。つまり、環境の変化によるパーソナリティの変化が認められたものの、遺伝によるパーソナリティの安定性がより強い可能性が示唆された。異文化留学に伴う外的環境の変化、および内的環境の変化（例えば、ストレスがかかることによって心身状態が変わる）に適応する際に、個人のパーソナリティにも変化が起きるが、新しい環境に慣れていくうちに環境からの刺激が徐々に減少し、パーソナリティも元の水準に戻ると考えられる。特に、パーソナリティが基本的に形成されている成人の場合、パーソナリティがより安定しているかもしれない。しかし、環境の変化がより大きい場合（例えば、アジア文化圏出身の人が欧米文化圏で留学する場合）、あるいは、対象者がより低年齢の児童の場合、異文化環境がパーソナリティの発達にどのような影響を与えるのかは今後の課題になる。

また、前述したように、本論の結果は、気質特性が変わりにくく、性格特性がより変わりやすいという Cloninger (1993) のパーソナリティ理論を支持したと考えられる。

9.5 パーソナリティ視点からの提言

本論は、人間と環境の相互作用において、個人のパーソナリティによる異文化適応への様々な影響を検討してきた。これらの研究結果は今後留学生の適応問題に介入する際に、パーソナリティの側面からの情報提供や問題解決に役立つ。

異文化環境での留学生活は決して容易なことではないが、留学志向の人にはそれなりに異文化適応に有利なパーソナリティ特性が備わっていることから、過度な心配と干渉は必要ないことが推測できる。そして、留学の初期段階において、心理的機能が少し低下していたとしても適応していくうちに自然に回復する可能性が高い。従って、留学生全体の適応状況についてポジティブに捉えることもできるが、何も関与せずそのまま放置する訳にはいかない。本論の結果はあくまで留学志向者を対象として全体像を捉えたものであるため、実際にすべての留学生が自分の意志によって留学の道を選択したわけでないし、個人のパーソナリティ特性水準が今回の平均水準から離れている場合もあるだろう。従って、留学する前から個々の留学生のパーソナリティを把握しておくことにより、留学後の適応状況についてある程度の予測ができ、その後の改善もしやすいだろう。例えば、個人の損害回避が高く、固執性や協調性が低い場合、異文化適応に不利なパーソナリティ要因を持つと考えられ、異文化適応の過程で他人より苦勞することが予測されるため、留学中に適切なサポートをより多く提供したり、留学中の適応状況についてより細やかに配慮することが望ましい。少なくとも、自分の強みと弱みを知っておくことは、これからの適応状況を予知し、心の準備につながることも考えられる。また、異文化適応に強いパーソナリティ特性を持つ人の場合にも、如何に個人の強みを生かして、適応困難の期間を短くできるかが介入のポイントになると考えられる。そして、高ストレス環境と言われている異文化環境（田中・横田，1992；姚・松原，1990）で、ストレスへの脆弱性が高い集団には、認知、行動、および感情面のサポートが必要となるだろう。特に異文化適応に必要なリソースの提供がストレスの緩衝になると考えられる。しかし、パーソナリティだけに執着する

よりパーソナリティと異文化の適合性をペアで考慮することがより大事である。例えば、序論にも言及したように、外向性と異文化適応との関連性については異なる研究結果が出ている（cf. Ward, 2001）。外向性は異文化適応の促進要因になると思われがちが、文化によって外向性より内向性を持つ人間が好まれることもあるから（Kosic, 2006）、逆に異文化適応にネガティブな影響を及ぼす場合もある。留学生のパーソナリティと異文化がマッチする場合、異文化を（または異文化に）よりうまく受け入れられ、異文化への適応度もより高いと考えられる。従って、留学する前に、個人のパーソナリティだけでなく、留学先の社会文化の特徴も把握しておく必要がある。その両者の適合性がこれからの異文化体験を大きく左右するからである。本論は中国人留学生と日本文化の適合について検討したが、留学生と留学先によってまた適応に有利な要因と不利な要因が違いため、今後はそれぞれに検討しなければならない。Berry（1997）は、渡航者の出身地の社会文化的文脈特性と、留学先の社会文化的文脈特性を両方ともに理解することが必要であると強調した。

最後に、検証されたパーソナリティとリソース、異文化適応との関連モデルによって、TCI パーソナリティ特性の 7 因子がそれぞれ異なるルートで異文化適応に異なる影響を及ぼしていることがわかった。そのゆえ、留学生の適応問題を介入する際に、同じ適応困難という現象が現れても、その背後の原因または経緯が異なる点に留意しないと、適切な解決法を提供することが難しいだろう。また、一つのパーソナリティ特性だけでは適応の結果を決められないことも重要な啓示である。つまり、リスク要因とみなされるあるパーソナリティ特性を持つ人でも、他の要因が的確に促進要因として果たせば、良好な適応状態に至ることができる。本論の研究結果にも示唆されたように、パーソナリティはある程度安定しているため、個人の独特なパーソナリティを変えることは難しいかもしれない。そこで、個人の持つ有利な特性を有効に利用することが適応問題に対応する良策であるだろう。ただし、損害回避と固執による影響がより大きいことも示唆されているため、パーソナリティ要因から異文化適応問題を検討する際に重要視する必要があると言えよう。

9.6 本研究の限界と今後の課題

9.6.1 異文化適応の過程中に現れた心理的变化

本論では、留学 1 年目に注目し、異文化環境を適応していくうちに留学生の異文化適応状態及びパーソナリティにおける変化が検証されたが、その変化傾向についてさらなる検討が望ましい：1) 留学 1 年後からは社会文化的適応がほとんど変わらないか；2) 心理的適応は顕著に回復するのか、いつから回復するのか；3) パーソナリティの変化は顕著な U 型曲線になるのか。この 3 点を解明するためには、今後さらに長期的な追跡調査が必要となる。一方、変化の傾向をより正確に把握するため、より早期から（例えば、留学半年前から）異文化適応の様子を観測し、変化の臨界値を確認することも必要であろう。また、留学中に生じたパーソナリティの変化は異文化接触によるものか、留学中の自立生活によるものか、はっきり区別することは難しいが、今後はより有効な研究手法で両者の影響を分けて検討することが望ましいだろう。

9.6.2 パーソナリティと環境との適合性

留学生のパーソナリティにおける異文化適応の促進因子（低い損害回避、高い固執性・自己志向・協調性）を見出したが、この中、先行研究と一致しているところもあれば（e.g., 損害回避の不安傾向が異文化適応にネガティブな影響を与える）、不一致しているところもある（e.g., 協調性と心理的適応の関連が見られなかった）。従って、序論にも言及したように、パーソナリティ自体が異文化適応の促進/リスク要因であるより、異文化接触者のパーソナリティとホスト国の文化との間の適合性が適応状態を規定することが強調されている（Ward & Chang, 1997）。そのゆえ、本論で検証されたパーソナリティの影響性は、中国人留学生以外の対象者、日本文化以外の文脈（例えば、アジア文化と大きく異なる欧米文化）においても適用できる文化普遍的なものか、あくまで在日中国人留学生の場合にしか適用できない、パーソナリティと環境との適合性の異例であるか、今後、新たな研究を加

え、それぞれのパーソナリティ特性の「文化適合性」についてさらに検討しなければならない。

一方、本論で見出された留学志向者のパーソナリティ特徴は欧米の先行研究で示された移民者の特徴と一致しているところが多く、異文化環境での生活を望む人の共通点であるかもしれない。

9.6.3 異文化環境についての測定

ここでパーソナリティと環境との適合性について考察を行っているが、実際に本論では、パーソナリティについてTCIによって測定したが、日本社会という環境の特徴については測定できなかったことが限界の一つである。先行研究においても、対象者が置かれている異国の文化特徴について測定した研究がほとんど見当たらない。環境の特徴をどのように測定するかは今後の異文化研究にとって大きな課題である。研究の中で、ある社会文化の特徴や両国の文化差について明確に呈示することができれば、パーソナリティと環境の適合性及び、異文化環境によるパーソナリティの変化などについてより詳細に検討することができるだろう。

9.6.4 異文化適応中のリソースの働き

パーソナリティと異文化適応の間における内的リソースと外的リソースの媒介作用およびリソース同士間の相互作用が検証されたが、その関連の安定性および普遍性については今後他のサンプルを用いてさらに検証する必要がある。そして、外的リソースであるソーシャル・サポートと心理的適応との間に直接の関連は見られなかった。それはソーシャル・サポートだけが心理的適応と関連しないか、すべての外的リソースが心理的適応と直接に関連しないか、今後はサポート以外に様々な外的リソースを取り組んで検討することが必要である。また、内的リソースとして取り上げられたリソース管理力という個人内要因の

重要さが示されたが、まだ新しい概念であり、今後はこの概念およびその尺度をさらに充実させる必要があるかもしれない。

9.6.5 異文化適応変数間の関連

本論では、3つの異文化適応変数の関連について、「自己効力感→社会文化的適応→不安」という影響モデルを仮説として検証したが、それらの要因の因果関係を検討する際に（研究 7）、社会文化的適応からその後の自己効力感への影響も示唆された。よって、今後は逆方向で、「社会文化的適応→自己効力感→不安」という影響モデルを確認することが必要であるだろう。

9.6.6 TCI尺度の信頼性

TCI中国語 55 項目版尺度の信頼性について、損害回避や性格次元は比較的高い α 係数を示したが、報酬依存の α 係数は高くなかった。TCIの日本語 125 項目版においても、同様の結果が報告されている（Kijima, Tanaka, Suzuki, Higuchi, & Kitamura, 2000）。米国原版はこれよりやや高い α 係数を示している（Cloninger et al., 1993）。それは報酬依存という概念自体における文化差か尺度項目の内容理解における文化差による問題なのか、今後中国語版尺度の信頼性を高めたうえで、報酬依存とソーシャル・サポートとの関連をさらに検討する必要がある。

9.6.7 調査の対象者

本論は留学生の基本属性（年齢、言語能力、経済状況、留学の目的、留学費用、留学期間、留学学校、生活環境など）をなるべく統制するため、主に集団で来日した交換留学生を対象としたが、これによって本論で得られた結果は留学生一般に応用できるか、一つの限界である。また、非留学生と短期留学生、長期留学生を比較する際に、長期留学生は一般私費留学生であったことと、本論の対象者の中に女子が多いことは在日中国人留学生の

現状を反映しているものの，本論の限界であると考えられ，今後は研究デザインの改善およびサンプルの一般化が課題になる。

補 論

自文化への再適応：

帰国後の適応状態および適応困難の原因

本論文の本論部分では、留学生が異文化環境の下での適応問題について検討してきたが、彼らが帰国した後の自文化への再適応も異文化接触による異文化適応問題の一環として、社会の関心を引き寄せている。そのため、本論の延長線として、本論の対象者である中国人留学生が日本から帰国した後の再適応状態を把握しながら、適応困難の原因について両国の文化差という外的原因以外に、留学生の内面に生じた変化に焦点をあて検討し、補論として論じることを試みる。

目 的

海外での異文化適応に比べて、帰国者の母国再適応はそれほど困難なことではないと思われがちであるが、実際には、序論にも言及したように、滞在先の文化にある程度慣れているため、本国に戻った際には同様に文化的な違いを感じたり (Gama & Pedersen, 1977; Sussman, 1986; Vidal, Valle, & Argon, 2007), 逆カルチャー・ショックを体験したり (Gaw, 2000), 様々な母国再適応の難しさが指摘されている (Gullahorn & Gullahorn, 1963 ; Martin, 1984)。欧米では、1960 年代から既に帰国者の再適応問題に取り込んでいる (Ataca & Berry, 2002)。留学生たちは、移民や難民と異なって、異文化に滞在する期間の長短にかかわらず、いずれ留学期間終了後には母国に帰ることが予定されている。その際に、海外で新しい生活環境に慣れた頃学業を終え、一旦母国に帰ってみると、慣れ親しんだ、よく知っている環境にも関わらず、「何か以前とは違う感じがする」という違和感は、久しぶりに母国に帰国した留学生の多くが体験するものである。ある程度で、今度は母国の文化が「異文化」となっている。そして、留学先で身に付けたことをそのまま母国の生活に持ち込もうとしたり、留学先国の価値観で母国社会の様々な事柄を見てしまったり、周囲との関係がぎくしゃくしてしまうこともある (渋谷, 2006)。生活面をはじめ、学業／仕事面、対人関係面など多くの側面において、帰国後母国社会の自文化への再適応に困難や悩み、ストレスを感じ、不適応を経験している者が少なからず存在している。特に中国人留学生

の場合、米国やイギリス、日本など先進国へ留学するケースが圧倒的で、それらの留学先国から母国に戻った際に感じた西洋文化と東洋文化、先進国と発展途上国、資本主義と社会主義との間の文化差異はより大きいと考えられる。2009年に中国のある一流大学で起きた帰国博士の自殺事件は、留学生の帰国後の再適応問題を社会各界の視野に入れ、社会学と心理学の関心も大きく引き寄せることになった（孔令泉，2009）。そこで、本研究では、日本で留学した中国人留学生の場合に、彼らが帰国した後の再適応状況についてインタビュー調査を行うことで、彼らの再適応状態を把握しながら、適応困難の原因について検討することを目的としている。

両国の社会文化的な差異が再適応困難の原因であるとよく言われるが、日本人帰国者を対象とした研究では、個人の内面に生じた心の変化こそが日本人帰国者に「本質的な違い」を感じさせ、不適応につなげた原因であると指摘された（箕浦，1988）。箕浦は、アメリカから日本に帰ってきた帰国子女の再適応プロセスを2段階で説明した。1）帰国後1年は、母国である日本を外国のように感じ、表面的な違いに対応することに迫られ、2）帰国後2年半から3年が経過した頃に、「本質的な違い」により、帰国子女は心理的不適応を起こすと推察される。その感知された「本質的な違い」とは、「自分の出し方」をめぐる心のありよう（動機・感情のあり方）での違いであると述べられた。また、伊佐（2000）は海外駐在員の妻たちを対象に、滞在期間中に生じた価値観の変化と帰国後の適応問題の関連について検討した。

これまで、中国人（元）留学生が、留学中に生じた内的な変化に触れた研究はあるものの、対日イメージや対日感情など日本観を中心とした研究が多く（岡・深田，1996；葛，1999；葛，2007；孫，2004），内的変化と帰国後の再適応との関連までは結びつけられていない。従って、本研究は、客観的に存在している日中の社会文化の差異が文化差を感じさせる外的原因であると考えられる一方、異文化体験によって留学生自身の価値観や考え

方、パーソナリティなどに生じた心理的変容が本質的な違いを感じさせ、帰国後の再適応困難につながり内的原因であると予想される。

方 法

研究方法

半構造化インタビュー調査

調査対象者

2007－2008年の間に日本で1年間留学した中国人大学生10名（平均年齢＝22歳，男子1名，女子9名）を対象に，彼らが帰国した後に中国現地でインタビュー調査を行った。出国前は10人ともが大学3年生であったが，現時点では大学4年生になった。

調査手続き

2008年10月に，帰国3ヶ月後の元日本留学生10名を対象に，個別でおよそ1時間のインタビュー調査を行った。調査協力者の同意を得た上で，ICレコーダーでインタビュー内容を記録した。

- ①帰国後感じた違和感，及びその時期と原因
- ②感じた日中社会文化の差異
- ③留学経験によって自身に生じた変化（外見，行為，性格，対人関係）

データの分析法

グラウンデッド・セオリー法に基づき，文字化されたデータに対して，コーディングとカテゴリ化を行い，帰国者の不適應の症状，時期，日中文化差および留学生自身の変化について分析した。

注．本研究で使われた「性格」とはCloningerの性格特性ではなく，一般的な意味合いで，個性的な行動パターンを指している。

結 果

1. 文化差異による不適応

1.1 帰国後の不適応

10 人の中、4 人が帰国後の 1-2 日以内に、予想以上に両国の社会文化に存在している差異を感じたと述べた。8 人が、帰国後の 1-2 週内に、様々な不適応感を感じた。主な不適応な症状は、落ち込み、苛立ち、不満、怒り、ストレス感、周囲の人とよく衝突したり喧嘩したりするなどである。一人が、中国の生活環境は日本ほどよくないが、家族や友人が多いため、自国のほうがより居心地よいと述べた。もう一人は、それほど大きな文化差を感じず、どこでも違和感を覚えなかった。不適応を感じた人はほとんど 2 週間から 1 ヶ月をかけてだんだん現状に慣れてきたようである。

1.2 不適応の原因

被調査者の回答によって、感じた不適応の原因は主に、「(両国の) 街と人が違う、(中国では) あちこちが汚い」；「生活環境がよくない、不便なところが多い、学校や職場でのストレスが大きい、すべてのことが順調に進まない」；「学校やお店などのスタッフが態度悪い」；「公的な場所での秩序が悪い。例えば、買い物の人が並ばない、お喋りの声が大きくて、煩い」；「交通規則を守らない」；「国民のマナーや礼儀が日本人と比べるとそれほどよくない」；「人間関係が複雑だ」などが語られた。よって、日中の社会文化において、以下のところに差異が存在していると考えられる：国民の素質（特に公衆場所でのマナーと礼儀）、スタッフの態度、人間関係、生活環境、社会競争など。その中、物質的環境の悪さと施設の不十分より、国民の公德心の欠如および複雑な人間関係が帰国者に不愉快感を与えたと考えられる。

2. 異文化接触による帰国者自身の変容

以上は日中文化差という客観的な原因による帰国者の不適応について述べたが、一方、同じ帰国者の中、外的文化差に影響されない人も少なくない。例えば、本研究の調査対象者の中には、両国の文化差を感じず、帰国後は不適応が生じなかった、また、自国のほうがより居心地がよいと述べた対象者もいた。したがって、本研究は「異文化経験によって帰国者自身の行動方式と価値観における変容」の視点から、異文化が留学生の内面にもたらした影響を通じて帰国者の不適応の主観原因を探る。

2.1 異文化経験による外見上の変化

10名の帰国者の中に半数以上の人々が、帰国後でも意識して日本人のファッションを求め続けている、または無意識だが周囲の人に日本人っぽいと言われているといった変化が分かった。例えば、「留学前より自分の髪型や服装などに気を遣うようになった」；「服の着方や髪型が変わった、日本のファッションが好き」；「必要な場合に化粧するようになった」；「周囲の人に身なりが日本人っぽいと言われている」などが語られた。要するに、日本文化の下で、彼らは日本人のファッションに惹かれて意識して求めている、または無意識に日本人の容姿に対する要求と審美観を徐々に内在化した結果、帰国後にも自分の外見に気を遣ったり、日本人のセンスで身なりを整えたりしている。

2.2 異文化経験による行動上の変化

行動上の変化について語るときに、調査対象者の中、何人かが「マナー」という言葉を言及した。例えば、留学後は「(公的な場所で) マナーにより気をつけるようになった」；「帰国後でも日本で習った良好なマナーを保っている」などが語られた。ほかに、「周囲の人に振舞いが日本人ぽいと言われた」；「対人関係で、より遠慮するようになった」；「よく相手の気持ちを考えるようになった」といった変化も語られた。それらの語りによって、多くの調査対象者が留学中に学んだ日本文化のマナーや対人関係の行動方式を帰国後にも保っていることが見られた。

2.3 異文化経験による性格上の変化

性格上の変化は主に、以前より明るく、大人らしく、独立で、まじめで、自己主張するようになった。例えば、「より明るい」；「より独立で、個人の空間と時間を重視するようになった」；「大人らしい、落ち着くようになった。以前は少し内気で受動的だったが、留学後は適切に自己主張することも大事であることを覚えた」；「留学前より積極的に仕事や勉強を取り込むようになった」；「以前より辛抱つよくなった」「仕事をするときに、前よりもっと真面目になった」など変化が語られた。

2.4 異文化経験による対人関係上の変化

「対人関係上の変化」について深く感じた人は少なかったが、以前にも日本で滞在したことがある2人が以下のように語った。

高校時代に日本で行なわれた一週間の国際交流活動に参加したAさんの感想：

「考え方が少し変わった。中国人の考え方ややり方はより功利的に感じる。それは理解できるが、個人的には好きになれない…日本での留学経験によって、自分はより素直になった。日本人の友人がみんな素直で誠心誠意だから、私もそのほうがいいと思う、これからもそうしたい。」

Aさんは対人関係において、考え方が変わった。彼女は日本語もうまいし、社会活動にも積極的に参加したため、日本人と深く接触した。日本大学生の対人関係が彼女に大きな影響を与えたようである。彼女は功利的でない、素直な友人関係を求めるようになって、帰国後に中国の対人関係に抵抗感を持った。

小学校のときに日本で1年ほど過ごしたことがあるBさんの感想：

「たぶん中国国内の大学生には欧米文化の影響が大きいので、自我がより強くて、考え方もよりopenです。私は小さい頃に日本文化の影響を受けたから、「和」を大事にする。みんなと一緒に何かやる、一緒にシェアすることがとても楽しく思う。一つのものを争って自分の手にするより、みんなが順番で仲良くやるほうが楽しい。そのお互いに相手の気持ちを考慮する穏やかな「和」の雰囲気が好きです。その和やかな気分は表面的なものでも

いい。中国の友人は競争心が強すぎ、中国では（就職や進学のため）他人とリソースをシェアしたくない場合もある。」

Bさんの回答と振る舞いによって、彼女には日本文化の「和」の影響を感じられる。彼女は集団の和睦を大事にする。中国国内の限られている資源による激しい競争に対して不適応感を感じているようである。

考 察

1. 帰国後の不適応の症状

本調査の結果によって、対象者の異文化滞在期間が1年間しかなく、帰国後の不適応期間もそれほど長くないが、それらは長期滞在者と同じようにGullahornの異文化適応W曲線に一致する。帰国直後の1-2日間に大きなギャップを感じ、1-2週間には明らかな不適応を感じた。主な症状は、喪失感、不満、苛立ちである。「喪失感」は先行研究でもよく出てくるが（Lester, 2001）、不満と苛立ちなど情緒を言及するものは少ない。

2. 不適応の外的原因：文化差

外的原因は主に、近年中国の経済発展が速いが、先進国と比べると、生活水準がまだ低い；生活環境がまだ不十分で、様々なところに不便がある；サービス業のスタッフが態度悪い、効率が低い；公共場所の秩序がよくないといったことである。それらの原因で、先進国で留学した人は帰国直後に大きな落差を感じ、不満情緒が生じたと考えられる。留学先の社会環境に馴染んだため、帰国直後は自国の社会環境になかなか慣れないことは理解できる。それは経済発展と社会文化の差異にもたらした心理的不適応と言えよう。

3. 不適応の内的原因：異文化同化度

両国の文化差が帰国者の心理的不適応の原因の一つである。しかし、同じ条件で日本に留学したこの10名の留学生の中でも、2人が帰国後にほとんど不適応を感じなかったと語っ

た。一般的にもそのようである。すべての海外帰国者が文化差によって、不適応を感じるわけではないことである。一部の帰国者は同じく国内と国外の文化差を感知したが、心身上には何の不適応感もない。それはなぜだろう。そこで、個人がどれほど異文化の影響を受けたか、という内的要因を考えなければならない。要するに、「異文化」は確かに存在するが、個人が実際に客観的にその異文化と深く接触せず、または接触したが主観上にはその異文化を認めないまたは受け入れない場合、その異文化は個人の持っている元文化を全く揺さないだろう。従って、その個人が元文化に戻る際には出国前とほぼ変わらなかったため、元文化との衝突も発生しない、心理的不適応も生じないと解釈できよう。逆に、個人がその異文化に大きく同化されるほど、帰国後に不適応をより強く感じる。本研究は異文化により個人に起きた変化からこの仮説を検証した。

本調査の結果によって、調査対象者中、多くの人が一年間の留学生活を経て、無意識的にまたは意識的に自分自身に起きた変化を察したことが分かった。異国文化の影響で、外見から行動、性格から対人関係、様々な面で変化が起きている。また、それらの外的変化はそれぞれ個人の内的価値観を反映していると考えられる。

外見は一見表面的なものであるが、個人の審美観と社会文化を反映している。日本のファッションが好きで帰国後にも求め続けていることは日本人の審美観を認めていることである。自分の外見により気を遣うようになったことは外見に対する意識が高くなったことが示唆されている。帰国後にも日本人のセンスで身なりを整えたりすることは日本人の容姿に対する要求が内在化された結果とみられる。そのため、彼らは帰国直後に中国の街と人が汚いというように感じた。実は彼らの心理的基準が変わった（高くなった）ことも原因の一つであろう。

行動上の変化は主に公共マナーを重視するようになったことである。日本では様々な公共場所でまたは対人関係中にマナーがよく強調される。即ち、日本社会では公德（社会的モラル）が重視される（亀田・村田，2010）。その文化の影響で、中国人留学生の公德心も

徐々に高くなったと考えられる。しかし、日本と比べると、中国の社会文化では公德より私徳のほうが優先される（田，2004）。つまり、日本と中国は同じ集団主義文化ではあるが、社会的モラルを守るべき範囲が異なる。中国人は、家族単位で身内中では思いやり、いたわることが強調されるが、それ以外の集団に対する考慮は乏しい。従って、公德心が高くなった留学生が突然公德心欠如の環境に戻ったとき、国民の公德に対する期待が満たされず、不満情緒が生じたと考えられる。

性格上の変化は、海外での自立生活による影響もあるが（例えば、以前より明るく独立で、自己主張するようになった；より個人の空間と時間を重視する）、より積極的に仕事を取り込むことと、物事に対する真面目さの増強は日本文化の影響が大きいと見られる。日本人の仕事に対する責任感と真面目な態度はよく外国人に高く評価される（孫，2004；徐，1996）。特に、サービス業の質の良さは世界的に有名である。このように、個人の仕事態度に対する要求が高くなったため、帰国後に以前は慣れたスタッフの仕事ぶりに「態度が悪い、効率が低い」と感じて、大きな不満を持つようになったと考えられる。

最後に、日本文化が留学生の対人関係に対する価値観にも影響を与えたことが見られる。その中、以前にも日本で滞在した経験があり、日本文化とより深く接触した2人の変化を見ると、日本文化の「和」の精神と日本人大学生の素直な対人態度が個人に認められた上で内面化されている。従って、帰国後に中国の競争性と功利性の強い対人関係に抵抗感を感じたと考えられる。

要するに、留学生の外見、行動、性格、および対人関係における様々な変化は彼らの内的価値観や期待の変化を反映している。そして、それらの内的変化こそが帰国者の不適應の深層原因であると考えられる。Sussman（2001）の研究にも、文化的アイデンティティ（culture identity）の変化が帰国者の不適應の重要な要因であることが指摘されている。それらの結果および、前述した箕浦（1988）や伊佐（2000）の研究結果によって、帰国者の内面に生じた様々な変化から自文化再適應への影響が検証されてきた。よって、今後、

帰国者の自文化への適応を検討する際に、客観的に存在する文化差のほか、個人の異文化同化度（個人がどれほど異文化に影響／同化されたか）も要因として考慮に入れなければならないだろう。また、これからは量的研究を加え、本研究の質的結果の客観性と普遍性をさらに検討することが今後の課題になるだろう。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S. (1989). Attachments beyond infancy. *American Psychologist*, 44, 709-716.
- 秋山 剛 (1992). 異文化教育と自己への洞察について. *現代のエスプリ*, 299, 89-99.
- 安達一雄 (2002). 外国人留学生の日本語能力と異文化適応について. *留学生教育*, 7, 103-119.
- 青木正子・松原達哉 (2010). 中国留学生の来日前と帰国後の自己イメージの変化. *カウンセリング学会*, 43, 大会発表論文集, 159.
- 浅野慎一著 (1997). *日本で学ぶアジア系外国人—研修生・留学生・就学生の生活と文化変容一*. 大学教育出版
- Ataca, B., & Berry, J.W. (2002). Psychological, sociocultural, and marital adaptation of Turkish immigrant couples in Canada. *International Journal of Psychology*, 37(1), 13-26.
- Adler, P. S. (1975). The transitional experience: An alternative view of Cultural Shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15(4), 13-23.
- Aycan, Z., & Berry, J.W. (1996). Impact of employment-related experiences on immigrants' psychological well-being and adaptation to Canada. *Canadian Journal of Behavioural Science*, 28(3), 240-251.
- Bakker, W., van der Zee, K., & van Oudenhoven, J. P. (2003). Individual differences in migrants' attitudes towards cultural adaptation. *Nederlands Tijdschrift voor de Psychologie en haar Grensgebieden*, 58(4), 81-94.
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: W. H. Freeman.
- Bandura, A. (1994). Self-efficacy. In V. S. Ramachaudran (Ed.), *Encyclopedia of human behavior* (Vol. 4, pp. 71-81). New York: Academic Press. (Reprinted in H. Friedman [Ed.], *Encyclopedia of mental health*. San Diego: Academic Press, 1998).

- Benet-Martínez, V., & Haritatos, J. (2005). Bicultural Identity Integration (BII): Components and Psychosocial Antecedents. *Journal of Personality*, 73(4), 1015-1050.
- Berry, J. W. (1970). Marginality, stress and ethnic identification in an acculturated Aboriginal community. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 1, 239-252.
- Berry, J. W. (1980). Acculturation as varieties of adaptation. In A. Padilla (Ed.), *Acculturation: Theory, models and some new findings* (pp. 9-25). Boulder, CO: Westview.
- Berry, J. W. (1991). Understanding and managing multiculturalism. *Journal of Psychology and Developing Societies*, 3, 17-49.
- Berry, J. W. (1992). Acculturation and adaptation in a new society. *International Migration*, 30, 69-85.
- Berry, J. W. (1997). Immigration, acculturation, and adaptation. *Applied Psychology: An international Review*, 46(1), 5-68.
- Berry, J. W. (2006). Stress perspectives on acculturation. In D. L. Sam & J. W. Berry (Eds.), *Acculturation Psychology* (pp. 43-57). New York, NY, US: Cambridge University Press.
- Berry, J.W., & Kim, U. (1988). Acculturation and mental health. In P. Dasen, J.W. Berry & N. Sartorius (Eds.), *Health and cross-cultural psychology* (pp. 207-236). London: Sage.
- Berry, J. W., & Sabatier C. (2010). Acculturation, discrimination, and adaptation among second generation immigrant youth in Montreal and Paris. *International Journal of Intercultural Relations*, 34(3), 191-207.

- Berry, J. W., & Sam, D. L. (1997). Acculturation and adaptation. In J.W. Berry, M.H. Segall, & C. Kagitcibasi (Eds), *Handbook of cross-cultural psychology* (Vol.3, pp. 293-319). Allyn and Bacon.
- Boehmer, S., Luszczynska, A., & Schwarzer, R. (2007). Coping and quality of life after tumor surgery: Personal and social resources promote different domains of quality of life. *Anxiety, Stress & Coping: An International Journal*, 20, 61-75.
- Boneva, B. S., & Frieze, I. H. (2001). Toward a Concept of a Migrant Personality. *Journal of Social Issues*, 57(3), 477-491.
- Boski, P., Callan, V. J., Callois, C., Mills-Evers, T., Rosenthal, D. A., Thomas, D. R., et. al. (1989). Cultural identity. In D. M. Keats, D. Munro & L. Mann (Eds.), *Heterogeneity in cross-cultural psychology: Selected papers from the Ninth International Conference of the International Association for Cross-Cultural Psychology held at Newcastle, Australia* (pp. 124-231). Lisse, Netherlands: Swets & Zeitlinger Publishers.
- Bowling, N. A., Beehr, T. A., & Swader, W. M. (2005). Giving and receiving social support at work: The roles of personality and reciprocity. *Journal of Vocational Behavior*, 67, 476-489.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss: Vol. 3. Loss*. New York: Basic Books.
- Caligiuri, P. M. (2000). Selecting expatriates for personality characteristics: a moderating effect of personality on the relationship between host national contact and cross-cultural adjustment. *Management International Review*, 40, 61-80.
- Caspi, A., Harkness, A., Moffih, T., & Silva, P. A. (1996). Intellectual performance: Continuity and Change. In P. A. Silva & W. Stanton(Eds), *From Child to Adult: The Dunedin Multidisciplinary Health and Development Study* (pp. 83-101). (ファイル A シ

ルバ (著, 編集), ワレン R スタントン (編集), 酒井 厚 (訳) (2010) *ダニーディン 子どもの健康と発達に関する長期追跡研究—ニュージーランドの 1000 人・20 年にわたる調査から—*. 明石書店.

Caspi, A. & Roberts, B. W. (1999). Personality change and continuity across the life course. In L. A. Pervin & O. P. John (Eds.), *Handbook of Personality Theory and Research* (Vol. 2, pp. 300 - 326). New York: Guilford Press.

趙 衛国 (2007). 中国人高校生の異文化適応過程—文化的アイデンティティ形成の要因に注目して—. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 47, 337-346.

中華人民共和国国家統計局 (2009). *中国統計年鑑 2009*. 中国統計出版社.

Church, A.T. (1982). Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91, 540-572.

Cloninger, C.R. (1986). A Unified Biosocial Theory of Personality and its Role in the Development of Anxiety States. *Psychiatric Developments*, 3, 167-226.

Cloninger, C.R. (1987). A systematic method for clinical description and classification of personality variants: A proposal. *Archives of General Psychiatry*, 44, 573-588.

Cloninger C.R. (2008). The Psychobiological Theory of Temperament and Character: Comment on Farmer and Goldberg. *Psychological Assessment*, 20(3), 292-299.

Cloninger, C.R., & Gilligan, S.B. (1987). Neurogenetic Mechanisms of Learning : A Phylogenetic perspective. *Journal of psychiatric research*, 21, 457-472.

Cloninger, C. R., Przybeck, T. R., Svrakie, D. M., & Wetzell, R. D. (1994). *The Temperament and Character Inventory (TCI): A Guide to its development and use*. St. Louis, Missouri: Washington University, Center for Psychobiology of Personality.

Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.

- Cumming, P., Lee, E., & Oreopoulos, D. (1989). *Access: Task Force on Access to Professions and Trades in Ontario*. Toronto: Ontario Ministry of Citizenship.
- 段躍中 (2003). *現代中国人の日本留学*. 明石書店.
- 江畑敬介・箕口雅博・曾 文星・斉藤正彦・原 裕視・丹羽郁夫 (1996). 心理状況. 江畑敬介・曾 文星・箕口雅博(編) *移住と適応: 中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究*(pp.53-69). 日本評論社.
- 江淵一公 (2002). バイカルチュラリズムの研究. *異文化適応の比較民族誌*. 九州大学出版会.
- 榎本 博明, 堀毛 一也, 安藤 寿康 (2009). *パーソナリティ心理学—人間科学, 自然科学, 社会科学のクロスロード—*. 有斐閣アルマ.
- Ervin-Tripp, S. (2011). Advances in the study of bilingualism: A personal view. In V. Cook & B. Bassetti (Eds.), *Language and bilingual cognition* (pp. 219-228). New York, NY, US: Psychology Press.
- Furnham, A. & Bochner, S. (1986). *Culture Shock: Psychological reactions to unfamiliar Environments*. London: Methuen.
- Furukawa, T., & Shibayama, T. (1993). Predicting maladjustment of exchange students in different cultures: A prospective study. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 28, 142-146.
- 元 華 (2002). 日中両国社会文化差異と跨文化交際問題. *亜細亜大学学術文化紀要*, 2, 27-46.
- Gama, E. M. P., & Pedersen, P. (1977). Readjustment problems of Brazilian returnees from graduate studies in the United States. *International Journal of Intercultural Relations*, 1, 46-58.

- Gau, S. F., Chen, Y. Y., Tsai, F. J., Lee, M. B., Chiu, Y. N., Soong, W. T., & Hwu, H. G. (2008). Risk factors for suicide in Taiwanese college students. *Journal of American College Health, 57*, 135-142.
- Gaw, K. F. (2000). Reverse Culture Shock in Students Returning from Overseas. *International Journal of Intercultural Relations, 24*, 83-85.
- Gullahorn, J. E., & Gullahorn, J. T. (1963). An Extension of the U-Curve Hypothesis. *Journal of Social Issues, 19*, 33-47.
- Havighurst, R. J., Kuhlen, R. G., & McGuire, C (1947). Personality development. *Review of Educational Research, 17*, 333-344.
- 早矢仕彩子 (2002). 日本人学生の留学経験と自己に関する意識の変化に関する縦断的研究. *静岡大学人文学部人文論集, 53(1)*, A39-A55.
- 樋口康彦(1997). 留学生のパーソナリティ特性が在日適応感に与える影響について：達成志向性・調和志向性の観点から. *実験社会心理学研究, 37(2)*, 150-164.
- Hobfoll, S. E. (1989). Conservation of resources: A new attempt at conceptualizing stress. *American Psychologist, 44*, 513-524.
- Hobfoll, S. E., & Freedy, J. (1993). Conservation of resources: A general stress theory applied to burnout. In W. B. Schaufeli, C. Maslach, & T. Marek (Eds.) *Professional burnout* (pp.115-133). Washington, DC: Taylor & Francis.
- Hobfoll, S. E. (1998). Stress, Culture, and Community. Plenum Press, New York.
- Hobfoll, S. E., Johnson, R. J., Ennis, N., & Jackson, A. P. (2003). Resource loss, resource gain, and emotional outcomes among inner city women. *Journal of Personality & Social Psychology, 84*, 632-643.
- 星野 命 (1990). 青年期の異文化体験と成長—カルチュアショックを越えて—. *青年心理, 84*, 2-10.

- 井上奈良彦(2007). 日本の国費留学生の異文化的適応—九州大学における複数の事例調査—.
九州コミュニケーション研究, 5, 61-74.
- 井上孝代 (1996). 外国人留学生のアカルチュレーション態度と留学生生活の満足度. 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集, 22, 209-221.
- 井上孝代 (1997). 留学生の発達援助—不適応の実態と対応—. 多賀出版.
- 井上孝代・伊藤武彦 (1995). 来日 1 年目の留学生の異文化適応と健康:質問紙調査と異文化間カウンセリングの事例から. 異文化間教育, 9, 128-142.
- 井上孝代・伊藤武彦 (1997). 留学生の来日 1 年目の文化受容態度と精神的健康. 心理学研究, 68, 298-304.
- 伊佐雅子 (2000). 女性の帰国適応問題の研究—異文化受容と帰国適応問題の実証的研究—. 多賀出版.
- 岩男寿美子・萩原滋 (1987). 留学生が見た日本: 10 年目の魅力と批判. サイマル出版会.
- 岩男寿美子・萩原滋 (1998). 日本で学ぶ留学生. 社会心理学的分析. 勁草書房.
- James (2007). 異文化間適応における言語と対人関係の影響—来日外国人留学生の状況—. 南山大学国際教育センター紀要, 8, 26~46.
- JASSO (2013). 独立行政法人日本学生支援機構, 平成 24 年度外国人留学生在籍状況調査結果 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data12.html 2013 年 2 月 18 日.
- 徐 光興 (1996). 帰国留学生の対日イメージと態度に関する研究. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 43, 87-95.
- 徐 光興・蔭山英順 (1994). 在日中国人留学生の適応に関する実態と問題. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 41, 39-47.
- Jopp, D., & Rott, C. (2006). Adaptation in very old age: Exploring the role of resources, beliefs, and attitudes for centenarians' happiness. *Psychology and Aging*, 21, 266-280.

- Judge, T. A. & Ilies, R. (2002). Relationship of personality to performance motivation: A meta-analytic review. *Journal of Applied Psychology*, 87, 797-807.
- 加賀美常美代 (1994). 異文化接触における不満の決定因—中国人就学生の場合—. *異文化間教育*, 8, 122.
- 亀田達也・村田光二 (2010). *複雑さに挑む社会心理学 (改訂版) —適応エージェントとしての人間—*. 有斐閣アルマ.
- Karoly, P., Okun, M.A., Ruehlman, L.S. & Pugliese, J. A. (2008). The impact of goal cognition and pain severity on disability and depression in adults with chronic pain: An examination of direct effects and mediated effects via pain-induced fear. *Cognitive Therapy and Research*, 32(3), 418-433.
- 加藤厚・加藤隆勝 (1984). 帰国高校生におけるアイデンティティの特徴. *筑波大学心理学研究*, 6, 57-66.
- 葛 文綺 (1999). 留学生の異文化適応に関する研究—来日目的, 対日イメージと適応度との関連を中心に—. *名古屋大学教育学部紀要 (心理学)*, 46, 287-297.
- 葛 文綺 (2007). 中国人留学生・研修生の異文化適応. 溪水社.
- 吉 洪(1999). 中国人留学生のビリーフ・システムと学習態度・意欲が異文化適応に与える影響. *学生相談研究*, 20(2), 143～152.
- 木島伸彦 (2000). パーソナリティと神経伝達物質の関係に関する研究—Cloningerの理論における最近の研究動向—. *慶應義塾大学日吉紀要 (自然科学)*, 28, 1-11.
- 木島伸彦・斎藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則 (1996). Cloningerの気質と性格の 7 次元モデルおよび日本語版Temperament and Character Inventory (TCI). *精神科診断学*, 7, 379-399.

- Kijima, N., Tanaka, E., Suzuki, N., Higuchi, H., & Kitamura, T. (2000). Reliability and validity of the Japanese version of the Temperament and Character Inventory. *Psycho-logical Reports*, 86, 1050-1058.
- Kim, E. (2009). Multidimensional acculturation attitudes and depressive symptoms in Korean Americans. *Issues in Mental Health Nursing*, 30(2), 98-103.
- 金 外淑・嶋田洋徳・坂野雄二 (1998). 慢性疾患患者におけるソーシャルサポートとセルフ・エフィカシーの心理的ストレス軽減効果. *日本心身医学会誌*, 38, 317-323.
- 木村有伸 (2009). 「異文化適応」論の中の日本人特殊論について. *立命館国際研究*, 22(2), 221-242.
- 孔 令泉 (2009). 海归博士跳楼自杀留遗书称学术圈残酷无信. *民主与法制时报* (新浪新闻中心转载 <http://news.sina.com.cn/s/sd/2009-11-04/111518973661.shtml> 2009 年 11 月 04 日)
- Kobasa, S. C., & Puccetti, M. C. (1983). Personality and social resources in stress resistance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 839-850.
- 小島 勝 (1988). アイデンティティの変化の型とその形成要因 小林哲也代表 科学研究費報告書. *帰国子女の適応に関する追跡研究 (京都大学教育学部)*, 115-119.
- 小島奈々恵・深田博己 (2011). 適応と態度に関する留学生と非留学生の比較. *広島大学心理学研究*, 11, 57-67.
- Koole, S. E., Jager, W., van-den-Berg, A. E., Vlek, C. J., & Hofstee, W. B. (2001). On the social nature of personality: Effects of extraversion, agreeableness, and feedback about collective resource use on cooperation in a resource dilemma. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 289-301.

- Kosic A. (2006). Personality and individual factors in acculturation. In D. L. Sam, & J. W. Berry (Eds.), *The Cambridge handbook of acculturation psychology* (pp. 113-128). New York, NY, US: Cambridge University Press.
- 国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一 (2008). Cloningerの気質・性格モデルとBig Fiveモデルとの関連性. *パーソナリティ研究*, 16, 324-334.
- キャメル・ヤマモト (2007). 鷲の人, 龍の人, 桜の人 米中日のビジネス行動原理. 集英社新
- Lazarus, R.S. (1966). *Psychological Stress and the Coping Process*. New York: McGraw-Hill.
- Lazarus, R.S. & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal and coping*. New York: Springer.
- Lester, J. C. (2001). Strangers in their own land: Culture loss, disenfranchised grief, and reentry adjustment. *Dissertation Abstracts International: The Sciences and Engineering*, 61(9-B): p. 4992.
- Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.
- 前村奈央佳 (2009). 共感力と異文化受容態度との関連性—ゲーミング・シミュレーション実験による検討—. *異文化コミュニケーション*, 12, 69~84.
- 前村奈央佳・小杉考司・藤原武弘 (2006). 他者への共感性が異文化受容態度に及ぼす影響. *日本社会心理学第47回大会*, ポスター発表.
- Martin, J. N. (1984). The intercultural reentry: Conceptualization and directions for future research. *Intercultural Journal of Intercultural Relations*, 8, 115-134.
- Masgoret, A.-M., Bernaus, M., & Gardner, R.C. (2000). A study of cross-cultural adaptation by English-speaking sojourners in Spain. *Foreign Language Annals*, 33, 548-558.

- Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990). Resilient and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444.
- 松原達哉・伊藤咲子 (1982). 海外帰国子女の民族的帰属意識・集団同調性・個人指向性の研究. *東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要*, 1, 5-24.
- 松浦素子・菅原ますみ・酒井厚・眞榮城和美・田中麻未・天羽幸子・詫摩武俊 (2008). 成人期女性のワーク・ファミリー・コンフリクトと精神的健康との関連：パーソナリティの調節効果の観点から. *パーソナリティ研究*, 16(2), 149-158.
- McCrae, R. R. & Costa, P. T., Jr. (1997). Personality trait structure as a human universal. *American Psychologist*, 52, 509-516.
- 箕浦康子 (1988). 日本帰国後の海外体験の心理的再編成過程—帰国者への象徴的相互作用論アプローチ. *社会心理学研究*, 3, 3-11.
- 箕浦康子(1995). 異文化接触の下でのアイデンティティ, 特集：異文化接触とアイデンティティ. *異文化間教育*, 9, 19-36.
- Mol, S. T., Van Oudenhoven, J. P. & Van Der Zee, K. I. (2001). Validation of the Multicultural Personality Questionnaire among an internationally oriented student population in Taiwan. In F. Salili & R. Hoosain (eds.), *Research in multicultural education and international perspectives*, Vol. I: Multicultural education: issues, policies and practices (pp. 167-186). Greenwich, CT: Information Age Publishing.
- Moraitou, D., Kolovou, C., Papasozomenou, C. & Paschoula, C. (2006). Hope and adaptation to old age: Their relationship with individual-demographic factors. *Social Indicators Research*, 76(1), 71-93.
- Morrison, P. A., & Wheeler, J. P. (1976). *The image of 'elsewhere' in the American tradition of migration*. Santa Monica, CA: RAND Corporation.

- 村山 孚 (1995). *中国人のものさし日本人のものさし*. 草思社.
- 西 恵子 (1993). アメリカ滞在が少年期のアイデンティティに及ぼす影響についての一考察. *東京学芸大学海外帰国子女教育センター紀要*, 7, 1-18.
- 王 才康, 刘 勇 (2000). 一般自我效能感与特质焦虑, 状态焦虑和考试焦虑的相关研究. *中国临床心理学杂志*, 8(3), 56-67.
- Oberg(1954). Culture Shock. *Bobbs-Merril Series in Social Sciences*, 1-9.
- 岡 益巳・深田博巳 (1995). *中国人留学生と日本*. 白帝社.
- 岡 益巳・深田博巳 (1996). 日本で就職した中国人元留学生の特徴. *岡山大学経済学会雑誌*, 28(3), 29-45.
- 岡 益巳・深田博巳・周玉慧 (1996). 中国人私費留学生の日本社会への適応とソーシャル・サポートの関係. *岡山大学経済学会雑誌*, 28(1), 1-22.
- 岡 益巳・深田博巳・周玉慧(1996). 中国人私費留学生の留学目的及び適応. *岡山大学経済学会雑誌*, 27, 25-29.
- Ones, D. S. & Viswesvaran, C. (1999). Relative importance of personality dimensions for expatriate selection: A policy capturing study. *Human Performance*, 12, 275-294.
- 大西晶子 (2001). 異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー—文化的アイデンティティ研究を中心に—. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 41, 301-310.
- 大野千里(2002). 在日留学生のアイデンティティと異文化適応の関係. *日本青年心理学会大会発表論文集*, 10, 32-33.
- 大沢理恵子 (1995). 帰国子女のアイデンティティ. 佐藤 (編), *転換期に立つ帰国子女教育* (pp. 87-119). 多賀出版.
- Ouarasse, O. A., & van de Vijver, F. J. R. (2005). The role of demographic variables and acculturation attitudes in predicting sociocultural and psychological adaptation in

- Moroccans in the Netherlands. *International Journal of Intercultural Relations*, 29, 251-272.
- Peng, Y. S., Hsiung, H. H., & Chen, K. H. (2012). The level of concern about Feng Shui in house purchasing: The impacts of self-efficacy, superstition, and the Big Five personality traits. *Psychology & Marketing*, 29(7), 519-530.
- Poleka E., Van Oudenhovenb J. P. & Ten Bergeb J. (2011). *Journal of Immigrant & Refugee Studies*, 9(4), 311-326.
- Ray, J. (1986). The traits of emigrants: A case study of the Sydney Parsees. *Journal of Comparative Family Studies*, 17, 127-130.
- Rayya A., & Motkal H. (2006). Acculturation and Well-Being among Arab-European Mixed-Ethnic Adolescents in Israel. *Journal of Adolescent Health*, 39(5), 745-751.
- Redfield, R., Linton, R., & Herskovits, M.J. (1936). *Memorandum on the study of acculturation. American Anthropologist*, 38, 149-152.
- 李 文利・錢銘怡 (1995). 状态特质焦虑量表中国大学生常模修订. *北京大学学报 (自然科学版)*, 31(1), 108 - 112.
- 劉 音・服部 環 (2012). 在日中華系留学生における異文化適応の促進要因について. *筑波大学心理学研究*, 43, 9-14.
- 斎藤耕二 (1986). 異文化体験と人間形成. *教育と医学*, 34(10), 22-28.
- 斎藤耕二 (1988). 帰国子女の適応と教育: 異文化間心理学からのアプローチ(<特集>海外帰国子女の心理学的課題). *社会心理学研究*, 3(2), 12-19.
- Sam, D. L. (in press). Adaptation of children and adolescents with immigrant background: acculturation or development. In M. H. Bornstein & L. Cote (eds.), *Acculturation and parent-child relationships. Measurement and development*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

- 佐々木ひとみ・水野治久 (2000). 外国人研修生の異文化適応に関する縦断的分析. *日本語国際センター紀要*, 10, 1-16.
- 佐藤由利子 (2011). 元日本留学生の意識と活動—元米国留学生, 非留学生との比較調査から—. *教育学研究*, 78(1), 45-50.
- Scarr, S., & McCartney, K. (1983). How people make their own environments: a theory of genotype greater than environment effects. *Child Development*, 54, 424-435.
- Segall, M. H., Dasen, P. R., Berry, J. W., & Poortinga, Y. H. (1990). *Human behavior in global perspective: An introduction to cross-cultural psychology*. New York: Pergamon. (シーガルM. H.・ダーセン P. R.・ベーリーJ.W.・ポーティンガ Y. H. 田中國夫・谷川賀苗 (訳) (1995). 比較文化心理学 (上巻) 北大路書房)
- Schröder, K. E. E., & Schwarzer, R. (2001). Do partners' personality resources add to the prediction of patients' coping and quality of life? *Psychology & Health*, 16, 139-159.
- Schwarzer, R., Hahn, A., & Jerusalem, M. (1993). Negative affect in East German migrants: Longitudinal effects of unemployment and social support. *Anxiety, Stress, and Coping*, 6, 57-69.
- Schwarzer, R., Mueller, J. & Greenglass, E. (1999). Assessment of general perceived self-efficacy on the internet: Data collection in cyberspace. *Anxiety, Stress, and Coping*, 3(12), 145-161.
- 渋谷由紀 (2006). 海外留学生の帰国後の逆カルチャー・ショックと自文化再適応に関する調査研究. 2004 年度 JAFSA 調査・研究助成プログラム調査研究報告書.
- 嶋田洋徳(2002). セルフ・エフィカシーの評価. 坂野雄二・前田基成(編著), *セルフ・エフィカシーの臨床心理学* (pp. 47-57). 北大路書房
- 周 玉慧 (1993). 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み. *社会心理学研究*, 8, 235-245.

- 周 玉慧・深田博己 (2002). 在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究. *社会心理学研究*, 17, 150-184.
- Shupe, E. I. (2007). Clashing cultures: A model of international student conflict. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 38, 750-771.
- Shwalb, D. W., Nakazawa, J., Yamamoto, T., & Hyun, J. H. (2004). Fathering in Japanese, Chinese, and Korean Cultures: A Review of the Research Literature. In M. E. Lamb (Ed.), *The role of the father in child development* (pp. 146-181). Hoboken, NJ, US: John Wiley & Sons Inc.
- 宋 愛芬・石川利江・神庭直子 他(2006). 在日中国系留学生の異文化適応におけるストレスとソーシャルサポートに関する研究. *桜美林論集*, 33, 109～117.
- 孫 長虹 (2004). 中国人留学生の日本観. *名古屋大学国際言語文化研究科多元文化*, 4, 217-230.
- Stitsworth, M. H. (1989). Personality changes associated with a sojourn in Japan. *Journal of Social Psychology*, 129, 213-224.
- Strelau, J. (1995). Temperament risk factor: The contribution of temperament to the consequences of the state of stress. In S. E. Hobfoll & M. W. deVries (Eds.), *Extreme stress and communities: Impact and intervention* (pp. 63-82). Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
- Sun, Y. (2013). Chinese students in Japan: The mediator and the moderator between their personality and mental health. *International Journal of Psychology*, 48, 215-223.
- Sussman, N. M. (1986). Re-entry research and training: Methods and implications. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 235-254.

- Sussman, N. M. (2001). Repatriation transitions: Psychological preparedness, cultural identity, attributions among American managers. *International Journal of Intercultural Relations*, 25(2), 109-123.
- 鈴木一代(1997). 異文化遭遇の心理学—文化・社会の中の間人—. ブレーン出版株式会社.
- 鈴木有美 木野和代 (2008). 多次元共感性尺度(MES)の作成：自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて. *教育心理学研究*, 56(4), 487-497.
- 田 秀云 (2004). *社会道徳与个体道徳*. 人民出版社.
- 田中麻未 (2010). パーソナリティが中学生の抑うつの変化に及ぼす影響. *パーソナリティ研究*, 18(3), 187-195.
- 田中共子(1996). 異文化間ソーシャル・スキルによる異文化適応の介入研究の展開. *広島大学留学生日本語教育*, 8, 1-10.
- 田中共子(1997). 在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から. *教育心理学年報*, 37, 143-152.
- Tanaka, T., Takai, J., Kohyama, T. & Fujihara, T. (1994). Adjustment patterns of international students in Japan. *International Journal of Intercultural Relations*, 18, 55-75.
- 田中共子・横田雅弘(1992). 在日留学生の居住形態とストレス. *学生相談研究*, 13(2), 51-59.
- Thoits, P. (1994). Stressors and problem-solving: The individual as psychological activist. *Journal of Health and Social Behavior*, 35, 143-160.
- 唐 冰丹 (2012). *中国学生留学十大目的国*. 中国青年出版社.
- 湯 玉梅 (2004). 在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究：対人行動上の困難の観点から. *国際文化研究紀要*, 10, 293-327.

- Tuckman, A. & Widener U. (1997). Personal evolution: Change, development, and psychotherapy. *Dissertation Abstracts International: Section B: The Sciences and Engineering*, 58(1-B), p. 431.
- 于 洪璋 (2006). 中国海外留学人员和「海归派」的状况调研报告. *宁波工程学院学报*, 18(1), 6-17.
- 上原麻子 (1988). 留学生の異文化適応. 広島大学教育学部日本語教育学科 (編), *言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究* (pp. 111-124). 広島大学教育学部日本語教育学科.
- Van der Zee, K., Van Oudenhoven, J. P. & De Grijis, E. (2004). Personality, threat, and cognitive and emotional reactions to stressful intercultural situations. *Journal of Personality*, 72, 1069-1096.
- Vidal, M. E. S., Valle, R. S., & Argon, M. I. B. (2007). The adjustment process of Spanish repatriates: A case study. *International Journal of Human Resource Management*, 18, 1396-1417.
- Ward, C. (1996). Acculturation. In D. Landis & R. Bhagat (eds.), *Handbook of intercultural training* (pp.124-147). Newbury Park: Sage Publications.
- Ward, C. (2001). The ABCs of acculturation. In D. Matsumoto (Ed.), *The handbook of culture and psychology* (pp. 411-445). New York: Oxford University Press.
- Ward, C., Bochner, S., & Furnham, A. (2001). *The psychology of culture shock*. London: Routledge.
- Ward, C. & Kennedy, A. (1992). Locus of control, mood disturbance and social difficulty during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 16, 175-194.

- Ward, C. & Kennedy, A. (1993a). Psychological and socio-cultural adjustment during cross-cultural transitions. *International Journal of Psychology*, 28(2), 129-138.
- Ward, C. & Kennedy, A. (1993b). Where is the "culture" in cross-cultural transition? Comparative studies of sojourner adjustment. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 24, 221-249.
- Ward, C. & Kennedy, A. (1994). Acculturation strategies, psychological adjustment, and sociocultural competence during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 18, 329-342.
- Ward, C. & Kennedy, A. (1996). Crossing cultures: The relationship between psychological and sociocultural dimensions of cross-cultural adjustment. In J. Pandey, D. Sinha, & D.P.S. Bhawuk (Eds.), *Asian contributions to cross-cultural psychology* (pp. 289-306). New Delhi: Sage Publications.
- Ward, C., Leong, C. H. & Low, M. (2004). Personality and sojourner adjustment: an exploration of the Big Five and the Cultural Fit proposition. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 35, 137-151.
- Ward, C., Okura, Y., Kennedy, A. & Kojima, T. (1998). The u-curve on trail: A longitudinal study of psychological and sociocultural adjustment during cross-cultural transition. *International Journal of Intercultural Relations*, 22, 277-291.
- Ward, C., & Rana-Deuba, A. (1999). Acculturation and adaptation revisited. *Journal of Cross-cultural Psychology*, 30, 372-392.
- 渡辺文夫 (1995). 心理学的異文化接触研究の基礎. 渡辺文夫(編), *異文化接触の心理学* (pp.79-97). 川島書店.

Wills, T. A., Vaccaro, D., & McNamara, G. (1994). Novelty seeking, risk taking, and related constructs as predictors of adolescent substance use: An application of Cloninger's theory. *Journal of Substance Abuse*, 6, 1-20.

Wright, S. A. (2004) Perceptions and Stereotypes of ESL Students. *The Internet TESL Journal*, Vol. X, No. 2. <http://iteslj.org/Articles/Wright-Stereotyping.html>

山岸みどり (1995). 異文化間能力とその育成. 渡辺文夫 (編), *異文化接触の心理学とその現状と理論* (pp. 209-223). 川島書店.

姚 霞玲・松原達哉 (1990). 留学生のストレスに関する研究 (1): 生活ストレスを中心に. *学生相談研究*, 11, 1-11.

横林宙世 (2001). 地域・大学の規模による留学生と日本人学生の認知差--留学生の異文化適応要因の観点から. *国際言語文化研究*, 7, 109-122.

Zheng, X., & Berry, J. W. (1991). Psychological adaptation of Chinese Sojourners in Canada. *International Journal of Psychology*, 26(4), 451-470.